

金沢城史料叢書14

金沢城公園整備事業に係る埋蔵文化財調査報告書 5

金 沢 城 跡

—二ノ丸内堀・菱櫓・五十間長屋・橋爪門続櫓 I—

2011

石川県金沢城調査研究所

例 言

1. 本書は、石川県金沢市丸の内地区内に所在する金沢城跡（二ノ丸内堀・菱櫓・五十間長屋・橋爪門続櫓）の埋蔵文化財調査報告書（第1分冊・I）である。
2. 本書では、二ノ丸内堀・菱櫓・五十間長屋・橋爪門続櫓に係る調査のうち、上面遺構調査及び石垣解体調査について報告する。下面遺構調査及び出土遺物については第2分冊・IIにおいて報告する。
3. 調査原因は金沢城址公園整備事業（当時）であり、同事業を所管する石川県土木部公園緑地課が、石川県教育委員会に発掘調査を依頼したものである。
4. 調査は、平成9年度は石川県立埋蔵文化財センターが、平成10・11・13～16年度は石川県教育委員会の委託を受けた財団法人石川県埋蔵文化財センターが実施した。報告書刊行は、石川県金沢城調査研究所が担当した。
5. 調査期間及び担当は次のとおりである。

現地調査

平成9年度

期間 平成9年4月21日～同年12月25日
担当部署 石川県立埋蔵文化財センター 調査第三課
担当者 栃木英道（調査専門員）、兼田康彦（講師）

平成10年度

期間 平成10年6月29日～平成11年3月31日
担当部署 財団法人石川県埋蔵文化財センター 調査第4課
担当者 北野博司（課長）、三浦ゆかり（主任主事）、滝川重徳（主事）、端 猛（主事）、熊谷葉月（主事）、土田友信（講師）、湯川善一（嘱託）

平成11年度

期間 平成11年4月1日～平成12年3月7日
担当部署 財団法人石川県埋蔵文化財センター 調査第4課
担当者 北野博司（課長）、滝川重徳（主事）、端 猛（主事）、熊谷葉月（主事）、土田友信（講師）、湯川善一（嘱託）

出土品整理

平成11・13～16年度 財団法人石川県埋蔵文化財センター 企画部整理課

6. 報告書は、以下の職員が作成し、執筆分担は目次に記した。
富田和気夫（主幹）、滝川重徳（調査研究専門員）、布尾幸恵（嘱託）、丹野修太（嘱託）
7. 調査に関する記録・遺物は石川県金沢城調査研究所で保管している。
8. 調査・報告に際して、次の方々から指導・助言並びに協力を賜った。

石川県立図書館 石川県立歴史博物館 金沢市立玉川図書館 学習院大学史料館
財団法人前田育徳会 文化庁記念物課 吉川弘文館 金森安孝 北浦 勝 北垣聰一郎
北島俊朗 北野博司 楠 正勝 久保智康 沢田正昭 千田嘉博 田中哲夫 新谷洋二
橋本澄夫 平井 聖 森島康雄 森田 守 横山隆昭 吉岡康暢（五十音順、敬称略）

凡 例

1. 本書の水平基準は海拔高を表し、東京湾平均平面水準(T.P.)である。
2. 方位は座標北であり、座標は国土交通省告示の日本測地系第Ⅶ系に準拠した。
3. 石垣については、金沢城内で統一したID番号が付けられており、それを採用した。
ただし解体の対象となった石垣には、ID番号とは別に面ごとにイ〜ワの記号が付されている。
なおワ面は先行して解体した範囲で、チ面の中央北寄りに相当する。
4. 遺構・遺物実測図の縮尺に関しては各図中に示した。
5. 石垣構築技術等に使用される用語について、本書では以下の石垣用語表に記載した。
6. 引用参考文献は、一括して最後に掲載した。

石垣用語表

石垣部分名称

用語	読み	解説
築石部	つきいしぶ	石垣の面部分
隅角部	ぐうかくぶ	石垣の折れ部分、外側に折れるものを出角(ですみ)、内側に折れるものを入角(いりすみ)と呼ぶ
天端	てんば	石垣の上面
天端石	てんばいし	石垣の最上部の石材
裾	すそ	石垣が地面と接する部分
根石	ねいし	石垣の最下段の石
築石	つきいし	石垣を構築する石材、平石(ひらいし)とも言う
間詰め	まづめ	築石の隙間に詰める小振りの石
角石	すみいし	隅角部に使用する石材
角脇石	すみわきいし	角石の側に位置する石材
目地	めじ	石材同士の隙間
勾配	こうばい	石垣の角度。直線のノリと曲線のソリからなる

石垣内部名称

用語	読み	解説
栗石	ぐりいし	築石の裏込などに用いられる円礫
押石	おさえいし	築石のほらみ・ずれを防止するために石尻の後ろに置く石材
介石	かいいし	築石の位置調整のために置く石材
捨石	すていし	栗石の内部に押石・介石に適さない状態で置かれた石材
盛土	もりど	本来の地面の上に盛られた土

積み方名称

用語	読み	解説
布積み	ぬのづみ	石材を横方向に並べながら積む積み方
乱積み	らんづみ	横目地が通らず、不規則に積む積み方
谷積み	たにづみ	石材の長軸を交互に斜めにして積む積み方
算木積み	さんぎづみ	出隅を構成する2面に長い石材の長辺を交互に向けて積み上げる積み方

石材部分名称

用語	読み	解説
面	つら	石材の表面のうち、石垣の表面に位置する部分
大面	おおづら	角石の算木積みで使用した石材の表面のうち、控が大きい面
小面	こづら	角石の算木積みで使用した石材の表面のうち、控が小さい面
控	ひかえ	石材の奥行き
尻	しり	石材の後ろ側
胴	どう	石材の面と尻の間
合端	あいば	石同士の接点

石垣使用石材名称

用語	読み	解説
野面石	のづらいし	加工していない石。自然石・転石とも言う
割石	わりいし	割って、大きさを整えたり、面を造ったもの
粗加工石	あらかこういし	割石をノミ等で粗く加工した石材
切石	きりいし	面や合端までを加工した石材

目 次

第1章	経緯と経過	(富田・滝川)	1
第1節	調査に至る経緯		1
	1. 金沢城公園の開設	(富田)	1
	2. 二ノ丸内堀・菱櫓・五十間長屋・橋爪門続櫓の調査に至る経緯	(滝川)	1
第2節	調査の経過	(滝川)	2
	1. 発掘調査の経過		2
	2. 出土品整理の経過		4
	3. 委員会等		4
第2章	歴史的環境	(滝川・丹野)	5
第1節	金沢城と周辺の歴史	(丹野)	5
第2節	金沢城の沿革	(滝川)	8
第3節	二ノ丸内堀・菱櫓・五十間長屋・橋爪門続櫓の沿革	(滝川)	10
	1. 絵図・文献から見た沿革		10
	2. 石垣と穴生		11
第4節	既往の調査成果	(滝川)	13
第3章	調査の概要	(滝川)	27
第1節	調査報告の対象		27
第2節	調査の方法		27
	1. 調査区画の設定		27
	2. 調査の方法		28
第4章	上面遺構の調査	(滝川)	31
第1節	二ノ丸内堀と周辺の遺構		31
	1. 二ノ丸内堀		31
	2. 石垣		32
	3. 橋・門		32
第2節	菱櫓・五十間長屋・橋爪門続櫓と周辺の遺構		35
	1. 菱櫓・五十間長屋・橋爪門続櫓台		35
	2. 建物		36
	3. 階段		42
第3節	三ノ丸第3次調査区		42
	1. 概要		42
	2. 層位と遺構		43
	3. 小結		43
第5章	櫓(長屋)台石垣の解体調査	(滝川)	110
第1節	櫓(長屋)台石垣解体調査の概要		110
	1. 櫓(長屋)台石垣の概要		110
	2. 解体の方法		110
第2節	櫓(長屋)台の内部構造と石垣		111
	1. 構築・修築の範囲		111
	2. 内部の構造と構築・修築の過程		113
	3. 石垣の特徴		118
第6章	総括	(滝川)	353
第1節	調査の成果		353
	1. 上面遺構調査		353
	2. 石垣解体調査		353
	3. 菱櫓・五十間長屋の変遷等について		356
第2節	橋爪門続櫓台の内部構造と石垣技術書		359
	引用・参考文献		362
	報告書抄録		366
	写真図版		

図版目次

第1図	調査区位置図	2	第69図	菱櫓～五十間長屋(北半)古段階(礎盤(根石))遺構図	104
第2図	遺跡の位置	5	第70図	櫓(長屋)台取付階段遺構図1	105
第3図	周辺の遺跡	6	第71図	櫓(長屋)台取付階段遺構図2	106
第4図	金沢城全体図	15	第72図	二ノ丸階段遺構図	107
第5図	関連絵図1	16	第73図	三ノ丸第3次調査区平面図	108
第6図	関連絵図2	17	第74図	三ノ丸第3次調査区土層断面図	109
第7図	関連絵図3	18	第75図	石垣面名称・解体・修築範囲	127
第8図	関連絵図4	19	第76図	石垣立面図1 ホ面	128
第9図	関連絵図5	20	第77図	石垣立面図2 ニ面	129
第10図	関連絵図6	21	第78図	石垣立面図3 オ・ル・ヌ・リ面	130
第11図	関連絵図7	22	第79図	石垣立面図4 ハ面	131
第12図	関連絵図8	23	第80図	石垣立面図5 口面南	132
第13図	明治期の写真	24	第81図	石垣立面図6 口面中	133
第14図	金沢城跡発掘調査位置図(～平成22年度)	25	第82図	石垣立面図7 口面北	134
第15図	調査区全体案内図	29	第83図	石垣立面図8 チ・ワ面北	135
第16図	近代遺構平面略図	46	第84図	石垣立面図9 チ・ワ面南	136
第17図	内堀(西部・東部)平面図	47	第85図	石垣立面図10 ロ・チ・ワ面	137
第18図	内堀(中央部)・菱櫓・五十間長屋・橋爪門続櫓遺構図	49	第86図	石垣立面図11 イ・ヘ面	139
第19図	調査区全体分割図1	51	第87図	石垣立面図12 卜面	140
第20図	調査区全体分割図2	52	第88図	石材番号図1 ホ面	141
第21図	調査区全体分割図3	53	第89図	石材番号図2 ニ面南	142
第22図	調査区全体分割図4	54	第90図	石材番号図3 ニ面北	143
第23図	調査区全体分割図5	55	第91図	石材番号図4 オ・ル・ヌ・リ面	144
第24図	調査区全体分割図6	56	第92図	石材番号図5 ハ面	145
第25図	調査区全体分割図7	57	第93図	石材番号図6 口面南	146
第26図	調査区全体分割図8	58	第94図	石材番号図7 口面南～中	147
第27図	調査区全体分割図9	59	第95図	石材番号図8 口面中～北	148
第28図	調査区全体分割図10	60	第96図	石材番号図9 口面北	149
第29図	調査区全体分割図11	61	第97図	石材番号図10 チ・ワ面北	150
第30図	調査区全体分割図12	62	第98図	石材番号図11 チ・ワ面中	151
第31図	調査区全体分割図13	63	第99図	石材番号図12 チ・ワ面南	152
第32図	調査区全体分割図14	64	第100図	石材番号図13 イ面	153
第33図	調査区全体分割図15	65	第101図	石材番号図14 ヘ面	154
第34図	調査区全体分割図16	66	第102図	石材番号図15 卜面	155
第35図	調査区全体分割図17	67	第103図	石垣水平断面図1	156
第36図	調査区全体分割図18	68	第104図	石垣水平断面図2	157
第37図	調査区全体分割図19	69	第105図	石垣水平断面図3	158
第38図	調査区全体分割図20	70	第106図	石垣水平断面図4	159
第39図	調査区全体分割図21	71	第107図	石垣縦断面図1 ホ面	160
第40図	調査区全体分割図22	72	第108図	石垣縦断面図2 ホ面	161
第41図	調査区全体分割図23	73	第109図	石垣縦断面図3 ニ面	162
第42図	調査区全体分割図24	74	第110図	石垣縦断面図4 ニ面	163
第43図	調査区全体分割図25	75	第111図	石垣縦断面図5 ニ面	164
第44図	調査区全体分割図26	76	第112図	石垣縦断面図6 オ・ル面	165
第45図	内堀(西部)断面図1	77	第113図	石垣縦断面図7 ヌ面	166
第46図	内堀(西部)断面図2	78	第114図	石垣縦断面図8 ハ面	167
第47図	菱櫓台・内堀(中央部)断面図	79	第115図	石垣縦断面図9 ハ・リ面	168
第48図	内堀(中央部)断面図	81	第116図	石垣縦断面図10 口面	169
第49図	五十間長屋台・内堀(中央部)断面図1	82	第117図	石垣縦断面図11 口面	170
第50図	五十間長屋台・内堀(中央部)断面図2	83	第118図	石垣縦断面図12 口面	171
第51図	五十間長屋台・内堀(中央部)断面図3	84	第119図	石垣縦断面図13 口面	172
第52図	内堀(東部)断面図	85	第120図	石垣縦断面図14 口面	173
第53図	内堀橋・橋爪一ノ門付近断面図	86	第121図	石垣縦断面図15 口面	174
第54図	内堀橋遺構図	87	第122図	石垣縦断面図16 口面	175
第55図	内堀橋遺構図(橋脚中央列)、土層注記・補足	88	第123図	石垣縦断面図17 チ・ワ面	176
第56図	橋爪一ノ門遺構図	90	第124図	石垣縦断面図18 チ・ワ面	177
第57図	内堀東部南岸土層断面図1	91	第125図	石垣縦断面図19 チ・ワ面	178
第58図	内堀東部南岸土層断面図2	92	第126図	石垣縦断面図20 イ面	179
第59図	内堀中央部～東部屈曲部遺構図	93	第127図	石垣縦断面図21 イ・ヘ面	180
第60図	内堀北岸トレンチ土層断面図1	94	第128図	石垣縦断面図22 ヘ・卜面	181
第61図	内堀北岸トレンチ土層断面図2	95	第129図	石垣縦断面図23 卜面	182
第62図	櫓(長屋)台遺構・絵図記載照合図	96	第130図	石垣解体平面図(菱櫓～五十間長屋北半)第2段	183
第63図	菱櫓遺構図	97	第131図	石垣解体平面図(菱櫓～五十間長屋北半)第3段	184
第64図	五十間長屋(北半)遺構図	98	第132図	石垣解体平面図(菱櫓～五十間長屋北半)第4段	185
第65図	五十間長屋(南半)遺構図	99	第133図	石垣解体平面図(菱櫓～五十間長屋北半)第5段	186
第66図	橋爪門続櫓遺構図	101	第134図	石垣解体平面図(菱櫓～五十間長屋北半)第6段	187
第67図	橋爪門続櫓遺構図(礎石北列)	102	第135図	石垣解体平面図(菱櫓～五十間長屋北半)第7段	188
第68図	橋爪門続櫓遺構図(礎石南列)	103	第136図	石垣解体平面図(菱櫓～五十間長屋北半)第8段	189
			第137図	石垣解体平面図(菱櫓～五十間長屋北半)第9段	190

第138図	石垣解体平面図(菱櫓～五十間長屋北半)第10段	191	第205図	押石・敷金等使用色分け図1	ホ面	336
第139図	石垣解体平面図(菱櫓～五十間長屋北半)第11段	192	第206図	押石・敷金等使用色分け図2	ニ面	337
第140図	石垣解体平面図(続櫓)第2段	193	第207図	押石・敷金等使用色分け図3	オ・ル・ヌ・リ面	338
第141図	石垣解体平面図(続櫓)第3段	194	第208図	押石・敷金等使用色分け図4	ハ面	339
第142図	石垣解体平面図(続櫓)第4段	195	第209図	押石・敷金等使用色分け図5	ロ面南	340
第143図	石垣解体平面図(続櫓)第5段	196	第210図	押石・敷金等使用色分け図6	ロ面中	341
第144図	石垣解体平面図(続櫓)第6段	197	第211図	押石・敷金等使用色分け図7	ロ面北	342
第145図	石垣解体平面図(続櫓)第7段	198	第212図	押石・敷金等使用色分け図8	チ・ワ面北	343
第146図	石垣解体平面図(続櫓)第8段	199	第213図	押石・敷金等使用色分け図9	チ・ワ面南	344
第147図	石垣解体平面図(続櫓)第9段	200	第214図	押石・敷金等使用色分け図10	イ・ヘ面	345
第148図	石垣解体平面図(続櫓)第10段	201	第215図	押石・敷金等使用色分け図11	ト面	346
第149図	石垣解体平面図(続櫓)第11段	202	第216図	修築時期別石材法量図		347
第150図	石垣解体平面図(続櫓)第12段	203	第217図	方形矢穴計測表		348
第151図	石垣解体平面図(続櫓)第13段	204	第218図	栗石集計表		349
第152図	石垣解体平面図(続櫓)第14段	205	第219図	菱櫓・五十間長屋・橋爪門続櫓台石垣に見られる刻印一覧 修築範囲別		350
第153図	石垣解体平面図(続櫓)第15段	206	第220図	石垣勾配の比較		351
第154図	石垣解体平面図(続櫓)第16段	207	第221図	解体石材の観察記録		352
第155図	石垣解体平面図(続櫓)第17～20段	208	第222図	五十間長屋台・内堀の構築・修築過程		358
第156図	石垣解体平面図(続櫓)第21・22段	209	第223図	絵図と石垣解体平面図		360
第157図	五十間長屋台東西土層断面図1	210	附図1	石垣立面図1		
第158図	五十間長屋台東西土層断面図2	211	附図2	石垣立面図2		
第159図	五十間長屋台東西土層断面図3	213				
第160図	橋爪門続櫓台北土層断面図	215				
第161図	橋爪門続櫓台東西土層断面図	217				
第162図	五十間長屋・橋爪門続櫓台修築境遺構図	219				
第163図	五十間長屋台Ⅱ面平面図	220				
第164図	五十間長屋台Ⅱ面 鋸始刻石出土状況・土層断面図	221				
第165図	五十間長屋台Ⅲ・Ⅳ面平面図	222				
第166図	橋爪門続櫓台石積遺構平面・立面図	223				
第167図	橋爪門続櫓台石積遺構土層断面・立面図	224				
第168図	控え長別色分け図1	ホ面	291	表目次		
第169図	控え長別色分け図2	ニ面	292	第1表	周辺遺跡地名表	7
第170図	控え長別色分け図3	オ・ル・ヌ・リ面	293	第2表	金沢城の沿革	9
第171図	控え長別色分け図4	ハ面	294	第3表	金沢城跡発掘調査一覧	26
第172図	控え長別色分け図5	ロ面南	295	第4表	菱櫓・五十間長屋・橋爪門続櫓 主要計測値一覧表	44
第173図	控え長別色分け図6	ロ面中	296	第5表	菱櫓・五十間長屋・橋爪門続櫓 礎石・礎盤(根石)計測表	45
第174図	控え長別色分け図7	ロ面北	297	第6表	石垣属性一覧表	124
第175図	控え長別色分け図8	チ・ワ面北	298	第7表	石材観察表	225
第176図	控え長別色分け図9	チ・ワ面南	299	第8表	敷金等出土状況表	328
第177図	控え長別色分け図10	イ・ヘ面	300	第9表	絵図記載主要寸法一覧表	354
第178図	控え長別色分け図11	ト面	301	第10表	石垣・建物等変遷一覧表	357
第179図	面面積別色分け図1	ホ面	302			
第180図	面面積別色分け図2	ニ面	303			
第181図	面面積別色分け図3	オ・ル・ヌ・リ面	304			
第182図	面面積別色分け図4	ハ面	305			
第183図	面面積別色分け図5	ロ面南	306			
第184図	面面積別色分け図6	ロ面中	307			
第185図	面面積別色分け図7	ロ面北	308			
第186図	面面積別色分け図8	チ・ワ面北	309			
第187図	面面積別色分け図9	チ・ワ面南	310			
第188図	面面積別色分け図10	イ・ヘ面	311			
第189図	面面積別色分け図11	ト面	312			
第190図	石材(色調)別色分け図1	ホ面	313			
第191図	石材(色調)別色分け図2	ニ面	314			
第192図	石材(色調)別色分け図3	オ・ル・ヌ・リ面	315			
第193図	石材(色調)別色分け図4	ハ面	316			
第194図	石材(色調)別色分け図5	ロ面南	317			
第195図	石材(色調)別色分け図6	ロ面中	318			
第196図	石材(色調)別色分け図7	ロ面北	319			
第197図	石材(色調)別色分け図8	チ・ワ面北	320			
第198図	石材(色調)別色分け図9	チ・ワ面南	321			
第199図	石材(色調)別色分け図10	イ・ヘ面	322			
第200図	石材(色調)別色分け図11	ト面	323			
第201図	「梘子穴」立面投影図1	チ・ワ面北	324			
第202図	「梘子穴」立面投影図2	チ・ワ面南	325			
第203図	「梘子穴」立面投影図3	イ・ヘ面	326			
第204図	「梘子穴」立面投影図4	ト面	327			

写真図版目次

写真図版1	内堀	調査着手前、近代遺構
写真図版2	内堀	西部全景、西部北岸(石垣2210S)1~6
写真図版3	内堀	西部北岸(石垣2210S)7~13、中央部東岸(石垣2220W)
写真図版4	内堀	中央部全景、三ノ丸西面(内堀入角北東)石垣掘方埋土
写真図版5	内堀	三ノ丸東面石垣(2220W)、中央部南端ピット列、東部全景
写真図版6	内堀	東部全景、東部北岸(三ノ丸南面石垣2230S)1~7
写真図版7	内堀	東部東岸(南門土橋石垣西面2230W)、南岸(鶴ノ丸北面石垣2110N)1~7
写真図版8	石垣立面	五十間長屋台石垣東面(2120E)、橋爪門続櫓台石垣東面(2110E)、二ノ丸北面石垣(2140N)、裏口門土橋石垣東面(2210E)
写真図版9	内堀	内堀橋(橋脚基礎)
写真図版10	内堀	内堀橋(橋脚基礎)、橋爪一ノ門(控柱礎盤)
写真図版11	内堀	西部北岸(石垣2210S)・中央部東岸(石垣2220W)トレンチ土層断面
写真図版12	全景	菱櫓・五十間長屋・橋爪門続櫓台
写真図版13	全景	菱櫓・五十間長屋・橋爪門続櫓台
写真図版14	全景	菱櫓・五十間長屋・橋爪門続櫓台
写真図版15	全景	菱櫓・五十間長屋・橋爪門続櫓台
写真図版16	菱櫓	調査着手前、作業状況、近代遺構
写真図版17	菱櫓	新段階全景、礎石A~F
写真図版18	菱櫓	古段階礎盤(根石)ア・イ
写真図版19	五十間長屋	新段階礎石No.3~7
写真図版20	五十間長屋	新段階礎石No.7~13
写真図版21	五十間長屋	新段階礎石No.13~16
写真図版22	五十間長屋	古段階礎盤(根石)ウ・エ
写真図版23	五十間長屋	古段階礎盤(根石)ウ~オ
写真図版24	橋爪門続櫓	礎石Ⅰ~Ⅲ検出
写真図版25	橋爪門続櫓	礎石Ⅲ~Ⅵ検出、礎石Ⅰ掘方
写真図版26	橋爪門続櫓	礎石Ⅱ~Ⅳ掘方
写真図版27	櫓(長屋)台	橋爪門続櫓礎石Ⅵ掘方、櫓(長屋)台取付階段①~③、二ノ丸階段
写真図版28	階段・	二ノ丸階段、三ノ丸第3次調査区
写真図版29	三ノ丸第3次	根石確認トレンチ
写真図版30	櫓(長屋)台	「鋏始刻石」出土状況、Ⅱ面検出状況
写真図版31	五十間長屋	Ⅲ・Ⅳ面検出、五十間長屋台~橋爪門続櫓台修築境検出、五十間長屋東西部修築境検出
写真図版32	五十間長屋	東西土層断面 SP9
写真図版33	五十間長屋	東西土層断面 SP9、東面胴木
写真図版34	五十間長屋	東西土層断面 SP10
写真図版35	櫓(長屋)台	五十間長屋台東面 SP10、橋爪門続櫓台北土層断面 SP11
写真図版36	橋爪門続櫓	南北土層断面 SP11
写真図版37	橋爪門続櫓	東西土層断面 SP12
写真図版38	橋爪門続櫓	東西土層断面 SP12
写真図版39	橋爪門続櫓	東西土層断面 SP12、石積遺構1・2
写真図版40	橋爪門続櫓	石積遺構1
写真図版41	橋爪門続櫓	石積遺構1
写真図版42	橋爪門続櫓	石積遺構1・2
写真図版43	櫓(長屋)台	寛文・宝暦・文化期修築範囲ごとの石垣構築状況
写真図版44	櫓(長屋)台	寛文・宝暦・文化期修築範囲ごとの石垣構築状況
写真図版45	橋爪門続櫓	文化期修築(敷金等使用状況)
写真図版46	作業状況	解体作業他
写真図版47	石材写真	角石(寛文・宝暦期修築範囲)
写真図版48	石材写真	角石(文化期修築範囲)
写真図版49	石材写真	鬘石
写真図版50	石材写真	築石・粗加工石(寛永期構築・寛文期修築範囲)
写真図版51	石材写真	築石・粗加工石(宝暦・文化期修築範囲)
写真図版52	石材写真	築石・切石(寛文・宝暦期修築範囲)
写真図版53	石材写真	築石・切石(宝暦・文化期修築範囲)
写真図版54	石材写真	刻印
写真図版55	石材写真	矢穴
写真図版56	石材写真	墨(朱)書・「梃子穴」・鉛付着石材他
写真図版57	全景	上面遺構
写真図版58	石垣立面	ホ・ハ・ニ・オ面
写真図版59	石垣立面	ル・ヌ・リ・ハ面
写真図版60	石垣立面	ロ面1~4
写真図版61	石垣立面	ロ面5~7、チ・ワ面1
写真図版62	石垣立面	チ・ワ面2~7
写真図版63	石垣立面	チ・ワ面8~11
写真図版64	石垣立面	チ・ワ面12、イ・ヘ・ト面

第1章 経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

1. 金沢城公園の開設

明治初年から旧金沢城内は兵部省（のちの陸軍省）の所管となり、昭和20年（1945）まで第九師団司令部や歩兵第六旅団司令部、歩兵第七連隊の兵舎が立ち並ぶ陸軍の拠点であった。第二次世界大戦後の昭和24年（1949）には文部省の所管となり金沢大学が開学し、金沢城跡は大学キャンパスとして利用されてきた。

昭和53年（1978）、城内キャンパスは金沢市郊外の角間地区への移転を決定し、平成5年（1993）3月に総合移転を完了した。大学跡地の取り扱いは、平成3年（1991）8月に設置された金沢大学跡地利用懇話会で検討され、平成5年3月の「公園的、文化的利用を基本とする」との提言を受けて、公園化に向けた動きが始まった。

県は、この提言に沿って、平成7年（1995）3月に「金沢城跡整備実施設計報告書」をとりまとめ、平成8年（1996）1月に28.5haを都市公園に利用する都市計画を決定し、同年3月に国から大学跡地21.77haを取得した。平成8年度に始まった金沢城公園整備は、平成16年度（2004）までを公園としての基盤整備とする10カ年計画に基づき、①敷地環境の整備、調査（不要建物の撤去、石垣修景等）、②広場、園地等の整備（二ノ丸等各種広場、幹線園路、便益施設等）、③城郭建造物の復元（菱櫓・五十間長屋・橋爪門続櫓、内堀等）を進めることとした。

公園の開設は、平成9年度（1997）の本丸等の暫定開園に始まり、平成13年（2001）9月の「全国都市緑化いしかわフェア」の開催を期に、公園計画区域のほぼ全域を開園した。

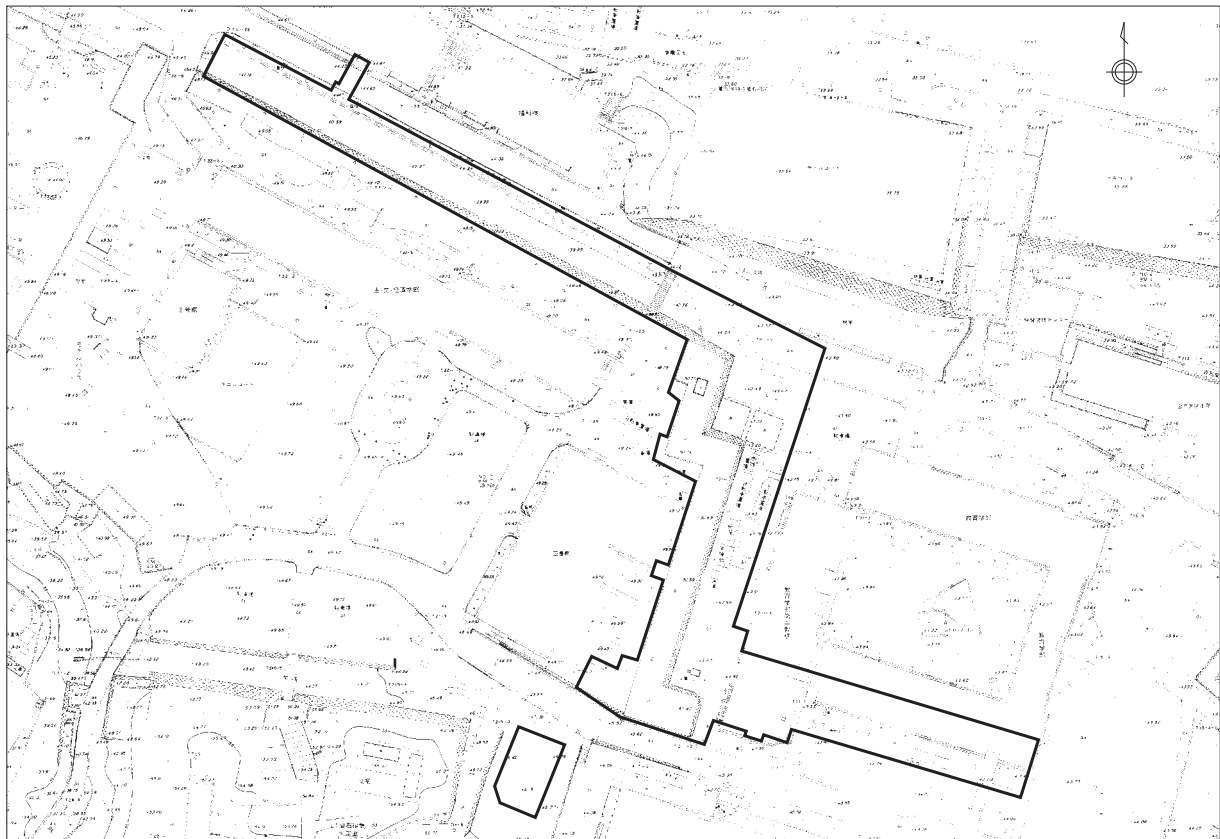
2. 二ノ丸内堀・菱櫓・五十間長屋・橋爪門続櫓の調査に至る経緯

公園整備事業の着手当時、金沢城跡は、周知の埋蔵文化財包蔵地（県番号01215）であり、整備にあたってはそれに与える影響を最小限のものとし、各種復元については事前に発掘調査を行い、整備と学術研究双方に有益な資料の収集に努めるべく、県教育委員会事務局文化財課が、事業を進める土木部公園緑地課と協議を重ねた。

平成9年度（1997）、協議結果に基づいた公園緑地課からの依頼を受け、石川県立埋蔵文化財センターが主体となり、内堀（二ノ丸内堀）及び二ノ丸菱櫓復元に係る発掘調査を実施した。この時点では、城内のランドマークとなる建物として、まず菱櫓が先行して復元される計画であった。

平成10年度（1998）以降、調査の主体は、（財）石川県埋蔵文化財センターに引き継がれた。10年度の調査依頼は、当初、菱櫓南・本丸附段階段・いもり堀・三ノ丸第1次の4地点であったが、5月14日の段階で、菱櫓に連続する五十間長屋・橋爪門続櫓まで復元整備する方針が決定され、発掘調査工程は大きく変更を迫られることとなった。直ちに関係部局間で調査範囲・方法等について協議を重ねたが、この間、上面遺構のみならず、櫓（長屋）台石垣の解体も実施することが決定された。これを受けて6月23日に埋蔵文化財センターが変更調査計画書を提出し、6月29日には櫓（長屋）台石垣二ノ丸側、7月21日には菱櫓南・五十間長屋上面の発掘調査に着手した。当初調査員3名で上面遺構の調査に取り組み、続いて櫓（長屋）台石垣の解体調査には5名体制で臨むこととなった。石垣解体作業の工程管理・安全管理については、土木部公園緑地課より委託を受けた施工業者（住友建設株式会社）が管轄し、埋蔵文化財の調査は施工業者との協議の元を実施した。調査は翌年度も継続し、完了したのは平成11年（1999）7月であった。

なお、発掘調査の完全完了を待たず、平成11年1月より、櫓（長屋）台石垣の積み直し工事が平



第1図 調査区位置図 (S=1/2,000)

0 S=1/2,000 100m

行する形で開始された。工事の完了は平成12年3月である。この他、内堀においても石垣復元を伴う整備工事が実施された。石垣積み直し工事の完了後直ちに建物の復元工事が着手された。復元建物の竣工は平成13年7月である。

第2節 調査の経過

1. 発掘調査の経過

〔平成9年度(1997)〕

当該年度の発掘調査については、土木部公園緑地課の依頼に基づき、石川県立埋蔵文化財センターが実施した。文化財保護法第98条の2第1項に基づく発掘調査通知書は4月21日付けで提出された。現地調査は、二ノ丸内堀・菱櫓を対象に4月21日から12月25日にかけて実施した(内堀第1次調査)。調査面積は約5,500 m²である。

内堀においては、近代以後の整地土・流入土が著しく、また水槽等近代に属する構築物が多く造営されていた。これらについては最低限の記録化を図りつつ順次撤去し、近世の形状の検出を進めた。

最初に着手したのは内堀中央部(1区)であり、続いて6月から東部(2区)に取り掛かった。これらの地区では近世の堆積層は極めて少なく、内堀に架かっていた橋の橋脚基礎周辺のみに見られた。また東部では護岸の石垣の多くが近代に撤去されていた。遺物の多くは近代以後の整地土中に含まれていたが、橋脚基礎周辺では柄鏡、刀、古銭が原位置を保って出土し、大いに注目された。

内堀の南、橋爪一ノ門付近では、やはり近代以降の攪乱が多く見られ、一ノ門も控柱基礎が検出されたのみであったが、近世初期以前の遺構・整地土層は比較的遺存しており、古代・中世まで遡る可能性があるものも散見された。

菱櫓（3区）については9月下旬から調査を実施した。一部に水槽が設けられる等、ここにも近代以後の改変が見られたが、明治期まで存続した櫓の礎石の多くは遺存していた。

10月以降、内堀西部（4～7区）の調査に着手した。この区域の調査では、北岸の大部分が盛土であったことが判明し、現在に至る縄張りは、寛永期に大規模な造成が行われた結果であるとの見解が生じた。このことは、次年度の五十間長屋台の石垣解体調査で、一層明確になった。

なお、12月7日に現地説明会を行った。

【平成10年度（1998）】

当該年度の発掘調査については、土木部公園緑地課の依頼を受けた石川県教育委員会から（財）石川県埋蔵文化財センターに委託され、4月1日付けで業務委託契約が締結された。文化財保護法第57条第1項に基づく発掘調査届出書は4月1日付け及び7月1日付けで提出された。調査区は、本丸附段・三ノ丸第1次・いもり堀第1次・二ノ丸五十間長屋（今回報告、6,850㎡相当）の4地点である。ただし当初の依頼では、五十間長屋（南半）・橋爪門続櫓は対象に含まれていなかった。櫓（長屋）台に係る調査区に着手したのは、6月29日のことである。

6月29日から7月21日にかけては、櫓（長屋）台石垣の二ノ丸側について、近代以後の整地土の除去を行った。7月21日からは櫓（長屋）台上面の掘削に着手した。菱櫓の南側（五十間長屋北半）は、表土直下が栗石となっており、検出には予想以上の手間がかかった。五十間長屋の上面はやや攪乱を受けており、礎石の幾つかは失われていたが、完存していた橋爪門続櫓上面と合わせ、概ね遺存状況は良好であった。10月12日までは、これら建物の遺構の他、櫓（長屋）台に付随していた階段、及び橋爪門続櫓台西側に接する二ノ丸階段の遺構について調査が完了し、空中写真測量を行った。

10月20日からは石垣解体調査に着手した。工事の進行とすり合わせながらの厳しい条件の下、段ごとの石垣上面の精査、石垣解体時の観察、石垣石材の観察、石垣背後の盛土に対するトレンチ調査、遺構面の調査等多岐に及ぶ調査項目をこなすことになった。

解体調査に入って間もない11月6日、五十間長屋台石垣北東角背後において、「鍛始」「鋤始」「宝暦十三癸未年六月廿五日」等の銘が刻まれた、一辺16cm程度の立方体を呈する石材2基（「鍛始刻石」）を検出した。宝暦13年（1763）の石垣修築及び儀礼行為の執行を示す物的証拠の発見であり、12月9日には報道発表を行った。

翌年1月には覆屋が建設され、降雪・降雨に関わらず作業を進めることが可能となったが、照明等の影響で土壌の色調を判別するのに手間取る等、しばらく試行錯誤が続いた。2月に入ると、橋爪門続櫓台の内側で石積遺構を検出し、当時類例の少なかった内部構造に関する新知見として注目された。

なお前年度に調査した、内堀西部北岸石垣については、近代に下る可能性が高いことから、整備に際しては撤去も視野に入っていたが、年代の明確な根拠がなかったため、平成11年1月に県文化財課が直営でトレンチ調査を実施した。しかし構築時期について確証を得ることは困難であった。翌年度、改めて埋蔵文化財センターが調査を引き継ぐこととなったが（内堀第2次）、結局近世に遡る可能性も否定できないとして、石垣の撤去は見合わされた。

【平成11年度（1999）】

当該年度の発掘調査も引き続き、土木部公園緑地課の依頼を受けた石川県教育委員会から（財）石川県埋蔵文化財センターに委託され、4月1日付けで業務委託契約が締結された。文化財保護法第57条第1項に基づく発掘調査届出書は4月1日付け及び7月6日付けで提出された。

なお、当該年度の金沢城内の調査区は数多く、二ノ丸五十間長屋・内堀第2次・三ノ丸第3次・橋爪門外橋脚（以上今回報告分）・新丸第1次・三ノ丸第2次・鶴ノ丸第1次・新丸第2次・二ノ丸園路の9地点に及んだ。

石垣解体調査（二ノ丸五十間長屋調査区、1,200㎡相当）は年度替わりにもほとんど中断すること

なく継続した。5月の連休明けには、五十間長屋台中央付近において、石垣構築以前の下層遺構面に到達した。下層遺構面は深さ1m程の間隔で、上下2面に細別でき、とくに下面（VI面）では、まとまった量の陶磁器や木製品が出土した。6月上旬には下層遺構面の調査を終え、石垣解体調査は最終局面を迎えた。7月2日、丸1年に及ぶ調査は一段落したが、城内の他の地点では発掘調査が継続しており、実態としてはほとんど切れ目のない状態であった。

なお、内堀第2次調査（2,000㎡相当）は、主として内堀西部北岸石垣の時期・構造把握のために、トレンチ調査を実施したものである。橋爪門外橋（今回報告では内堀橋とする）橋脚の調査（100㎡相当）は、橋脚基礎の一基について掘方底面までの確認を目指したもので、ともに追加調査としての性格が強い。また三ノ丸第3次調査（100㎡相当）は、内堀の余水排出路敷設に係るもので、付帯工事に伴う調査である。これらを含めた現地作業の完了年月日は、平成12年3月7日である。

2. 出土品整理の経過

石川県教育委員会から委託を受けて（財）石川県埋蔵文化財センターが実施した。今回の報告対象調査区に係る部分を抄出する。

【平成11年度（1999）】

内堀第1次調査で出土した陶磁器・瓦・金属製品・石製品の実測を実施した。

【平成13年度（2001）】

二ノ丸五十間長屋の調査で出土した陶磁器・瓦の記名・分類・接合・実測・トレースを実施した。

【平成14年度（2002）】

二ノ丸五十間長屋の調査で出土した金属製品・木製品・石製品の実測を実施した。

【平成15年度（2003）】

内堀第1次調査で出土した木製品の実測を実施した。

【平成16年度（2004）】

三ノ丸第3次調査他で出土した陶磁器・瓦・金属製品等の実測を実施した。

3. 委員会等

委員会組織としては、公園整備に関する基本的な事項全般を検討することを目的とした「金沢城址公園整備懇話会」、石垣・櫓について、総合的、専門的視点からの修築・復元の指針を検討し、提言を行うことを目的とした「金沢城址の石垣、櫓に関する修築・復元専門委員会」等が設置された。後者の委員構成、開催日程等は下記の通りである。

委員

新谷洋二（東京大学名誉教授） 橋本澄夫（金沢学院大学教授） 平井 聖（東京工業大学名誉教授）

北浦 勝（金沢大学教授） 吉岡康暢（国立歴史民俗博物館名誉教授） 田中哲夫（東北芸術工科大学教授）

*役職名は委嘱当時のもの

開催日程

第1回：平成11年3月29日 第2回：平成11年4月29日 第3回：平成11年5月17日

第4回：平成11年6月3日 第5回：平成11年7月12日 第6回：平成11年9月9日

第7回：平成12年2月14日 第8回：平成12年7月1日

第2章 歴史的環境

第1節 金沢城と周辺の歴史



第2図 遺跡の位置

金沢市街地のほぼ中央を占める金沢城跡は、南東の山地帯より舌状に伸びる小立野台地の先端部分に立地する。

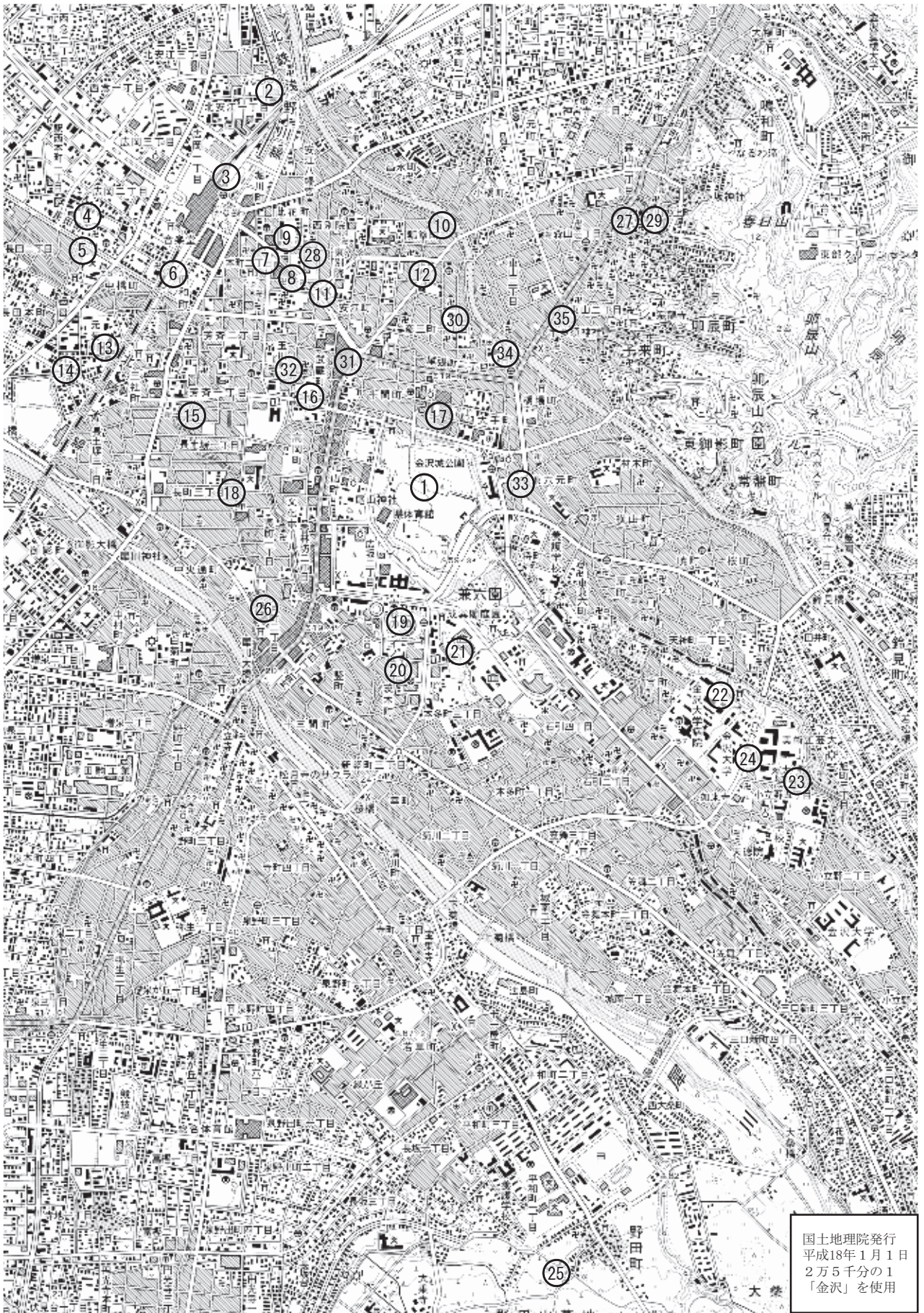
小立野台地は犀川・浅野川によって開発された河成段丘であり、城外との比高差は、最高所である本丸で 30m以上、低所に位置する新丸においても約 10mを測り、城が天然の段丘面を巧みに利用して築かれたことが推察される。また城のある台地先端部と、その南東に続く台地本脈との間には断層があり、自然谷が形成されていたらしく[藤 1999]、城付近の地形は、人工の手が加わる以前から、独立丘的な状況を呈していたようである。

金沢城周辺は、近世から市街化が進んでおり、近世以前の遺跡については従来伝わる場所が少なかったが、城跡自体や城地に隣接する前田氏（長種系）屋敷跡（大手町遺跡）〔（財）石川県埋蔵文化財センター2002e〕・広坂遺跡[金沢市 2004b・2005b・2006b・2007c]の調査により、縄文～中世の資料が確認されている。

金沢城では、平成9年度の調査において8～9世紀代の掘立柱建物跡が検出されたほか、断片的ではあるが、幾つかの調査区で古代に属する土坑・ピット・土器片が確認されている。城地北側の前田氏（長種系）屋敷跡では、縄文時代の落とし穴、弥生時代後期後半～終末期の墳丘墓、古代の粘土採掘坑が検出されている。一方城地南側の広坂遺跡では、8世紀代の瓦が出土し古代寺院の存在が確実視され、また中世の居館に伴う堀や寺院と思われる礎石建物が検出されている。このように、市街地の下には城下町のみならず、それ以前の遺構も残存していることが判明しつつある。

戦国時代になると、現在の城地には金沢坊（金沢御堂・尾山御坊）が創建され、加賀地域における政治・宗教・経済の拠点として発展するが、16世紀後半については、城の南側に位置する県庁跡地（近世には堂形と呼ばれ、米蔵・馬場等藩の施設があった城の外縁部）では館ないし寺院の区画施設と推定される溝・土塁、広坂遺跡では礎石建物等が検出されており、共伴する遺物に恵まれないものの数少ない遺構確認例である[伊藤 2004]。なお、浅野川と北国街道の交点に近接する東山一丁目遺跡[金沢市 2010]では、14～15世紀代と思われる珠洲甕・白磁皿・古瀬戸水滴が出土しており、付近に所在したとされる中世「山崎窪市」との関連が注目される。やがて金沢坊は織田政権の前に陥落し、佐久間氏・前田氏など織豊政権の大名による支配が始まるが、この段階もいまだ、遺構・遺物は多くない。

徳川氏が幕府を創始し、豊臣氏を滅ぼして名実ともに統一政権を確立した慶長・元和期頃、金沢城周辺では大名前田氏の支配のもと、城下町の整備が進行する。現在、市街各所で調査された城下町の遺跡地点数は30箇所以上を数えるが（第3図・第1表）、まとまった量の遺構・遺物が見られるようになるのは、この頃以後のことである。なお慶長4年（1599）・同15年（1610）に築造された内・外惣構の一部についても発掘調査が行われており、当初の構造や、規模を縮小しつつ存続・再生が図られる変遷過程が判明している。城下町はその後度重なる火災等の災害（寛永8年（1631）・同12年（1635）の大火等）に見舞われ、また一方で計画的整備を繰り返しながら、寛文年間（1661～1672）までにはほぼ骨格が整い、以後明治時代の初めまで、三都に次ぐ大都市として発展する。



第3図 周辺の遺跡 (S=1/25,000)

第1表 周辺遺跡地名表

No.	遺跡名	調査年度	遺跡の特徴		文献
			主要地種	特記事項	
1	金沢城跡	(別掲)	城郭	(別掲)	(別掲)
2	久昌寺遺跡	H8(1996), H9(1997)	寺院(墓地)	近世墓292基	金沢市埋蔵文化財センター2004c
3	木ノ新保遺跡	H5(1993)	寺院?(墓地)→足輕組地→下級武家地、町人地、百姓地		(財)石川県埋蔵文化財センター2002b
4	醒ヶ井遺跡	H7(1995)~H10(1998)	百姓地→下級武家地	前田氏(直之系)下屋敷	金沢市埋蔵文化財センター2001a 谷口・増山2004
5	長田町遺跡	H6(1994)	下級武家地		金沢市埋蔵文化財センター1998
6	昭和町遺跡	H5(1993)~H7(1995)	町人地・下級武家地		金沢市埋蔵文化財センター2001b・ 2003a・2004a
7	本町一丁目遺跡(第1次)	H2(1990)	町人地		金沢市教育委員会1995
8	本町一丁目遺跡(第2次)	H6(1994)	町人地		金沢市教育委員会1997
9	本町一丁目遺跡(第3次)	H9(1997)	町人地		金沢市埋蔵文化財センター2003c
10	瓢箪町遺跡	S61(1986)	上級武家地	前田氏(主膳系)上屋敷	金沢市教育委員会1991
11	安江町遺跡	H3(1991)~H5(1993)	町人地・中級武家地	「乾山」銘向付出土	金沢市教育委員会1997
12	彦三町遺跡	H11(1999)	中級武家地		金沢市埋蔵文化財センター2002
13	三社町遺跡	H3(1991), H9(1997)	百姓地→町人地		(財)石川県埋蔵文化財センター2001・ 2007
14	元菊町遺跡	S62(1987), H1(1989)	百姓地→町人地		石川県立埋蔵文化財センター1990
15	穴水町遺跡	H8(1996)	下級武家地	長氏下屋敷	金沢市埋蔵文化財センター1998
16	高岡町遺跡	H8(1996)~H11(1999)	町人地・上級武家地・水溜		金沢市埋蔵文化財センター2001c・ 2003b (財)石川県埋蔵文化財センター2002d
17	前田氏(長種系)屋敷跡	H8(1996)	町人地→上級武家地	寛永以前の町屋遺構	(財)石川県埋蔵文化財センター2002e
18	長町遺跡	H8(1996)	中級武家地		金沢市埋蔵文化財センター1998
19	広坂遺跡	H8(1996)~H12(2000) H14(2002)	上~中級武家地	調査面積広く、基準資料多数	金沢市埋蔵文化財センター2004b・ 2005b・2006b・2007c
20	下本多町遺跡	H4(1992)	下級武家地→上級武家地	宝暦9年(1759)大火被災一括資料出土	金沢市埋蔵文化財センター1999
21	本多上屋敷遺跡	S55(1980)	上級武家地		石川県立埋蔵文化財センター1992
22	金沢大学宝町遺跡 (医学部附属病院地区)	H9(1997)~H14(2002)	中~下級武家地等	地下室多数検出	金沢大学埋蔵文化財調査センター編 2000~2003
23	金沢大学宝町遺跡 (医学部保健学科地区)	H10(1998)~H11(1999) H13(2001)	中~下級武家地等		金沢大学埋蔵文化財調査センター編 2000~2003
24	経玉寺遺跡	H9(1997), H10(1998)	寺院(墓地)・中級武家地	近世初期の灰塚等	(財)石川県埋蔵文化財センター2002c
25	野田山墓地	H12(2000)~H14(2002) H16(2004)~H19(2007)	墓地	藩主家の墓所を中核とした大型墓地。道路整備による移転部分の墓石調査、改葬立会調査等 H16年度より前田家墓所詳細調査。測量、試掘等実施	金沢市埋蔵文化財センター2003d・ 2008b
26	片町二丁目遺跡	H15(2003)	武家地		金沢市埋蔵文化財センター2005a
27	妙因寺門前遺跡	H15(2003)	寺院、参道		金沢市埋蔵文化財センター2006a
28	本町一丁目遺跡(第4次)	H15(2003)	町屋	近世初期の鉾津等	金沢市埋蔵文化財センター2006c
29	三宝寺前遺跡	H16(2004)	寺院、参道		
30	彦三町一丁目遺跡	H16(2004)	武家地		金沢市埋蔵文化財センター2007a
31	下堤・青草町遺跡	H17(2005)	町人地		金沢市埋蔵文化財センター2007b
32	西外惣構跡	H17(2005)	惣構	築造当初の堀、堀の改変状況	金沢市埋蔵文化財センター2008a
33	兼六元町遺跡	H17(2005)	武家地		金沢市埋蔵文化財センター2007a
34	東内惣構跡	H18(2006)	惣構	堀の改変状況確認	金沢市埋蔵文化財センター2008a
35	東山一丁目遺跡	H20(2008)	町人地	鍛冶職春田氏に関わる鍛冶関連遺構	金沢市埋蔵文化財センター2010

先に挙げた広坂遺跡・前田氏（長種系）屋敷跡は、城下中枢に位置する遺跡として、この時期以降が主体となる。広坂遺跡は、17世紀前半における性格はなお検討の余地はあるものの、陶磁器の優品が多く出土し、また17世紀中頃以降は高級武家の屋敷として、多様な遺構・遺物が検出されている。城下町遺跡として最大の面積が調査されており、火災の比定等、今後基準となる所見が蓄積されている点も大きく評価できよう。前田氏（長種系）屋敷跡は、寛永16年（1639）以後、標記の重臣屋敷となったところであるが、これ以前の遺構・遺物が充実しており、初期城下町の屋敷跡と考えられている。

県庁跡地では、元和期以前と想定される面において、護岸石垣を備えた大規模な遺構が検出されている[加藤2009]。堀と考えられているが、泉水等の可能性も検討する余地がある。この上面に米蔵や馬場が営まれ、公的な空間として存続する。

これらの外側に位置する安江町・本町一丁目・東山一丁目遺跡等の遺跡は、城下町の一般的な在り方を示す。安江町遺跡[金沢市1997]は中級藩士・町人居住地が対象となる調査であるが、町人の物質的な優位性が読み取れる、興味深いデータが得られた。本町一丁目遺跡[金沢市1995]は町人の居住地に該当し、富籤の突札等、生活臭の強い遺物が目を引く一方、建物・井戸・土坑（粘土採取坑・廃棄土坑）等の遺構配置から、屋敷地の空間構造も追求されている。東山一丁目遺跡[金沢市2010]は城下町の要である浅野川大橋に近接し、旧北国街道の表店に位置する地点が調査され、検出した井戸遺構の配置と絵図重ねから、町屋の地割りの一端が解明された。この他特徴的なものに鍛冶関連遺構がある。城下町の急速な拡大を示す17世紀前半に属する遺構の他、操業時期が江戸後期に下るものも確認され、文化8年（1811）に当地に居住していた甲冑鍛冶の春田細工師との関わりが指摘されている。

久昌寺・木ノ新保・三社町の各遺跡は、城下縁辺に所在する。久昌寺遺跡[金沢市2004c]では同名の曹洞宗寺院の墓地に該当する。約300基に達する墓が調査され、城下の墓制を考える上で重要な成果をあげている。木ノ新保遺跡[（財）石川県埋蔵文化財センター2002b]では、墓地・農地から足軽・下級武士の屋敷地への変容を窺うことができ、三社町遺跡[（財）石川県埋蔵文化財センター2001・2007]でも、農地から町人地への変化が遺構より捉えられている。いずれも城下縁辺における都市域の拡大を示す良好な事例である。

なお城下町から離れるが、関連の深い遺跡として戸室石切丁場や野田山墓地などがある。戸室石切丁場は、金沢城内の石垣石の9割強を占める戸室石の石材産地であり、前田利家によって石垣普請が始められた文禄年間から、江戸時代を通して石材の切り出しが行われたほか、石切り技術の変遷も確認できる丁場として貴重な遺跡である[石川県金沢城調査研究所2008b]。

野田山墓地では、墓地移転に伴う山麓部分の調査や、藩主前田家墓地の測量・試掘調査等が実施されている[金沢市2003d・2008b]。

第2節 金沢城の沿革

金沢城の沿革については既刊の『金沢城跡埋蔵文化財確認調査報告書Ⅰ』[石川県金沢城調査研究所2008a]が詳しく、参照されたい。ここでは、次頁の年表（第2表）をもって代え、若干の補足を付加しておきたい。

年表では、金沢城の歴史を5期に区分し、造成・災害・修築等を中心に記載した。5つの時期については、金沢坊設置から前田利家の入城までを「金沢城の成立」、利家による城内整備から寛永の大火までを「初期金沢城」、寛永大火後の城内整備から宝暦の大火までを「寛永の大火後」、宝暦大火後の城内整備から廃藩までを「宝暦の大火後」、廃藩から現在までを「近代以降」とした。

初期金沢城とそれ以前については、その様相を窺うに足る絵図・文献は極めて少なく、埋蔵文化財調査の所見が重要となる。

第2表 金沢城の沿革

時期	年号	西暦	出来事
金沢城の成立	天文15年	(1546)	本願寺末寺として金沢坊（金沢御堂・尾山御坊）を設置、金沢城の前身
	天正8年	(1580)	佐久間盛政が入城、土塁や堀を整備
	天正11年	(1583)	賤ヶ岳の合戦において佐久間盛政が敗北 前田利家が入城し、これ以後金沢城として前田家が14代にわたり統治
初期金沢城	天正14年	(1586)	天守構築、翌年に南部藩家臣北信愛が前田利家のもてなしを受け、天守をはじめ、城内各所に案内された（『北信愛覚書』）
	天正15年	(1587)	石垣職人の穴太源介に知行100俵を与え召抱える
	文禄元年	(1592)	戸室石を利用した本格的な石垣構築を開始、東ノ丸東面・北面、本丸西面の石垣を構築
	慶長7年	(1602)	落雷により天守焼失
	慶長期		本丸南面・三ノ丸北面・尾坂門の石垣を構築
	元和期		東ノ丸附段・百間堀縁などの石垣を構築
	元和6年	(1620)	本丸焼失、翌年本丸御殿などを再建
寛永の大火後	寛永8年	(1631)	城下町から出火、辰巳櫓に飛び火し城内も延焼 【寛永の大火】 大火後の石垣構築・修築でほぼ現在の縄張りに近い状態に
	寛永9年	(1632)	犀川上流から取水する辰巳用水を施工、城内に引水され城内外の堀が水堀化
	寛永11年	(1634)	玉泉院丸に泉水や築山、御亭などを造成
	寛永17年	(1640)	20年間藩主不在、城内が荒廃
	万治3年	(1660)	
	寛文元年	(1661)	5代藩主綱紀がはじめて入国、城内のみならず城下町整備や新田開発など文化振興に寄与
	寛文2年	(1662)	城内の損傷著しい石垣箇所を修築。玉泉院丸色紙短冊積み石垣もこの頃に構築か 鉛瓦が普及
	寛文11年	(1671)	
宝暦の大火後	宝暦9年	(1759)	城下町で一万軒以上が焼失、金沢城内でも本丸・二ノ丸・三ノ丸などの主要部が全焼する被害 【宝暦の大火】
	宝暦10年	(1760)	幕府に城再建と石垣修築を願い出て、5万両を借り修築
	宝暦11年	(1761)	河北門石垣を修築
	宝暦13年	(1763)	五十間長屋石垣を修築
	明和2年	(1765)	石川門石垣を修築
	安永元年	(1772)	河北門を再建
	天明8年	(1788)	五十間長屋や石川門などを再建
	文化5年	(1808)	二ノ丸火災
	寛政11年	(1799)	
	安政2年	(1855)	地震による石垣被害が大きく、石垣を修築
	安政5年	(1858)	
近代以降	明治4年	(1871)	兵部省（のち陸軍省）の所轄となる
	明治9年	(1876)	河北門二ノ門の渡櫓や櫓台石垣を撤去するよう進達
	明治14年	(1881)	二ノ丸御殿から出火し、御殿の他、菱櫓・五十間長屋・橋爪門など焼失
	明治15年	(1882)	河北門一ノ門を解体、代わりに矢来門を設置
	明治40年	(1907)	辰巳櫓下の高石垣が崩落、石垣が幅200mに渡り上部2/3が取り壊され、現在残るように段を設けて改修
	昭和24年	(1949)	戦後、金沢大学の敷地として利用
	平成7年	(1995)	金沢大学の敷地を城外へ移転
	平成8年	(1996)	石川県が土地を取得し、金沢城公園として整備を開始
	平成20年	(2008)	国史跡に指定

画期となった災害のうち、寛永8年(1631)の大火は、金沢城の骨格を変える契機となった。それまでは本丸が中心であったが、大火を契機に二ノ丸が拡大され、ここに壮麗な御殿が営まれた。この二ノ丸を中心として定まった縄張りが、現在まで受け継がれることとなる。

一方、宝暦9年(1759)の大火は、全盛期の終わりを象徴する災害で、三階櫓や辰巳櫓といった本丸の櫓群は、二度と再建されることなく、今回の報告の対象である二ノ丸菱櫓・五十間長屋・橋爪門続櫓も、再建までに10～30年の長期を要した。

廃藩後では、明治14年(1881)に二ノ丸御殿が焼亡したほか、あらたに城地を管轄した陸軍の手により旧来の建物は次々に撤去された。また城の外堀・内堀の多くは埋め立てられ、松原屋敷・金谷出丸など縁辺が削平され往時の形状が失われた郭もある。戦後、金沢大学の敷地になってからも様々な改変を受けている。

第3節 二ノ丸内堀・菱櫓・五十間長屋・橋爪門続櫓の沿革

1. 絵図・文献からみた沿革

二ノ丸内堀及び菱櫓・五十間長屋・橋爪門続櫓の創建について、直接記した文献は知られていないが、寛永8年(1631)の大火を契機として二ノ丸を整備したことは一次史料(「寛永八年老中奉書」)に見え、この時御殿等とともに創建されたと考えるのが妥当である。これ以後、作成年代が明らかな寛文期以降の絵図には必ず描写されている。

寛文6年(1666)5月、二ノ丸北面石垣は17間にわたり崩壊した。翌年藩は幕府に対し、寛文2年(1662)に提出した修理願に追加する形で、再度修復の許可を求めた。この頃までの金沢城は、3代藩主前田利常が寛永16年(1639)に小松城に隠居した後、わずかな期間を除き長く藩主不在であった影響で、施設の維持管理が十分でなかった可能性が指摘されている[木越2003]。上記の修復願は、第5代藩主として城の主となった前田綱紀による、代替わりの城郭修補の一環であったとも考えられる。

このような手続きを経て、寛文8年(1668)、二ノ丸北面において石垣が修築された(「先祖由緒并跡々勤方等之覚」後藤文庫)。現存する石垣の観察所見から、修理箇所は二ノ丸北面から菱櫓を経て五十間長屋の北側にかけての範囲だったと思われる。文献には、この部分の建物がどうなったか記述は見られないが、石垣修築に伴い、上部の建物も撤去・再建されたと考えられる。

「加賀国金沢之絵図」に描かれた二ノ丸の姿は、この頃のものである(第5図上)。本絵図では、郭の縁辺に置かれた門・櫓等が鳥瞰図風に表現されており、菱櫓・五十間長屋・橋爪門続櫓も、白壁作りの壮麗な建物群として描写されているが、細部まで写実的かどうかは断言できない。

近世前期における、菱櫓・五十間長屋・橋爪門続櫓の外観立面を描いた史料に「加州金沢御城来因略記」がある(第12図上)。史料自体は近世後期に作成されたものであるが、金沢城内における、宝暦以前の門・堀・櫓等の外観が描かれている。これによると、菱櫓・五十間長屋・橋爪門続櫓の様式一屋根に鉛瓦を葺き、外壁下部に板状の瓦(腰瓦ないし磚)を配して海鼠壁とする等一は、細部に变化があるものの、近世後期の姿と大きく変わらない。この様式は、本丸櫓群等とも共通するものであり、基本的枠組みは、寛永年間の創建当初からのものであった可能性が高い。もともと金沢城を特徴付ける鉛瓦の採用は、文献史料・考古資料ともに寛文年間頃であることを示唆しており、これを含めて考えると、様式の確立は寛文8年の部分再建以降とするのが妥当である。

宝暦9年の大火は城内の大半を焼き尽くし、二ノ丸の建物も全焼した(「宝暦九年金沢火事之一巻」加賀藩史料8)。その後、宝暦12年(1762)に五十間長屋台石垣が崩れたため、翌13年(1763)、その南半部を中心に修築された(「文禄年中以来等之旧記」後藤文庫)。櫓(長屋)台上には堀が設けられていたが、一旦撤去され、石垣修築後に戻されたという(「河北郡戸室山開之事等留帳」後藤文庫)。なお今回報告する解体調査時に五十間長屋台石垣背後より宝暦13年6月25日銘のある鋤始刻石が出

土し（第5章）、金沢市波自加弥神社に伝わる神具机の裏書から、同年6月に鍬始儀式がなされたことが確認され〔出越 2006〕、同年の石垣修築を裏付ける有力な傍証史料となった。ただし宝暦期の修築は石垣のみで、建物の再建はやや遅れる。

菱櫓再建の命が下ったのは宝暦大火から26年後の天明5年（1785）のことで、天明7年（1787）8月に竣工した（「政隣記」）。天明7年の状況を描写したとする絵図（第8図左「文化焼失以前二の丸之図」）によると、この時菱櫓と南に接する五十間長屋北端まで造営された可能性が高い。なお石垣修築の記録はなく、遺構でも大規模な改変の痕跡は認められない。翌天明8年（1788）には、橋爪門続櫓台石垣の修築及び櫓本体の再建がなされた（「天明八年橋爪門続櫓棟札」）。ほぼ同時期に五十間長屋も再建されていると見てよく（「文禄年中以来等之旧記」）、天明8年中には、櫓（長屋）台上の建物は宝暦大火以前の状態に戻った。ただし、「来因略記」（第12図上）によると、建物の意匠としては、出しの破風様式等、以前と異なる部分もあった。

こうして再建なった建物群であったが、20年後の文化5年（1808）正月、二ノ丸で発生した火災により御殿もろとも全焼した。当初御殿側から燃え広がった火は菱櫓に迫り、諸人は防火に努めたが火勢は収まらず、五十間長屋・橋爪門続櫓・橋爪門まで延焼したという。なお、この時、五十間長屋に所蔵していた鉄砲等を鶴ノ丸に持ち運び、または内堀へ一時的に投入したこと、菱櫓に所蔵していた矢の多くは焼失したこと等が記録に見え（「政隣記」）、櫓・長屋の機能の一端を窺うことができる。

ただし、この時の復興は速やかで、橋爪門続櫓台石垣が文化5年6月頃から11月頃（第11図「橋爪一ノ御門台並御櫓台御石垣積直指図絵図」）、橋爪門が同5年11月から同6年（1809）2月（「金沢城橋爪御門等門櫓棟札写」金沢市立玉川図書館清水文庫）、橋爪門続櫓が同6年5月から12月（同上）、菱櫓が同6年7月～12月（同上）の間でそれぞれ修築・再建されている。また五十間長屋も同6年7月に再建が完了しており（「御造営方日並記」）、翌年までかかった御殿に先んじて、焼失から2年足らずで旧に復している。「来因略記」（第12図上）には、この時の建物の意匠は、天明再建時と同様と記載されている。第12図下は文化期再建の橋爪門続櫓の外観を描いた絵図である。なお、櫓・長屋の平面・柱配置を詳細に記した絵図として「金沢城菱櫓絵図等 ②櫓及長屋の梁伏図と木権」「橋爪御門渡御櫓之図」（ともに金沢市立玉川図書館蔵）がある。前者の対象範囲は、第8図に掲げた天明7年（1787）の再建部分と一致し、後者はこれより以南について描写しているため、天明期の再建時に関わる可能性があるが、確定は難しい。

文化再建の櫓・長屋は、藩政期の最後まで存続した。明治2年（1869）、加賀藩主が城地を去ったあと、城地は兵部省（のち陸軍省）の管轄となったが、二ノ丸の櫓・長屋は概ね造営当初の姿を保ったまま、明治初期の写真に威容を留めるに至った（第13図）。しかし明治14年（1881）、兵舎に改築された旧二ノ丸御殿からの失火により二ノ丸にあった建物は大半が焼失し、近世以来の建物は姿を消した。その後、周辺においても、内堀東部の石垣撤去と埋め立て、中央部の縮小と水槽等の敷設等、近代を通じて改変が進んだ。

第二次大戦後の昭和24年（1949）以降、金沢大学のキャンパスとなって以後も改変は続き、埋め立てられていた二ノ丸石段等の大部分が破壊されるなどの影響を受けたが、櫓（長屋）台・内堀に限れば、陸軍管轄期までの状態が概ね保存されてきたと言える。

2. 石垣と穴生

菱櫓・五十間長屋・橋爪門続櫓に関する普請・作事史料は、文化5・6年（1808～1809）の再建に係る「御造営方日並記」や「政隣記」、棟札等各種にわたる。本節では、とくに石垣普請に関する史料である「後藤文庫」を取り上げ、石垣の普請に専門的に携わった「穴生（あのう）」の動向について、簡単に触れておきたい。なお木越 2007・2008 論文は、加賀藩の穴生全般、また「後藤文庫」所収の「秘

伝書」の内容について詳しく分析しており、本節でも多くをこれらの文献に拠った。

加賀藩では「穴生」と表記するが、一般には「穴太」で、近江坂本近隣の地名を起源とする。ここには石積み・石垣普請に携わった職能集団が居住しており、中世後半の史料には「あなうのもの」等と見え、京都の権門の居宅・寺社等において、石積みを中心とした普請に携わっていたことが知られている[中村 2006]。

戦国期以後、どのような経緯を経て、石垣普請の棟梁的地位を得るに到ったのか検討の余地は多いが、いずれにしろ近世初期の段階で、各地の大名はすでに穴太出身を名乗る石垣普請に堪能な職人(技術者)を抱えていた。

加賀藩も例外ではなく、早く天正 15 年(1587)、穴太源介を知行百俵で召し抱えたとされる。寛永 4 年(1627)の侍帳によると、近江坂本に居住し、江戸幕府から「穴太頭」として待遇されていた戸波家に前田家から知行が与えられ、他に近江坂本出身を始めとする石垣職人数名も下級の士分として召し抱えられていたことが判る。

なお、この寛永 4 年侍帳の段階までに、「穴太」「穴生」という言葉は、その地を出身地とする石垣職人の呼び名から、石垣普請を担当とする役職名へと転化していたと考えられる。

近世中後期には、穴生は普請奉行の下で定員 4 名前後の組織として編成されていた。その職務は、工事の設計・監理、現場指導、指揮下の石切の人事管理等であり[木越 2008]、基本的には家職として特定の家に相続され、家ごとに技術秘伝等も伝えていた。

加賀藩穴生の代表的な家系として、奥家と後藤家が知られる。奥家は初期には穴太を姓としていたが、3代源兵衛のとき穴太から奥へ改姓したもので、先祖由緒によると丹波出身であるが、近江坂本との縁も伝える。後藤家は播磨の出身で、戦国武将として名高い後藤又兵衛基次の弟の後裔と称し、又兵衛と加藤清正との交流を通じ石垣普請技術を習得したとの伝えがある。後藤家の第 6 代後藤彦三郎和睦は、子息の小十郎とともに、後藤家に伝わる石垣構築に関する歴史や技術・秘伝等を集大成した。これらを中核とする「加賀藩穴生方後藤文庫」(金沢市立玉川図書館蔵)は、土木技術史の一級史料となっている。

菱櫓・五十間長屋・橋爪門続櫓台を含む、二ノ丸内堀全体に及ぶ石垣を創建した時の担当穴生については、後藤文庫にも記載がない。しかし、二ノ丸北面から菱櫓・五十間長屋北半に及ぶ修築は、後藤家 3 代権兵衛が寛文 8 年(1668)に担当したと主張する(「先祖由緒并跡々勤方等之覚」後藤文庫)。後藤権兵衛が担当した修築箇所は多く、この他にも堀南東縁の鯉喉櫓台(崩丁場とも呼ぶ)、土橋門台、薪ノ丸、本丸南面小鎬付近等、寛文期を中心とする 17 世紀後半の石垣のほとんどに及んでいる。後藤文庫所収の「唯子一人伝」(6 代彦三郎著)では、権兵衛が修築した鯉喉櫓台・二ノ丸北面～菱櫓台を城中一、二の石垣と評価している。

宝暦 13 年(1763)の五十間長屋南半を中心とした修築について、後藤文庫では明示されていないものの、正木甚左衛門という穴生が担当したことを窺わせる記載がある。前節で触れたように、五十間長屋台石垣内部から宝暦 13 年銘を有する鋏始刻石が出土していること、金沢市波自加弥神社所蔵の神具机の裏書には、金沢城とあるのみで箇所の特定こそないものの、同年同日の紀年に鋏始を行ったことや、その時の祭主の筆頭として正木甚左衛門正信の人名が記されていること[出越 2006]から、正木甚左衛門がこの時の担当穴生であったことは間違いない。さらに言えば、正木甚左衛門は「石ノ規式」を「泰ノ神主」に習ったという(「唯子一人伝」後藤文庫)。「石ノ規式」が具体的に何を指すのか不明であるが、先の神具机裏書は、正木らが、鋏始に用いた神具机について田井天満宮(田井天神社)を通じ波自加弥神社に奉納したことを記す内容となっており、後藤家文書の言う「泰ノ神主」は「田井ノ神主」であろうから、このことでも神具机裏書との関連が窺えるものとなっている。

正木家については、甚左衛門の跡を継いだ吉左衛門が、天明 5 年(1785)に改易されたこともあり

（「河北郡戸室山開之事等留帳」ほか）、詳細は不明である。なお正木甚左衛門の名は天和三年（1683）の記事において、その年起きた大火後の江戸藩邸に石細工御用のため出張した御扶持人石切の一人として見え（「落葉集」後藤文庫）、宝暦期の同名人（正信）の祖先に当たる人物と推測される。また甚左衛門正信は宝暦11年（1761）に穴生に昇進したもので、普請関係の絵図作成にも従事していた時期もあった（「金城深秘録」）。いずれにせよ、正木家は初期からの穴生ではなく、17世紀後半に能力を認められ、穴生の下位にあたる御扶持人石切に取り立てられた新興の穴生であった。数々の逸話からも、直に現場を指揮し、時には自ら曲尺を持ち玄翁を振るような姿が浮かび上がってくる。

正木甚左衛門の修築担当箇所は、後藤権兵衛に劣らず広い。寛永期以来の未曾有の大火であった宝暦9年（1759）大火以後、明和期にかけての修築（金沢城石垣編年4期）を一手に引き受けた感がある。その一方、後藤家・奥家からすれば新興の穴生に主導権を握られた形となり、勢い後藤家6代彦三郎の指摘した正木甚左衛門の評価は頗る厳しい。しかし逸話や失敗譚を多く記載することで、図らずも正木甚左衛門の人物描写は生气に満ちたものになった[北野1999・2000]。また筆者である後藤彦三郎にとっても、正木甚左衛門の流儀を批評することで、後藤家の穴生としての存在意義を再認識することに繋がったと思われる。

天明8年（1788）の橋爪門続櫓台石垣の修築については、後藤彦三郎の著作に記載がない。石垣解体調査でもその痕跡をほとんど見出すことができず、不明な点が多い。

文化5年（1808）の橋爪門続櫓台石垣の修築は、後藤文庫所収の「先祖由緒一類附帳」によると、後藤彦三郎の子、後藤小十郎が担当したとあり、石垣施工のための指図（第11図）の筆跡も小十郎のものと考えられるが、父彦三郎の著作等からみると、実態は父子で担当したものであろう。解体調査の結果、この石垣修築は、後藤彦三郎の著作に繰り返される、おそらく前代の正木甚左衛門の流儀に対する技能レベルでの批判を実践している部分が多く見受けられる。この点については、第6章で改めて触れることとする。

後藤彦三郎・小十郎父子の修築担当箇所もまた、城内各所にわたる。後藤文庫には、修築石垣の指図も多く含まれており、また自身が担当した修築石垣についての記載も見られ、遺構としての石垣を理解する上で重要である。

以上のように、菱櫓・五十間長屋・橋爪門続櫓台石垣について、寛文期修築・宝暦期修築・文化期修築のそれぞれを担当した穴生が判明した。修築単位ごとの差異の背後には、その時代を生きる穴生の流儀が息づいており、編年指標としての側面のほかに、継承性・伝統性等にも目を向けて行く必要がある。

第4節 既往の調査成果

金沢城内における埋蔵文化財調査の概要について、現在（平成22年度）に至るまでの状況を第14図・第3表にまとめた。内容については、金沢城の沿革と同様に『金沢城跡埋蔵文化財確認調査報告書Ⅰ』[石川県金沢城調査研究所2008a]で詳述しているので、以下では要約に留める。

昭和43年（1968）・同44年（1969）の2ヵ年は、金沢城跡の埋蔵文化財調査の端緒で、43年は金沢大学金沢城学術調査委員会、44年は大学・石川県教育委員会が調査主体である。二ノ丸御殿・本丸三階櫓等、金沢城の中核域を対象とした、極めて重要な調査であった[井上1969]・[石川県教育委員会1970]。

昭和50年（1975）から同61年（1986）に至る期間は、大学施設設置工事等に伴う事前調査が増加した。調査主体は大学であり、考古学研究室が開設されてからは同機関が実施している。

平成3年（1991）・同4年（1992）は、金沢御堂・金沢城調査委員会が組織され、主要遺構の綿密な踏査が行われた。

平成6年(1994)から同8年(1996)に至る期間の調査は、県土木部が所轄する都市計画道路寺町今町線道路整備事業に伴うもので、城域の南・東を画する堀・土橋部分を対象として、石川県立埋蔵文化財センターが実施した[石川県立埋蔵文化財センター1996・1997・1998]。石川門前土橋(石川橋)の調査では、この土橋全体が盛土であり、尾根を削り残したものではない等、城の縄張りに関する知見が得られたほか、近世に外堀として整備される以前の町屋(金属加工関連)的な遺構面が検出される等、城・城下の成立前後の様相の一端がはじめて明らかにされた。

平成9年(1997)から同13年(2001)に至る期間は、金沢城公園整備事業に伴うものであり、平成9年度は石川県立埋蔵文化財センター、同10年度以後は(財)石川県埋蔵文化財センターが調査を実施している[石川県教委・(財)石川県埋文センター2002a他]。今回報告する二ノ丸内堀・菱櫓等の発掘調査は、当期間の前半に実施された。

平成14年(2002)以後は、金沢城の総合的な調査研究を実施する目的で、石川県教育委員会文化財課内に金沢城研究調査室が設置され、同機関により埋蔵文化財確認調査事業が継続的に実施されている(なお金沢城研究調査室は平成19年度(2007)より石川県金沢城調査研究所に改組された)。埋蔵文化財確認調査の目的は、絵図・文献資料の乏しい寛永大火以前の初期金沢城の構造解明であり、石垣の構築過程、本丸大手通路(虎口)の変遷過程[石川県金沢城調査研究所2008a]、元和期(1615～1624)の本丸造成状況、庭園遺構の検出等、多くの調査成果がある。

平成15年度以後、金沢城公園整備事業に係る調査が再開され、現在まで継続している。この他、都心地区整備推進事業(県庁跡地(堂形))・県教育委員会事業(石川門左右太鼓塀)に係る調査がある。以下に主な事業を挙げる。

- ・平成15・16・18～19年度 いもり堀確認調査
- ・平成17～19年度 玉泉院丸南西石垣の修築に係る調査
- ・平成18～20年度 河北門の復元整備に係る調査
- ・平成20年度～ 玉泉院丸庭園の確認調査
- ・平成22年度～ 橋爪門の復元整備に係る調査
- ・平成15・16・19・20年度 県庁跡地(堂形)の調査
- ・平成19・20・22年度 石川門(付属太鼓塀)の調査

このうち河北門については、明治13年(1880)に撤去された枅形門の復元で、調査に際しては門の礎石や枅形の路面等が検出されるとともに、枅形以前に遡る遺構も見られ、枅形成立に到る三つの段階に整理されている(平成22年度報告)。また近代以後埋め立てを受けた玉泉院丸庭園についても、整備に向けた確認調査が実施されている。なお、金沢城の石垣については、その保存状況の良好さや、後藤文庫のような石垣技術に関する史料が残されていること等から、喜内敏[日本海文化研究室編1976]・北垣聰一郎[北垣1987]氏らにより夙に注目されてきた。今回報告する菱櫓・五十間長屋・橋爪門続櫓台石垣の解体調査は、後述するように金沢城石垣の調査研究の大きな画期となった。

この成果を踏まえた城内石垣の観察と、文献記録の記載等から、金沢城の石垣は現段階で大別7期に編年されている[北野2003・2004他]。また石垣の測量図化については、公園整備事業の一環として進められており、近世に属する大半が完了している。



第4図 金沢城全体図（「御城中壺分碁絵図」（横山隆昭家蔵）に加筆）

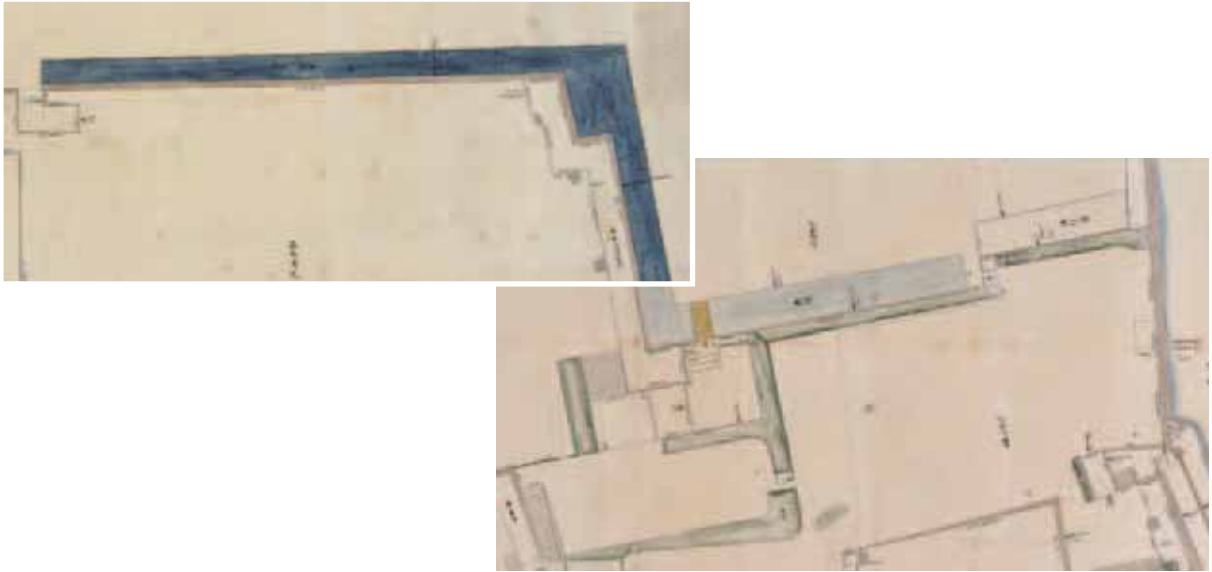


「加賀国金沢之絵図」(金沢市立玉川図書館蔵) 寛文8年～延宝年間 (1668～1681)

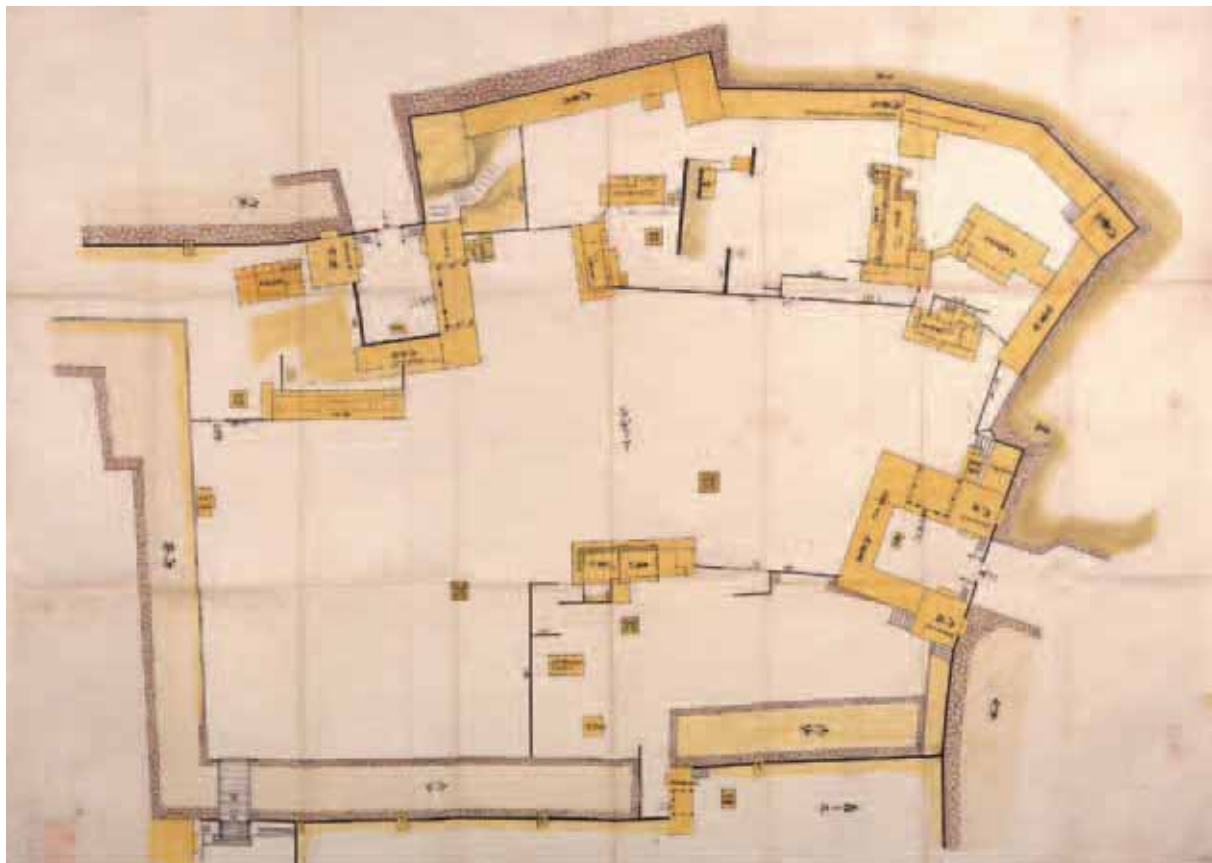


「金沢城絵図」(石川県立歴史博物館蔵) 延宝4年～元禄年間 (1676～1704)

第5図 関連絵図1



「金沢城中地割絵図（二ノ丸・鶴ノ丸）」[合成]（金沢市立玉川図書館蔵）近世前期

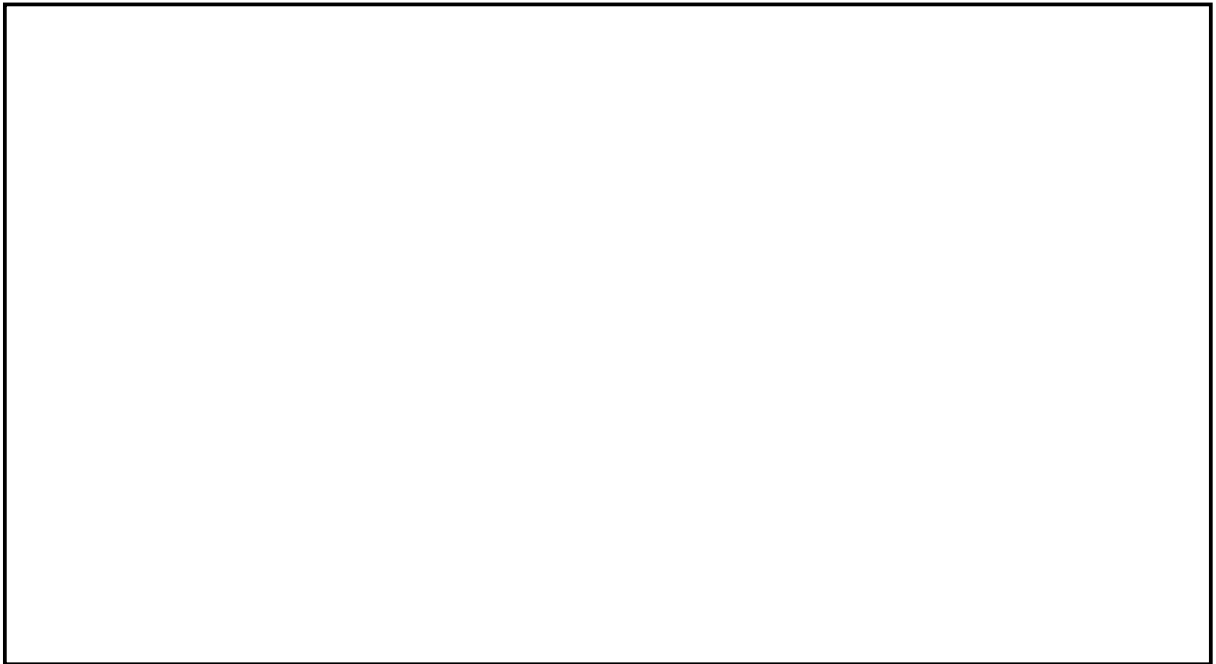


「金沢御城中絵図（三ノ丸）」（石川県立図書館蔵）宝暦5年（1755）

第6図 関連絵図2



「御城中老分碁絵図」(横山隆昭家蔵) 文化13年(1830)

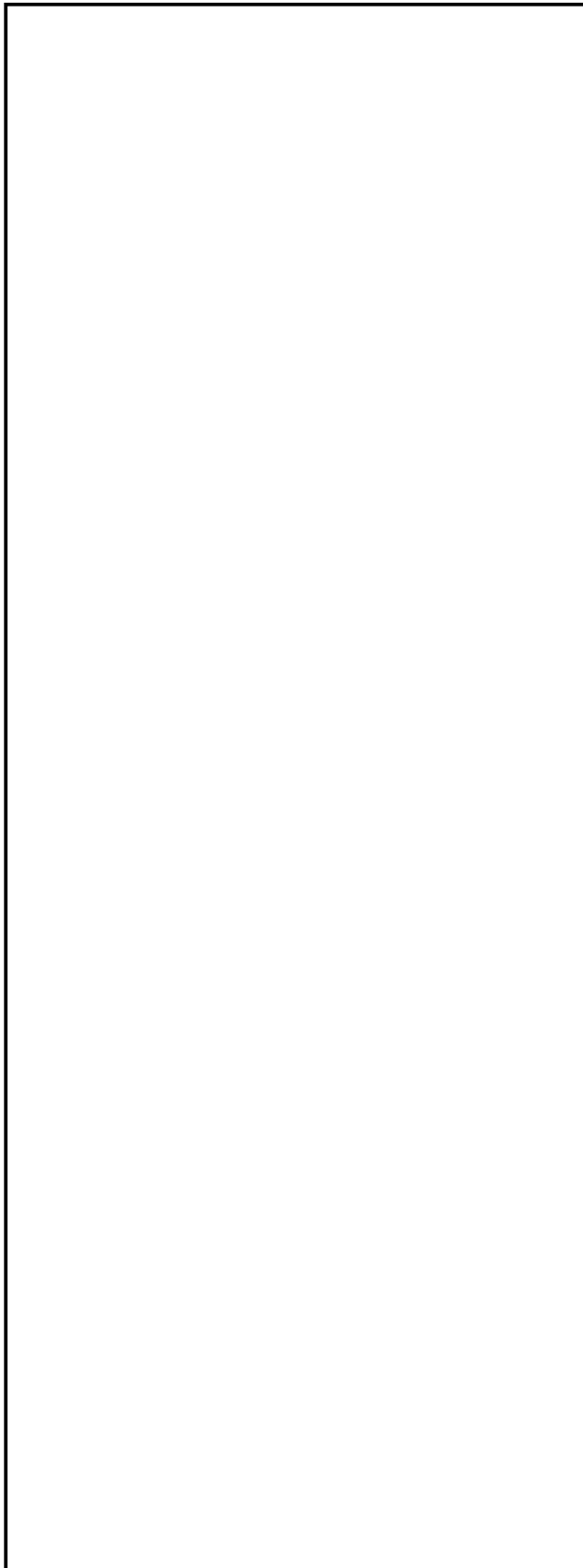


「御城分間御絵図」((財)前田育徳会蔵) 嘉永3年(1850)

第7図 関連絵図3

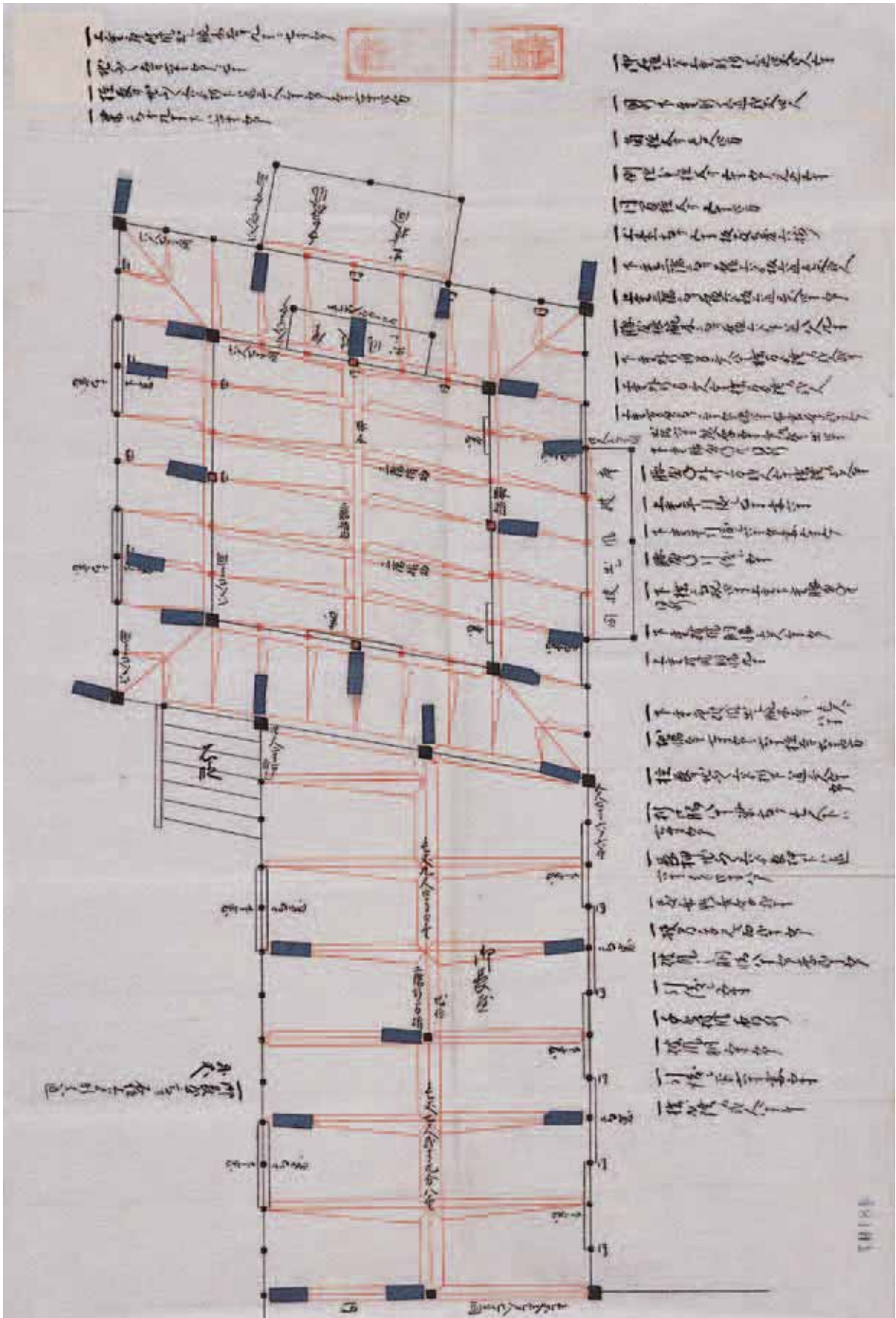


「文化焼失以前二の丸之図」(金沢市立玉川図書館蔵)
天明7年頃(1787)



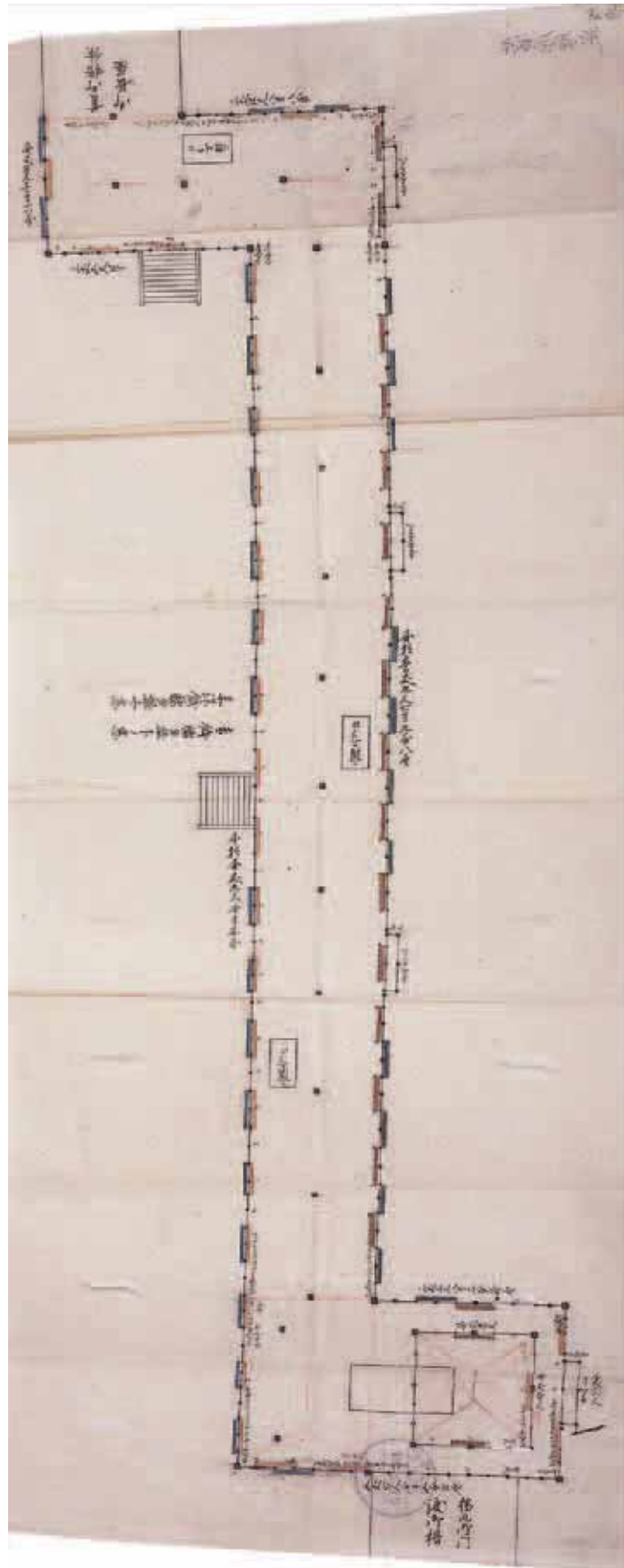
「金沢御城内外御建物図(1御表廻・4御台所廻)」[合成]
((財)前田育徳会蔵) 天保4~9年(1833~1838)

第8図 関連絵図4



「金沢城菱櫓絵図等 ②櫓及長屋の梁伏図と木権」（金沢市立玉川図書館蔵）

第9図 関連絵図5



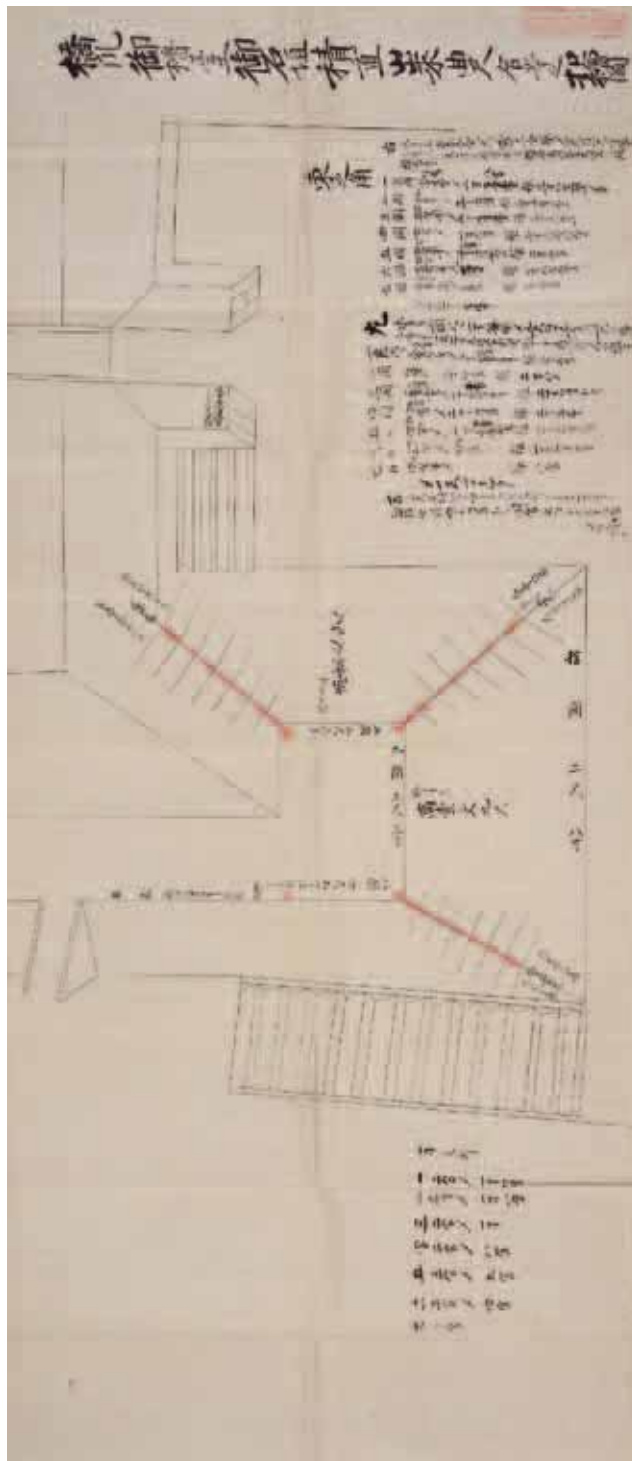
「橋爪御門渡御櫓之図」(金沢市立玉川図書館蔵)

第 10 図 関連絵図 6

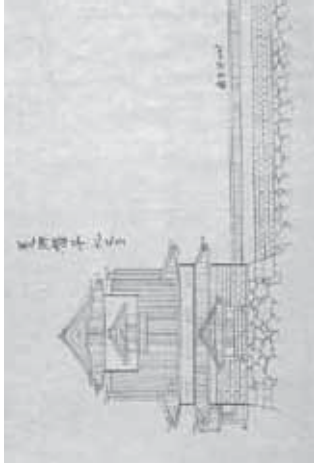
「橋爪一之御門台並御櫓台
御石垣積直指図繪図」
(金沢市立玉川図書館蔵)
文化5年(1808)



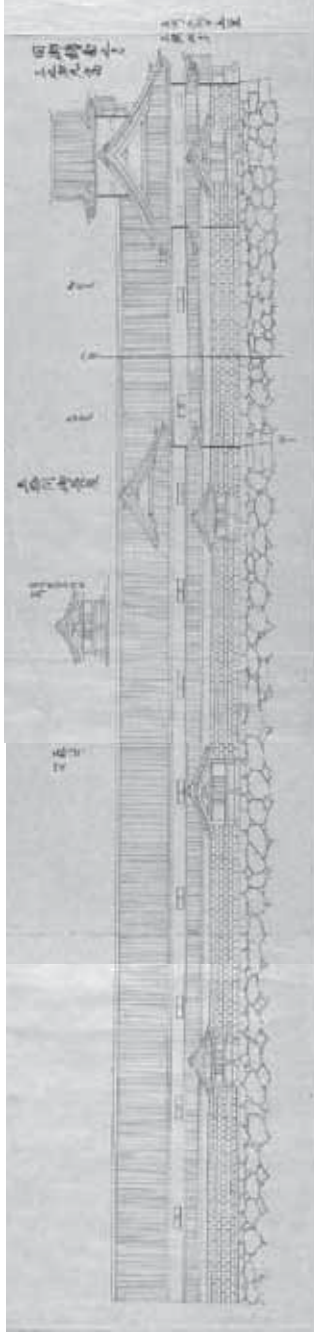
「橋爪御櫓台御石垣積直出来
曲尺合等之控繪図」
(金沢市立玉川図書館蔵)
文化5年(1808)



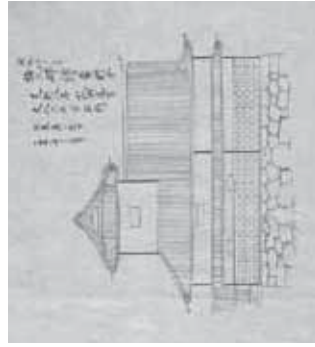
第11図 関連絵図7



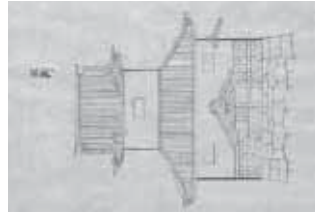
菱櫓 (北面) 宝曆大火前



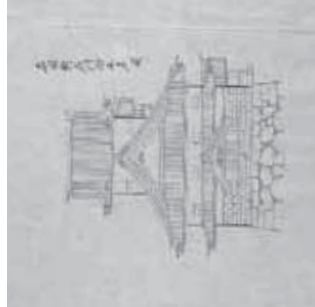
五十間長屋～菱櫓 (東面) 宝曆大火前



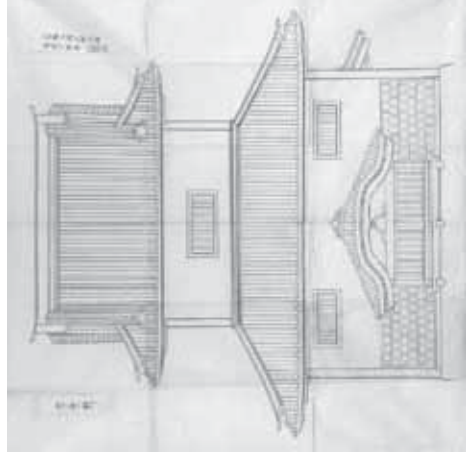
橋爪門続櫓 (東面・北面) 天明8年(1788)以後



橋爪門続櫓 (東面・北面) 宝曆大火前

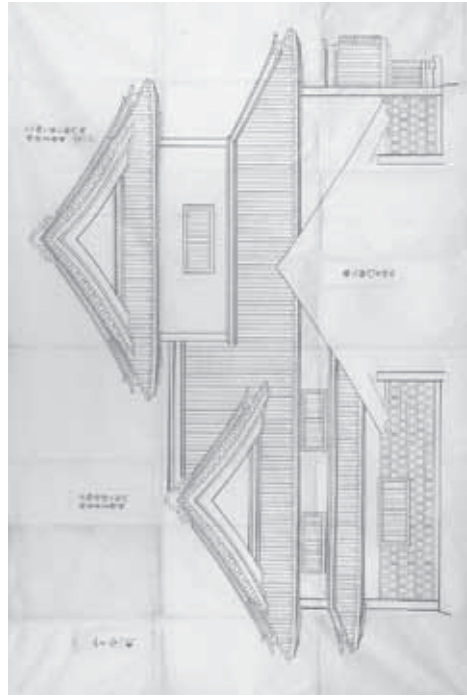


「加州金沢御城来因略記」(石川県立図書館蔵)
天保15年(1844)



「二ノ御丸橋爪御門脇御櫓平絵図」

「二ノ御丸及桐木御門等絵図」
(金沢市立玉川図書館蔵)
文化5年(1808)～

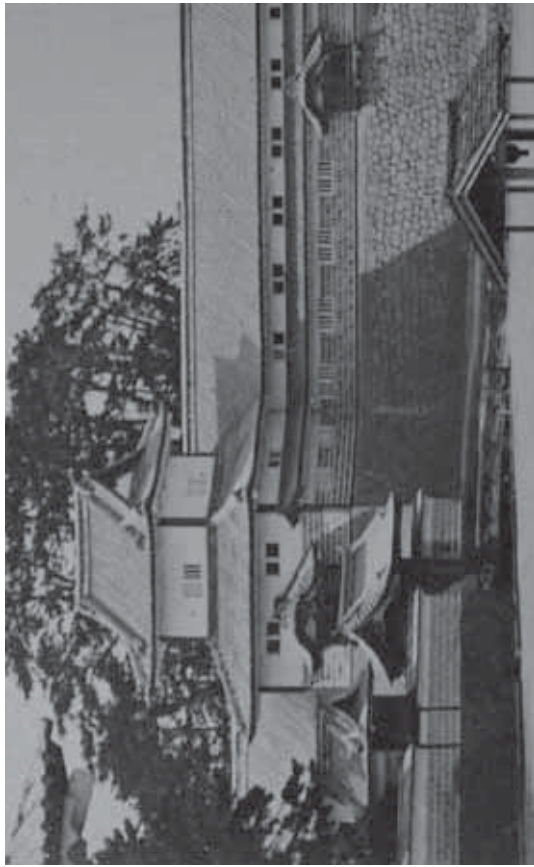


「二ノ御丸橋爪御門脇御櫓妻絵図」

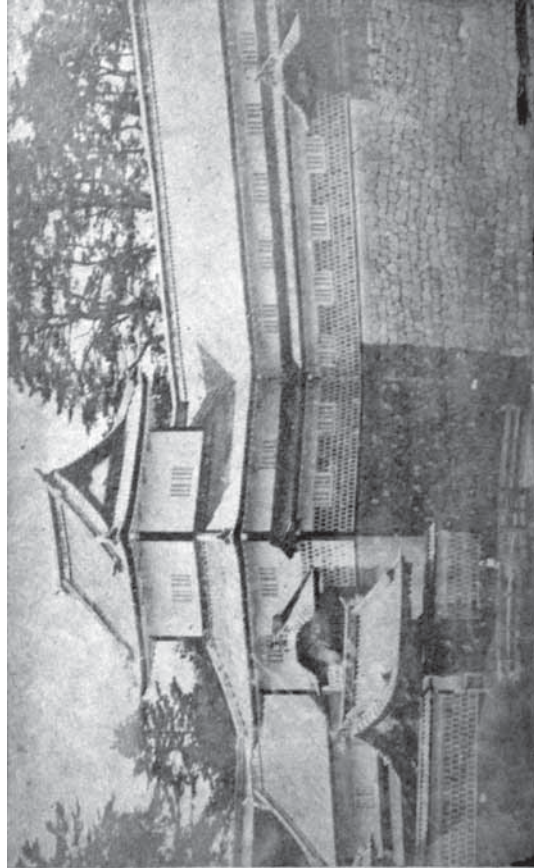
第12図 関連絵図8



橋爪門続櫓・五十間長屋・菱櫓 明治11年(1878)
吉川弘文館刊『写真集 明治の記憶』より



橋爪門続櫓 明治11年(1878)
吉川弘文館刊『写真集 明治の記憶』より

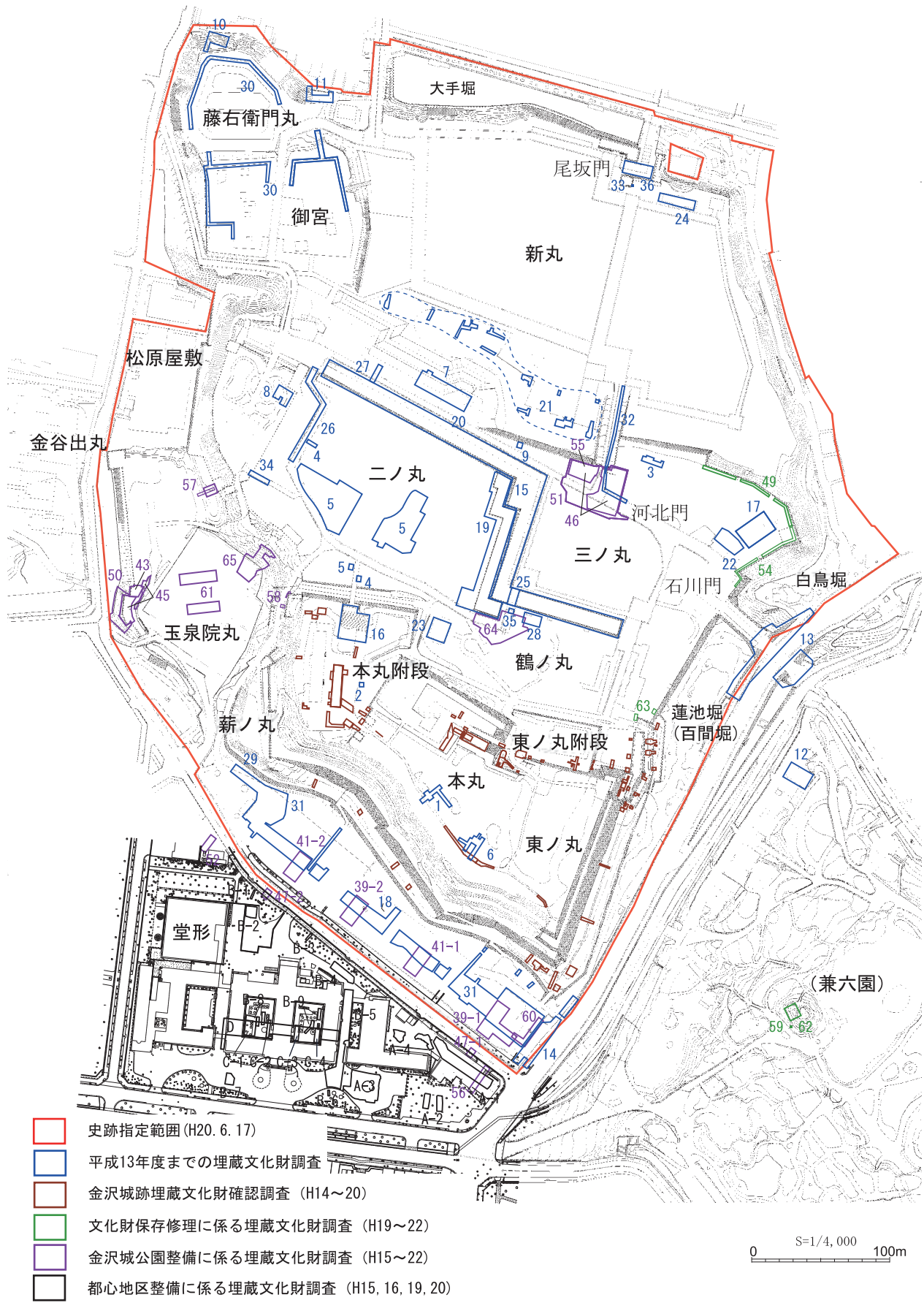


橋爪門続櫓 (石川県立歴史博物館蔵)



菱櫓 (石川県立歴史博物館蔵)

第13図 明治期の写真



第14図 金沢城跡発掘調査位置図 (～平成22年度)

第3表 金沢城跡発掘調査一覧

No.	調査箇所	調査年度	調査主体	調査原因	備考	文献
1	本丸	昭和43(1968)	金大金沢城調委	学術研究	四脚門・礎石建物跡	井上1969・吉岡1985・増山1999
2	本丸附段	昭和43(1968)	金大金沢城調委	学術研究		井上1969・吉岡1985・増山1999
3	三ノ丸	昭和43(1968)	金大金沢城調委	学術研究	川原石石積	井上1969・吉岡1985・増山1999
4	二ノ丸	昭和43(1968)	金大金沢城調委	学術研究	能舞台跡・台所跡・極楽橋付近建物跡	井上1969・吉岡1985・増山1999
5	二ノ丸	昭和44(1969)	県教委・金大	校舎増築	殿舎跡・排水施設・用水路	県教委1970・吉岡1985・増山1999
6	本丸	昭和44(1969)	県教委・金大	学術研究	三階櫓・三十間長屋跡	県教委1970・吉岡1985・増山1999
7	四十間長屋	昭和50(1975)	金大	学生会館別館建設	長屋礎石・礎石垣	上野1976・吉岡1985・増山1999
8	二ノ丸	昭和52(1977)	金大	学術研究	明治14年焼失の御殿跡	佐々木1981・吉岡1985・増山1999
9	三ノ丸～四十間長屋間通路	昭和54(1979)	金大考古学研究室	無線アンテナ設置	大型礎石	佐々木1980・吉岡1985・増山1999
10	藤右衛門丸北側法面裾部	昭和56(1981)	金大考古学研究室	擁壁設置	石垣列・瓦	貞末他1986・増山1999
11	黒門横北側懸崖部	昭和61(1986)	金大考古学研究室	境界崖崩落防止工事	石垣列・切石側溝、瓦	貞末他1989
12	兼六園(江戸町推定地)	昭和64(1989)	県埋文センター	店舗改築	17世紀初期の遺構面(礎石建物等)	県埋文センター1992
13	石川門前土橋(石川橋)	平成4～6(1992-94)	県埋文センター	道路整備	土橋の形成過程 16世紀後半頃の鍛冶関連遺構等	県埋文センター1997・1998
14	車橋	平成6(1994)	県埋文センター	道路整備	石垣	県埋文センター1996
15	内堀第1次・菱櫓	平成9(1997)	県埋文センター	公園整備(復元整備)	堀・橋脚(埋置された刀・銃・銃) ・菱櫓礎石等	本報告
16	本丸附段	平成10・12(1998・2000)	(財)県埋文センター	公園整備(復元整備)	階段跡	滝川1999・湊屋・土田他2001
17	三ノ丸第1次	平成10(1998)	(財)県埋文センター	公園整備(施設建設)	鉄砲所跡(鍛冶場遺構)、鉄砲部品	金沢城研究調査室2006a
18	いもり堀第1次	平成10(1998)	(財)県埋文センター	公園整備(復元整備)	天正～元和頃の堀・土橋、元和以後の堀・櫓台	三浦1999
19	五十間長屋	平成10-11(1998-99)	(財)県埋文センター	公園整備(復元整備)	石垣内部構造 櫓・長屋礎石、17世紀初頃の遺構面	本報告
20	内堀第2次	平成11(1999)	(財)県埋文センター	公園整備(復元整備)	西半北側石垣の構造把握	本報告
21	新丸第1次	平成11(1999)	(財)県埋文センター	公園整備(園路整備)	近代に埋没した堀の範囲確定	土田2000
22	三ノ丸第2次	平成11(1999)	(財)県埋文センター	公園整備(施設建設)	礎石建物(番所跡)、石組井戸	(財)県埋文センター2002a
23	鶴ノ丸第1次	平成11(1999)	(財)県埋文センター	公園整備(施設建設)	木樋・石樋(辰巳用水)	土田2000
24	新丸第2次	平成11(1999)	(財)県埋文センター	公園整備(施設建設)	16世紀後半から末期頃の遺構面	(財)県埋文センター2002a
25	橋爪門外橋脚基礎	平成11(1999)	(財)県埋文センター	公園整備(復元整備)	橋脚基礎の構造把握	本報告
26	二ノ丸園路	平成11(1999)	(財)県埋文センター	公園整備(園路整備)	石組遺構	
27	三ノ丸第3次	平成11(1999)	(財)県埋文センター	公園整備(設備設置)	土坑	本報告
28	鶴ノ丸第2次	平成12(2000)	(財)県埋文センター	公園整備(復元整備)	16世紀末期頃の遺構面	湊屋・土田2001
29	いもり堀第2次	平成12(2000)	(財)県埋文センター	公園整備(園路整備)	慶長後半から元和年間の石垣	湊屋・土田2001
30	北ノ丸第1次	平成12(2000)	(財)県埋文センター	公園整備(園地整備)	火葬遺構、空堀跡、石瓦等	湊屋・土田2001
31	いもり堀第3次	平成12(2000)	(財)県埋文センター	公園整備(園路整備)	元和以前の堀、土橋・土俵護岸 金箔瓦	湊屋・土田他2001
32	三ノ丸第4次	平成12(2000)	(財)県埋文センター	公園整備(園路整備)	河北門石垣台・礎石、16世紀後半～末期頃の遺構面	加藤2001
33	新丸第3次	平成12(2000)	(財)県埋文センター	公園整備(園路整備)	尾坂門石段、16世紀後半～末期頃の遺構面	湊屋・土田他2001
34	風呂屋口門等	平成13(2001)	(財)県埋文センター	公園整備(園路整備)	石段、石組溝	富田・湊屋2002
35	橋爪門桁形	平成13(2001)	(財)県埋文センター	公園整備(園路整備)	土坑、ピット	富田・湊屋2002
36	尾坂門	平成13(2001)	(財)県埋文センター	公園整備(植栽)	石組溝、路面	富田・湊屋2002
37	本丸周辺	平成14(2002)	金沢城研究調査室	学術研究	本丸虎口変遷の把握	金沢城調査研究所2008a
38	本丸周辺	平成15(2003)	金沢城研究調査室	学術研究	三十間長屋統櫓台石垣の調査等	金沢城調査研究所2008a
39	いもり堀	平成15(2003)	金沢城研究調査室	学術研究(公園整備)	鯉喉櫓台の検出	金沢城研究調査室2004a
40	本丸周辺	平成16(2004)	金沢城研究調査室	学術研究	寛永大火以前の2面の遺構面	金沢城調査研究所2008a
41	いもり堀	平成16(2004)	金沢城研究調査室	学術研究(公園整備)	築城当初の堀の規模を確認	金沢城研究調査室2004a
42	本丸	平成17(2005)	金沢城研究調査室	学術研究	本丸三階櫓石垣	金沢城研究調査室2006d
43	玉泉院丸	平成17(2005)	金沢城研究調査室	学術研究(公園整備)	近代の改修、石垣上部の二重塀の基礎構造の把握	金沢城調査研究所2010a
44	本丸	平成18(2006)	金沢城研究調査室	学術研究	元和期の大規模造成、初期金沢城の礎石建物	金沢城研究調査室2007a
45	玉泉院丸(南西石垣)	平成18(2006)	金沢城研究調査室	公園整備(石垣修築)	部分修理の把握、初期金沢城石垣	金沢城調査研究所2010a
46	河北門	平成18(2006)	金沢城研究調査室	学術研究(公園整備)	残存状況、規模、改修、創建時期の把握	金沢城研究調査室2007a
47	いもり堀	平成18(2006)	金沢城研究調査室	学術研究(公園整備)	南岸の位置確認	金沢城研究調査室2007a
48	本丸	平成19(2007)	金沢城調査研究所	学術研究	寛永8年大火以前の大規模遺構	金沢城調査研究所2008d
49	石川門(右方太鼓塀)	平成19(2007)	金沢城調査研究所	学術研究(太鼓塀修理)	控柱跡の確認	金沢城調査研究所2008d
50	玉泉院丸(南西石垣)	平成19(2007)	金沢城調査研究所	公園整備(石垣修築)	改修範囲と時期、初期金沢城石垣の変遷の確認	金沢城調査研究所2010a
51	河北門	平成19(2007)	金沢城調査研究所	学術研究(公園整備)	桁形門創建前(慶長後期以前)の遺構確認	金沢城調査研究所2008d
52	いもり堀	平成19(2007)	金沢城調査研究所	学術研究(公園整備)	南岸の位置確認	金沢城調査研究所2008d
53	本丸	平成20(2008)	金沢城調査研究所	学術研究	寛永8年大火以前の大規模遺構	金沢城調査研究所2009b
54	石川門(右方太鼓塀)	平成20(2008)	金沢城調査研究所	学術研究(太鼓塀修理)	控柱跡の確認	金沢城調査研究所2009b
55	河北門	平成20(2008)	金沢城調査研究所	公園整備(石垣修築)	石垣解体調査(ニラミ櫓台、一ノ門類当)	金沢城調査研究所2009b
56	いもり堀	平成20(2008)	金沢城調査研究所	公園整備(復元整備)	堀の南岸、辰巳用水石管、近世初期の石垣、石列等	金沢城調査研究所2009b
57	玉泉院丸(泉水)	平成20(2008)	金沢城調査研究所	学術研究(公園整備)	泉水北部の遺構確認	金沢城調査研究所2009b
58	玉泉院丸(いもり坂石垣)	平成20(2008)	金沢城調査研究所	学術研究(公園整備)	石垣変形箇所の基礎部試掘	金沢城調査研究所2009b
59	兼六園栄螺山	平成21(2009)	金沢城調査研究所	文化財修理(石垣修築)	石垣解体調査	
60	いもり堀	平成21(2009)	金沢城調査研究所	公園整備(石垣復元)	鯉喉櫓台石垣東部の残存状況確認、一部解体	
61	玉泉院丸	平成21(2009)	金沢城調査研究所	学術研究(公園整備)	泉水中央部、北部の遺構確認(中島、出島、景石等)	金沢城調査研究所2009c
62	兼六園栄螺山	平成22(2010)	金沢城調査研究所	文化財修理(石垣修築)	石垣解体調査	
63	石川門(左方太鼓塀)	平成22(2010)	金沢城調査研究所	学術研究(太鼓塀修理)	控柱跡の確認	
64	橋爪門	平成22(2010)	金沢城調査研究所	学術研究(公園整備)	二ノ門礎石根固坑、石組暗渠	
65	玉泉院丸	平成22(2010)	金沢城調査研究所	学術研究(公園整備)	泉水北東部の遺構確認(護岸石組・景石等)	金沢城調査研究所2010c
A	県庁跡地(堂形)	平成15(2003)	(財)県埋文センター	都心地区整備(確認調査)	焼米(堂形米蔵関連遺物)、近世初期以前土壇遺構	伊藤2004
B	県庁跡地(堂形)	平成16(2004)	(財)県埋文センター	都心地区整備(確認調査)	足軽番所、堂形馬場	伊藤2005
C	県庁跡地(堂形)	平成19(2007)	(財)県埋文センター	都心地区整備(施設建設)	古代～近世の遺構面	林2008
D	県庁跡地(堂形)	平成20(2008)	(財)県埋文センター	都心地区整備(施設建設)	堂形建物、石垣、堀跡、古代～中世の遺構面	加藤2009

県教委:石川県教育委員会 県埋文センター:石川県立埋蔵文化財センター (財)県埋文センター:石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター

金沢城研究調査室:石川県教育委員会事務局文化財課金沢城研究調査室 金沢城調査研究所:石川県金沢城調査研究所

第3章 調査の概要

第1節 調査報告の対象

今回報告する遺構は、前章で記述した通り、二ノ丸から三ノ丸・鶴ノ丸に及ぶ広い範囲にわたっている。報告を行うにあたり、対象となった遺構について、調査の目的・方法等により3つに区分することとした。第1は二ノ丸内堀とその周辺の遺構、及び菱櫓・五十間長屋・橋爪門続櫓とその周辺の遺構で、これらを上面遺構と称する。第2は建物群の土台である櫓（長屋）台石垣である。第3は、内堀や櫓（長屋）台石垣が構築される以前の遺構で、下面遺構と称する。本書では、第1の上面遺構と第2の櫓（長屋）台石垣について報告し、第3の下面遺構及び遺物については次回に報告する。

上面遺構（第4章）は、復元整備の対象とされた遺構で、近世後期の状況を確認することを一義的な目的として調査を実施した。二ノ丸内堀と周辺の遺構（第1節）としては、東端（南門以東）を除く二ノ丸内堀全域（法面石垣を含む）、内堀に面する橋爪一ノ門及びその門前に架かる橋（内堀橋と呼称）等が属する。なお、近世後期から着手前までの状況については、近代以降の改変として略述する。菱櫓・五十間長屋・橋爪門続櫓とその周辺の遺構（第2節）としては、建物本体の他、櫓（長屋）台（平面）、櫓（長屋）台に取り付く小階段、橋爪門と二ノ丸を結ぶ階段（二ノ丸階段）が属する。また復元整備の付帯工事に係り調査した三ノ丸第3次調査区の所見についても、上面遺構に含めて報告することとした（第3節）。なお、鶴ノ丸第1次調査区については、二ノ丸階段の側壁を為す石垣台の延長部分が検出されているため平面測量図を掲載したが、その主たる調査結果については別稿で報告する。

第2の櫓（長屋）台石垣（第5章）は、建物群復元に際し、安全管理等の観点から解体・積み直しの対象となったもので、解体調査の結果から、石垣の表面的な部分のみならず、櫓（長屋）台の内部構造や個々の石材形状・加工等の情報を得た。

第3の下面遺構（次回報告）としては、櫓（長屋）台石垣解体中に検出された石垣構築以前の遺構、橋爪一ノ門周辺で検出された内堀構築以前の遺構が属する。

第2節 調査の方法

1. 調査区画の設定

今回報告する調査区は、数ヶ年次にわたるもので、調査区画は年次ごとに設定されている（第15図）。

平成9年度に実施した二ノ丸内堀と菱櫓の平面調査では、内堀の中央部を1区、東部を2区、菱櫓を3区、内堀の西部を西から順に50m単位に区画して5～7区とした。

平成10～11年度に実施した五十間長屋・橋爪門続櫓・二ノ丸階段等の平面調査では、五十間長屋部分のみ細分し、北側の屈曲部分を2区画して北Ⅰ区・北Ⅱ区、南側を北から順に15m単位に区画（南端は15m未満）してⅠ～Ⅳ区とした。

ただし、これらの調査区画においては、調査の着手順を反映している点（二ノ丸内堀・菱櫓）、遺物の取り上げ位置の記録を念頭に置いて便宜的に設定している点（五十間長屋）等、遺構の記述に際しては必ずしも適当ではないため、今回の報告では、遺構（建物基礎等）の平面形状・構造に従った部分呼称を優先した（第4章第1節1・第2節1）。

また、平成10～11年度に実施した櫓（長屋）台石垣の解体調査に際しては、石垣面ごとに番号付を行った（第5章第1節1）。

なお第15図は今回報告する調査区全体の案内図である。調査区が広範囲にわたるため、基本となる

平面図は26図面に分割して表示し(第19～44図)、併せて上記調査区画、公共座標、主要な横断エlevationの位置等を表示した。右上には年次ごとの調査範囲を色分けして示した。

2. 調査の方法

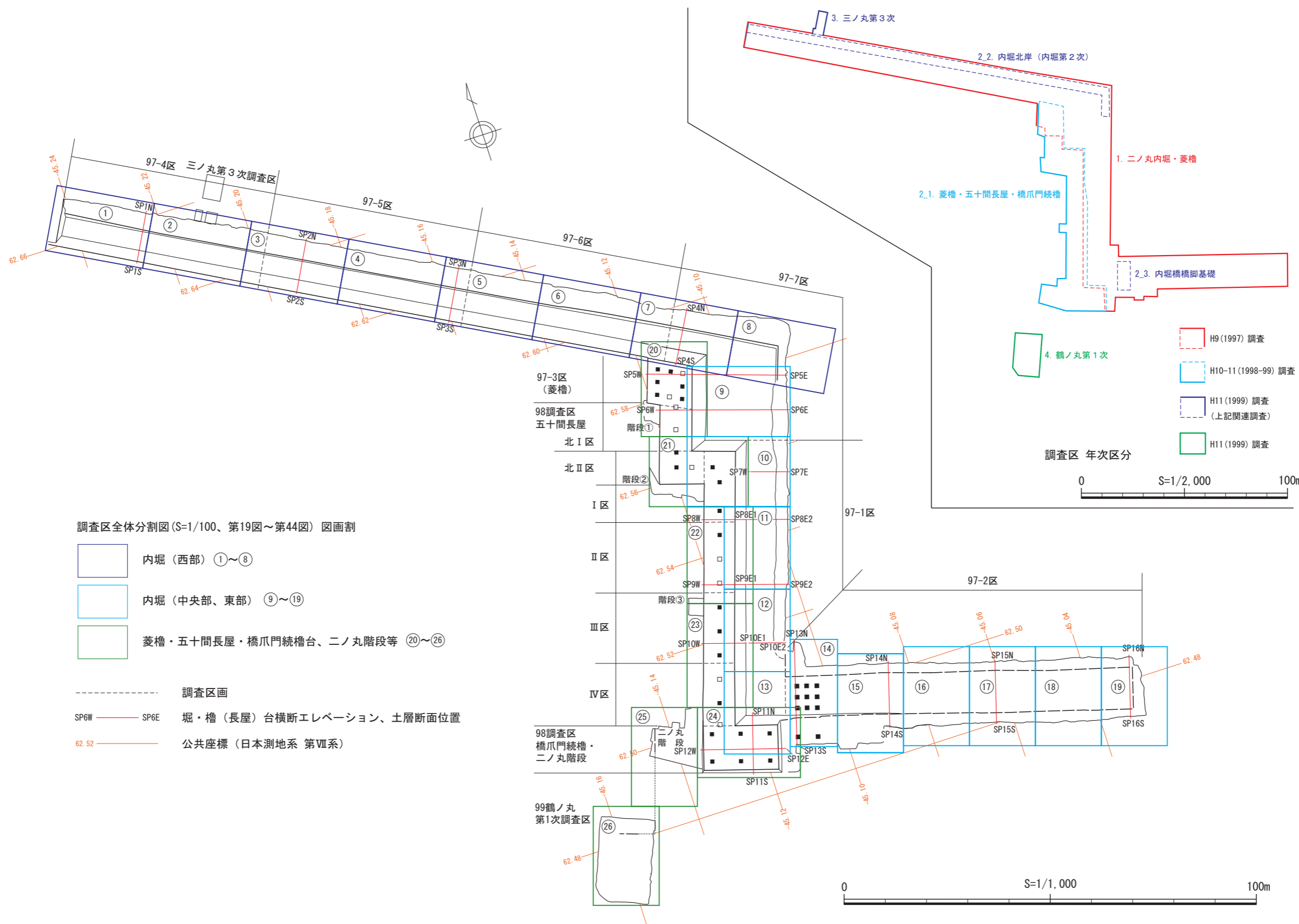
二ノ丸内堀は、近代以降の整地土・流入土が厚く堆積しており、これらの大半は、バックホー等重機を導入して掘削した。また水槽・石垣・石管等近代の構造物については、人力掘削により精査した後、重機を用いて除去した。内堀底面付近においては、近代の堆積土も含め、人力で掘削・精査した。

菱櫓・五十間長屋・橋爪門続櫓台上面では、水槽(菱櫓)や松の大木(五十間長屋)があった。松の大木については、上面調査の段階までは、建物基礎保護のため抜根を行わず、根本付近を伐採するに留めたものが大半で、切り株以下は石垣解体調査の進捗状況に応じて除去した。水槽の撤去及び表土については小型のバックホーを用い慎重に除去した。

櫓(長屋)台石垣の解体では、石垣石材の吊り上げにクレーン・ユニック車を用い、裏込め栗石・盛土は重機であらかた掘削したが、石垣石材周辺及び解体中に確認された遺構面については人力で精査・掘削した。解体調査の工程については第5章第1節で記述する。

調査の記録図面については、全体平面・石垣立面・石垣解体平面等は委託業者による測量、土層断面・個別遺構の詳細平面等は調査員による実測で対応した。この他石垣解体に係り、解体前後の状況及び石材の個別観察のため記録カードを用いた。写真撮影は随時行ったが、工事と平行に進めた石垣解体調査においては撮影に十分な準備ができず、メモ写真が主体となった局面も多かった。

本調査は復元整備に係るものであるが、菱櫓・五十間長屋・橋爪門続櫓調査区については、櫓(長屋)台石垣を解体しており、内部構造の他、櫓(長屋)台上面における明治期まで存続した建物基礎、石垣構築以前の遺構等が影響を受けている。なお、橋爪門続櫓台内部の石積遺構1・2については、石材・排土搬出用の通路を確保するため南面・南辺の一部を対象に解体・積み直しを行ったが、その他の部分は保存措置を講じた。この他三ノ丸第3次調査区(第4章第3節)は付帯工事区域であり、記録保存の対象として取り扱った。



第15図 調査区全体案内図 (S=1/1,000、1/2,000)

第4章 上面遺構の調査

第1節 二ノ丸内堀と周辺の遺構

1. 二ノ丸内堀（全体平面第17・18図）

二ノ丸内堀は、二ノ丸・鶴ノ丸と三ノ丸を画する堀である。近代以降に大規模な改変を受け、調査着手時には二ノ丸北辺を除き埋没していた。絵図によると堀は鍵形状の平面形を呈するもので、二ノ丸北辺・東辺間及び二ノ丸東辺・鶴ノ丸北辺間で二折れし、鶴ノ丸北辺中央に食い違いの土橋（南門）を設け、更に東側へ延長していた。また辰巳用水から給水された水堀であって、三ノ丸と二ノ丸を結ぶ橋が架かり、二ノ丸・鶴ノ丸側には橋爪門（一ノ門）が開口していたこと等が窺える（第5～7図）。発掘調査はこのうち南門以東（約45m）を除く部分、延長約340mを対象とした。以下、二ノ丸北辺（1997-4～7区）を西部、二ノ丸東辺（1997-7・1区）を中央部、鶴ノ丸北辺（1997-2区）を東部として記述を進める。

近代以降の改変として、まず全体が水抜きされた後、東部では石垣の多くが抜き取られ、早い段階で埋め立てを受けている。中央部ではやや遅れて、石垣新設による堀幅の縮小後、水槽8基（菱櫓上を含めると9基）とこれに附属する排水石管が構築されている（第16図）。これらの改変は明治43年（1910）頃までに行われたようである。大正13年（1924）以降、中央部（1997-1区）の水槽群は北端を残し埋め立てられ、兵舎や便所が建設された。中央部北端（1997-7区）の水槽は戦後も存続し、南寄りの2基は現存していた。

堀の深さは、東部三ノ丸側からは約2.5～3m、鶴ノ丸（橋爪一ノ門）側からは約4.5m、西部三ノ丸側から約5m、二ノ丸側からは約10m、櫓（長屋）台のある中央部からは約11～12mを測る。幅についても各部によって異なり、西部では最も狭く上面約13m及び底面約4.5m、中央部南半・東部では約12m及び約7～9.5m、中央部北端（菱櫓東）が最も広く約23m及び約16mを測る（第42～53図）。

堀底面は地山が基盤であるが、黒色粘質土・黄褐色粘質土・黄褐色砂礫など箇所ごとに様相が異なる。漆喰張り等、漏水防止用の造作は認められない。西部・東部の底面に比較して、中央部の底面は凹凸が著しい。大多数は近代以後の削平と見られるが、二ノ丸側（五十間長屋下）石垣沿いにピットが列をなす箇所があり、石垣修築時等の足場設置に係る遺構の可能性もある（第59図）。

堀内に近世段階の堆積土が遺存していたのは東部のみで、中央部・東部境付近に架かっていた橋跡周辺に瓦等の遺物が集中していた。近世における維持管理か、近代以後の改変の一環かは不明であるが、浚渫が徹底して実施されたことを示す。

法面の護岸については、①二ノ丸・鶴ノ丸側は全て石垣であるのに対し、三ノ丸側は、②西部～中央部北端が腰巻（水敲）石垣、③中央部中央が土羽、④中央部南端～東部が鶴ノ丸側と同じく総石垣となっている。ただし、④の石垣は下部1～2段を除き大部分が撤去されていた。このうち中央部南端については、石垣前面に盛土が施されている状況が確認された（第59図）。北側の土羽部分とのすり合わせを図ったものと考えられる。また③の中央部土羽には、一定レベル（標高40.3～41.2m）に浸食痕が認められ、水位を反映すると考えられる。

なお、西部北岸西側では一部に地山が露呈しており、東へ向かって下降する状況が看取される。1997-6区（菱櫓下西側）付近の堀底面は黒褐色粘質土（黒ボク）が基盤に見られ、南北に伸びる谷状地形の存在が推定される。また東部鶴ノ丸側では、撤去された石垣の背面に地山（基盤層）・郭造成土の堆積状況が観察できる（第57・58図）。地山の高さは標高42.7m前後であり、この上に中世・近世初期以降の土層が整然と堆積している。

2. 石垣

前項で述べた通り、二ノ丸内堀は中央部東岸を除き石垣を伴う。このうち、二ノ丸・鶴ノ丸側及び東部三ノ丸側の最下部では、寛永8年(1631)の二ノ丸造成・内堀構築に伴う当初の石垣(金沢城石垣編年4期)が確認された。なお最下部を除く中央部二ノ丸側の菱櫓・五十間長屋・橋爪門続櫓台石垣は、寛永の構築時と異なる特徴があり、それぞれ寛文8年(1668)・宝暦13年(1763)・文化5年(1808)の修築記録と対応する。今回解体・積み直しの対象となったこれらの石垣については第5章で取り上げる。ここでは西部北岸から中央部北端にかけて検出された腰巻石垣について詳述することとし、西部二ノ丸側の石垣(二ノ丸北面石垣等)は菱櫓台石垣と、東部の石垣は櫓(長屋)台石垣下部とそれぞれ一体的に構築されているので概略のみ示す。

(1) 二ノ丸北面石垣(2140N)・裏口門土橋石垣東面(2210E)(別添付図)

内堀西部西端の裏口門下から菱櫓周辺まで、内堀西部南岸全体を占め、ほぼ完存している。根石部分は大型刻印をもつ寛永構築期の石垣であるが、大部分は寛文8年(1668)修築時(5期)の状況を示す。菱櫓台北面・東面と一体的に修築されており、石材や積みの特徴は同じである。

(2) 内堀西部北岸石垣(2210S)・内堀中央部東岸石垣(2220W)(別添付図)

内堀西部三ノ丸側(北側)から中央部北端の法面は、上部が40~50°の勾配をなす土羽で、下部約2m分は石垣である。法面下部3~5段程度までの石材は戸室石で、4期(寛永年間頃)の特徴をもつものが目立つ。積みは横目地の通る布積みで、間詰めには栗石を用いる。築石を横置きし、本来の側面を正面に向けたものが散見される。なお近世の絵図にはみられない。

法面に設けたトレンチ(平面位置第17・18図、土層断面第60・61図)の所見では、石垣掘方は奥行き約0.7~1.2m、高さ約1.5~2.2mを測るもので、法面裾を垂直近く切り下げて作られている。掘方底面は堀底面とほぼ同レベルで、ここから数段の築石が据えられる。裏込めは栗石主体である。

西半ではこの上部に5cm単位程度の盛土が互層状に施され土羽に擦り付けられている。東半では戸室石の上に川原石が積み足された状態となっているが、川原石の背後も栗石の裏込めが認められ、より上位の法面も西半と同様に互層状の盛土によって整地されている。なおfトレンチ(第61図)では、戸室石部分と川原石部分とで裏込め栗石に混じる土の質が変わっていることが確認される。

上部の川原石積周辺では板ガラス破片が出土しており、構築は近代に下る可能性がある。下部については、年代を特定できる遺物は出土していない。石の積み方に一般的ではない特徴があり、上部川原石積との切り合いも明確ではないが、腰巻(水敲)石垣という特性を考慮すると、近世に遡る可能性も残る。

(3) 鶴ノ丸北面(2110N)・三ノ丸南面石垣(2230S)(別添付図)

内堀中央部南端から、東端の南門下に到る両岸(鶴ノ丸北面・三ノ丸南面)を占める石垣である。現況では下部1~2段のみ遺存している。内堀構築当初(寛永8年(1631))に遡るもので、内堀中央部・西部の二ノ丸側石垣の最下部と一体的に構築されている。

なお中央部と東部との間、橋の西側に石列が見られるが、これは近代の早い段階において、東部の石垣撤去・埋め立てに係り、土留めとして設置されたと考えられる。

3. 橋・門

(1) 内堀橋(第54・55図)

内堀東部西端に位置する。北側の三ノ丸と南側の橋爪門(一ノ門)を結ぶ木橋で、二ノ丸への正式なルート上にあり、とくに格式の高い橋であったと考えられる。絵図等に特定の名称は認められず、本報告では内堀橋と呼称する。

遺構としては、橋脚の基礎9箇所が検出された。橋脚基礎は、長径2mに及ぶ大型ピット(橋脚掘

方)や礎石で構成されており、架橋方向(南北)に沿って中央主脚列・東側支脚列・西側支脚列がそれぞれ3基の橋脚(基礎)を伴い配置されている。橋は、中央主脚列ピットの土層堆積状況から、三段階の架け替えが推定される。以下では、まず最終段階(第3段階)の状況を説明し、次にそれ以前の様相に言及する。

【最終段階(第3段階)】

最終段階(第3段階)の基礎構造は、中央主脚列が掘立(埋め込み)、左右の支脚列が戸室石製の礎石建ちとなっていた。橋脚基礎間距離(真真)は、南北方向で2.67m、東西方向で2.76mを測る。なおその主軸は、内堀主軸に対しやや斜交しており、橋爪門続檣台と近似した方向を示す。

中央主脚列のうち、南端ピット(P4)には、橋脚本体の一部が原位置を留めた状態で遺存していた。先端の尖った杭状を呈するツガ属の材で、太さ約30cmを測る。なお橋脚の下位にはやや不整形の盤状の戸室石があるが、橋脚とは接しておらず、前段階の礎盤と考えられる。中央ピット(P5)・北端ピット(P6)では橋脚は遺存していない。P5では大型礎石数個、P6では長辺約60cmの戸室石製礎石が検出されたが、土層の状況から見て橋脚抜き取り後に入り込んだものである。礎石は上面中央に柄穴があり、上半が精緻に整形されている一方、下半は粗加工のままであり、本来地表に据えられていたものである。原位置は保っていないが、ある段階に転用され、橋脚基礎として機能していたことも考えられる。

一方、支脚列の礎石は大半が一辺50cm前後(P8上のみ60~70cm)、厚さ25cm以上の平面略正方形を呈する。上面中央には柄穴が設けられており、平面方形(P3・7・9)と円形(P1・2・8)とがあるが、大きさは辺・径14~18cm、深さ12~15cmに収まる。礎石は若干の据え方を有するようであるが、その上面は堀底より上位となる。

最終段階(第3段階)の遺構は、文化5年(1808)に改修され、明治14年(1882)頃まで存続した三代目の橋に対応すると判断される。

【最終段階(第3段階)以前】

中央主脚列掘方(P4~P9)の断面観察によると、最終段階を含め三段階の変遷が看取される。第1段階については、中央ピット(P5)でのみ埋土・礎盤(根石)が確認できる。P5は堀底面から1.52m、両端のピットに比べて約30~50cm深く掘削されており、その最深部には周囲を礫混じりの鈍い赤褐色粘質土で固められた戸室石製の礎盤(根石)が設置されている。礎盤(根石)上面には柄穴があり、本段階には柄が切られた橋脚材があてがわれていたことが推定できる。上記の通り、北端(P6)・南端(P4)では対応するレベルに基礎は見られず、両者ではより浅いレベルに位置していたが、第2段階の掘方に重複して失われたものと推定される。

第2段階は、黄褐色系・灰褐色系・黒褐色系粘質土を埋土とする段階で、南端のP4ではやや不整形の盤状戸室石を、中央のP5では第1段階の礎盤(根石)をそれぞれ礎盤(根石)とする。また北端のP6は礎盤(根石)が見られず、橋脚が直接地山(基盤層)に接していた可能性が高い。P5では、本段階の橋脚形状を反映する土層堆積が認められる(第55図8~11層)。第3段階への移行時に埋土を乱すことなく抜き取られ、そのまま埋め戻されたと推定できるもので、これより本段階の橋脚は幅24cm前後だったと考えられる。なお、橋脚を反映した土層は第1段階礎盤(根石)と接しているが、柄穴の位置とは合致せず、段階差を見出す根拠ともなっている。

第3段階は、第2段階の橋脚を抜き取り、その跡を埋め戻し改めて橋脚を設置したものである。以上、中央主脚列基礎の変遷については、第55図土層注記の補足として変遷模式図を示した。

支脚列(P1~P3、P7~P9)については、礎石の下位に大型のピットが重複している状況が窺える。P3・P9では、礎盤(根石)とおぼしき石材も遺存している。段階の細別等は不明であるが、文化期の改修以前は、掘立構造であったと考えられる。またこれらのピットは礎石に対し、やや

内寄りに位置している。主脚列中軸と支脚列ピット間（真真）の平均距離は2.43m、またP3～P9の礎盤（根石）間（真真）4.5mとなり、最終段階に比べ橋桁幅が狭かったと推測される。

橋脚基礎周辺は、内堀において近世の堆積土が例外的に残っていた地点であり、遺物も比較的多い。橋の部材として、P9付近で欄干の一部（親柱）が出土した他、多種多量の鍔が出土している。

更にはほぼ原位置を保っていると判断される遺物群に、柄鏡・刀（1・2号刀）・銅銭がある。このうち柄鏡は、鏡背に「藤原周重」の銘と鶴・亀・松その他の図柄を配した様式（蓬萊柄鏡）で、P7周辺で鏡面を下にして出土した。1号刀については、P3・6間において、鏢・柄を伴わない刀身・切羽が、切先を南東側、刃を北東側に向け、ほぼ水平の状態で出土した。やや離れて漆塗りの鞘も出土している。2号刀はP9の北、三ノ丸南面石垣の前において、漆塗り鞘に納められた状態で出土しており、刃を石垣側に向けて置かれていた（写真図版10）。これらについては、寛永通宝の初鑄年代（享保11年（1726））や柄鏡の製作年代（18世紀中葉前後）から、宝暦9年（1759）の大火以後、橋の架け替えに係る儀礼の際、据え置かれたものと考えられる。

第1段階の橋は、寛永8年（1631）の二ノ丸造成・内堀築造の一環として構築されたと判断される。その廃絶は宝暦9年（1759）の大火によると考えるのが妥当である。第2段階の開始については明確ではないが、宝暦の大火後間もなく再建されたと推定される。その廃絶は文化5年（1808）の二ノ丸火災に伴うもので、火災後の再建が第3段階に対応すると考えられる。

（2）橋爪一ノ門（第56図）

橋の二ノ丸・鶴ノ丸側には、寛永8年（1631）の二ノ丸造成に伴い整備されたと考えられる橋爪門が置かれていた。関連建造物は明治14年（1881）に焼失し、その後周辺の石垣（内堀南岸、頬当石垣、枅形石垣等）も撤去される等一帯は大きな改変を受けた。

橋爪一ノ門主体部分の下部構造も下位の石垣とともに削平されており、遺存していなかった。文化5年（1808）に修築された橋爪門続櫓台石垣東面下部では、およそ標高44.3mのレベルで調整の精粗が看取でき、一ノ門付近での地盤高を反映するものと判断されるが、これより見れば一ノ門主体付近の削平深度は3m以上となる。一方、門後方の削平は深さ1.3～1.7m程度に留まっている。この範囲において、東西に並ぶ大型ピット2基が検出された。検出位置から橋爪一ノ門控柱に係る遺構と考えられる。

西側のP1は1.86m×1.7mの平面矩形を呈し、深さは検出面より1.29mを測る。東側のP2はやや小さく、平面は1.72×1.45m、深さ72cmを測る。ともに内部には釉薬瓦等が充満していたが、これらを除去すると下部から戸室石が検出された。P1のものは一辺48cm・高さ51cmの切石材であるが、P2のものはやや不整形で、長軸76cm、高さ40cmの割石材である。どちらの石材も坑底に接しており、原位置を保っていると判断される。またその上面は、推定される近世前期の地盤面（標高43.7m前後）から約1.3m低いことから、掘立控柱の礎盤（根石）と考えられる。礎盤（根石）間距離は真真で4.80mである。

大型ピット本体は、礎盤（根石）周囲にまで釉薬瓦が混入しており、本来の埋土が失われていた状況から、ごく下部を除き、控柱掘方としての当初の形状を保っていないと考えられる。

なお控柱掘方の構築時期を示す資料は得られていないが、門創建時（寛永8年（1631））に遡る可能性が高い。ただし門廃絶時まで掘立構造のまま存続したとは考え難い。一般的な傾向として、近世のある段階に埋め戻され、礎石建ちに改修されたと考えるのが妥当である。一例として、当初の礎盤（根石）の上部に転用石材等を積み重ね、礎石の根固めとしたことを推測しておく。

第2節 菱櫓・五十間長屋・橋爪門続櫓と周辺の遺構

1. 菱櫓・五十間長屋・橋爪門続櫓台（第18図・第4表）

菱櫓・五十間長屋・橋爪門続櫓は、二ノ丸東辺の石垣を土台としている。この部分の石垣は、隣接する石垣や二ノ丸・鶴ノ丸面より高く構築され、櫓台の形状を呈する。発掘調査着手前の状況は、菱櫓台の南側にあった水槽以外特段の施設は見られず、五十間長屋以南には松の大木が並んでいた。本項では、主にこの櫓台の平面構造について記述し、立面・内部構造等の詳細は第5章で触れる。

本櫓台は、南北約100m、東西約32mの範囲を占め、平面積は約920㎡である。折れを形成する二ノ丸東辺の形状に則し、L字を重ねた細長い平面形状を呈する。

北端部は北西が鋭角（約80°）、北東・南西が鈍角（約100°・約98°）となる菱形で、菱櫓の土台をなす。東西（横幅）・南北中軸長は10.7mを測る。

菱櫓の南では西辺が狭まり、東西7.7m幅の細長い形状となる。南北長10.7mで東へ屈曲するが、東西長7.9mで再び主軸は南北方向に転じ、東西幅7.5m、南北長58.8mに及ぶ長大な直線部が形成されている。菱櫓以南からここまでが五十間長屋の土台をなす。以下五十間長屋の細分については、五十間長屋北側南北部・同東西部（以上北半）・同南側南北部（南半）と呼称する（第18・62図）。

南端部は東に張り出した東西軸・長方形の形状を呈する。東西18m、南北10.8mを測り、橋爪門続櫓の土台をなす。

櫓台の外縁は、12面の石垣により構成されている。各面の石垣のうち、菱櫓南辺・五十間長屋東西部南辺・五十間長屋南側南北部東辺・同西辺・橋爪門続櫓南辺は、孕み出し等大きな変形が認められる。なかでも五十間長屋南側南北部は、平面（上面）的には東辺が内側に入り込む一方、西辺は逆に大きく外側に張り出しており、両辺合わせて「く」の字状に歪んだ状態にある。ただし、辺の起点となる入角・出角を結んだラインは、東辺と西辺とで平行するので、変形以前の状況（ないしは設計線）を示すものと理解できる。同様に、他の変形箇所でも入角・出角間の直線を復元ラインとしている。

以上を踏まえ、櫓台外縁軸（第4表）を見ると、菱櫓北辺・南辺を除く各辺は、①菱櫓～五十間長屋南側南北部と②橋爪門続櫓に大別されることが判る。南北方向では①はN-18.1°-E、②はN-16.5°-Eを示し、とくに五十間長屋南側南北部と橋爪門続櫓とは鋭角気味に交わっている点が看取される。

櫓台の標高は、石垣天端（鬘石・角石上面）において、菱櫓北東角が最高で50.91m、五十間長屋南側南北部西辺（北入角から南へ18m付近）が最低で50.51mであるが、後者は経年変化により沈下したと見られる。また前者は経年変化の影響は小さいと思われるが、角石端をはね上げた箇所に相当し、周辺より10cmほど高い。度重なる修築もあって、標準となる標高は確定し難いが、菱櫓付近の50.8m前後が目安となる。

櫓台上面の地盤については、菱櫓～五十間長屋東西部西半は栗石、五十間長屋東西部東半～南側南北部は石垣背後のみ栗石で中心部は盛土、橋爪門続櫓は栗石となっている。ただし橋爪門続櫓上面の栗石層の厚みは10～30cm程度で、以下は盛土と栗石の互層となるのに対し、菱櫓～五十間長屋東西部西半は内部全体が栗石で構成されている可能性が高い。これらの相違は修築範囲に対応する。

建物基礎には礎石、礎盤（根石）、鬘石がある。礎石は、菱櫓・五十間長屋・橋爪門続櫓（長屋）台のそれぞれに配されているが、修築範囲に対応するように、形状や配置方法に違いがある。なお遺存していた礎石は、絵図と照合すると、主要な柱を支えるもののみで、束柱等の礎石は確認されていない。また菱櫓～五十間長屋東西部西半では石垣上面（鬘石）より2.3～2.4m下位で掘立柱の礎盤（根石）が検出された。宝暦期修築以前、近世前期段階の建物基礎と考えられる。鬘石は築石天端の上に積まれた平面長方形の板状を呈する材で、建物壁側の土台を構成するものである。

櫓（長屋）台の構築・修築年代については、第2章でも触れた通り、幾つかの文献史料に見え、調

査の所見もこのことと矛盾していない。ここで改めて要点を記す。

- ・ 櫓（長屋）台は、寛永8年（1631）大火後の二ノ丸造成工事の一環として構築された。
 - ・ 寛文8年（1668）、二ノ丸北面から菱櫓・五十間長屋台北半が修築された。
 - ・ 宝暦13年（1763）、五十間長屋台東西部東半～南側南北部が修築された。
 - ・ 天明8年（1788）、橋爪門続櫓台が修築された。
 - ・ 文化5年（1808）、二ノ丸火災を契機に橋爪門続櫓台が再度修築された。
- なお、天明8年の修築範囲は、文化5年の修築と重複したらしく、その実態は明確にできなかった。

2. 建物

（1）絵図との照合

建物について記述するにあたり、遺構（礎石等）と柱間寸法等を詳細に記載した絵図との照合について付言する。以下記述するように、建物遺構は完存している訳ではなく、また一部を除き柱位置までは特定できていないため、柱筋・柱間等の復元に際しては不確定な要素が多分に残る。そこで遺構と絵図とを照合し、同異を踏まえた上で、絵図の情報を援用して説明する。個々の詳細は建物ごとに触れることとし、ここでは照合作業上の留意事項や作業手順、問題点を示す。

- ・ 基本絵図として、詳細な寸法が記載されている「金沢城菱櫓絵図等 ②櫓及長屋の梁伏図と木権」（第9図）・「橋爪御門渡御櫓之図」（第10図）の二つを用いる。菱櫓・五十間長屋北側南北部は前者、五十間長屋東西部以南は後者に描かれる。対象となる時期は近世後期である。
- ・ 「橋爪御門渡御櫓之図」では、長大な五十間長屋南側南北部の両側辺において、総延長を示したと思われる寸法と、壁際の側柱間として記された寸法の総和に数 cm の差異がある。差異の理由は明らかでないが、本書では総延長記載の方を基準とする。ただし個々の側柱間寸法についても、総和のずれが数 cm 程度であることに鑑みて、とくに補正せず引用する。
- ・ 数値は二種類の絵図に記載された通り、建物軸は石垣外縁に平行するものとして、二種類の絵図を総合・補正した建物平面図を作成する。
- ・ 作成した建物平面図を櫓（長屋）台平面測量図と重ね合わせたところ、概ね合致した。ただし前者の東西幅がやや短いらしく、中軸同士は完全には一致せず、例えば北側（菱櫓・五十間長屋北側南北部）で合わせると、南側（五十間長屋南側南北部・橋爪門続櫓）で実寸10数 cm のずれが生じることとなった。ずれの長さからすれば、絵図記載寸法を計測した際の誤差等に起因すると推測され、実態とかけ離れている訳ではなく、部分ごとに照合する限りでは深刻な齟齬ではない。
- ・ 櫓（長屋）台上の礎石配置等からも、中軸線は意識されていたと判断されるため、柱筋の復元に際しては、遺構の中軸と絵図から復元した建物の中軸をできる限り合わせることにした。このために生じる上記のずれについては、建物平面図のうち五十間長屋東西部東半の長さを引き延ばすことで調整した（このため、第62～66図等に図示した建物復元ラインのうち、五十間長屋東西部の東西幅は、絵図記載数値と合致していない）。第62図は、遺構と絵図から復元した建物を照合したもので、橋爪門続櫓を除くと、絵図上の柱と遺構（礎石）が大略一致すること等が看取される。

（2）菱櫓

菱櫓は櫓台北端に位置した建物である。建物基礎遺構として、外側側柱基礎＝石垣天端（鬘石）の他、表土直下で礎石が6基、地盤となる栗石中から礎盤（根石）2基が検出された。礎石と礎盤（根石）は平面的に重複している箇所があり、前後関係を有する。以下、礎石が主体となる段階を新、礎盤（根石）が主体となる段階を古として記述する（計測値等については第5表参照）。

なお、以下の菱櫓・五十間長屋においては、時期判別の根拠等について簡単に触れることに留め、第6章第1節で改めて整理するものとする。

【新段階】(第63図)

礎石の配列は檜台と同軸で、平面形も同じく菱形を呈する。礎石は北西・南東・南西隅及び北辺・東辺・西辺の中央で遺存していた。この状況や絵図(「金沢城菱檜絵図等 ②檜及長屋の梁伏図と木権」第9図)の記載から、本来、四隅及び四辺中央に8基の礎石が設置されていたと考えられるが、南辺中央・北東隅の二箇所については、近代以後構築された水槽・水道管により撤去されたらしく、遺存していない。なお東西方向の礎石列は、檜台東西軸のうち北辺に平行している。

鬘石及び礎石の真真(中軸線及び礎石中心点の間)を計測した場合、鬘石～礎石間は1.98m～2.10m、平均2.05m、礎石間は2.98m～3.19m、平均3.10m(前者の1.5倍)を測る。これらの間隔が一定で、径5寸の柱が礎石端にあったとした場合、柱間は最小で3.02m、最大で3.10mと算出される。

礎石(A～F)は、鬘石等の転用材で平面方形を呈し、南北軸に平行して設置されている。深さ約20cm程度の据方をもつようであるが、その平面形状は明確ではない。2石重なった状態(A・C)と1石のみ(B・D・E・F)のもののが検出されている。前者の上面のレベルは標高50.53～50.65mであるが、1石のみのうちB以外は50.18～50.32mであり、20～40cmの差がある。なおBは基盤自体が高く、その上面は50.65mである。以上からD・E・Fも上部にもう1石あったとみるべきで、建物焼失後撤去されたと推測される。ただしいずれにしろ石垣天端(鬘石)上面よりは低い。A・B・Cとも上面には柱痕跡は認められず、土台を介して柱を受けていた可能性がある。

「金沢城菱檜絵図等 ②檜及長屋の梁伏図と木権」(第9図)では、礎石列に該当すると見られる柱列(内側の柱列)の四隅及び中央に大型・中型の柱(以下主柱とする)を、主柱間に2本の小型の柱を等間隔に描く。このように1辺を長さの等しい6区間に区切っている。ただし、主柱間の柱は赤色で表現されており、床面から立ち上がるものではなく、三階に用いられた柱と思われる。つまり内側の柱列を結ぶ区画線は、三階の範囲を示していると考えられる。

内側の柱列からこれを囲む外側の柱列(鬘石上面)までの間隔は、上記の2区間分(内側の柱列1辺の1/3)に等しく、その寸法は6尺7寸(約203cm)と記載されている。これより1区間は3尺3寸5分(約101.5cm)、3区間(主柱間)は10尺5分(約304.5cm)という数値が導かれる。

第63図では、上記絵図の寸法記載に基づき、柱筋位置を表示した。菱檜の南に位置する五十間長屋北側南南北部との整合上、中軸がわずかに東へずれるものの、おおよそ遺構の配置と合致した。

石垣北辺及び東辺中央では、鬘石ではなく雁木状の石材が設置されているが、これは上部建物の出し(出窓)があった位置に相当する。築石最上面に腕木の設置痕と見られる切り込みが認められ、当初から鬘石はなかったと見られる。切り込みの方向は、北辺のものは菱檜東辺・西辺に、東辺のものは北辺にそれぞれ平行する。雁木状の石材は建物撤去後に補充されたと判断される。

鬘石については、新段階・古段階ともに側柱を支えた基礎としての機能をもつが、上面に認められる方形孔は、後述する五十間長屋台や橋爪門続檜台の状況から、新段階には機能していないと考えられる。鬘石と側柱との間には土台が介在していたと考えられ、側柱の位置を示す痕跡は認められない。

礎石については、文化6年(1809)再建建物に用いられていたことは間違いなく、後述する古段階の礎盤(根石)の設置年代からも、天明7年(1787)の菱檜再建時に上記のような配置状況となったと考えられる。礎盤(根石)と重複している礎石B及び失われた南辺中央の礎石は、この時に設置されたと考えるのが妥当であるが、礎石A～F・C～Dについては検討の余地があり、後述するように、礎盤(根石)とともに古段階に設置され、新段階にも引き続き用いられていた可能性が考えられる。

【古段階】(第69図)

礎盤(根石)は石垣解体作業に係り檜台内部の栗石を掘削する中で確認された。掘方や柱抜き取り跡については、基盤が栗石であることもあって明確ではないが、周囲の石垣は寛文8年(1668)に修築された状態を留めていることから、礎盤(根石)は掘立柱の基礎とみなされる。

2基の礎盤（根石）は、菱櫓台の南北中軸上に長軸を沿わせて位置している。北側の礎盤（根石）アは、新段階の礎石と重複する。南側イ付近の新段階の礎石は失われているが、その推定位置から見て両者はやはり重複していたと考えられる。礎盤（根石）はともに石垣上部（鬘石上面）から約 2.4 m下位（標高 48.47m）に設置されている。2基の間隔は真真で 5.91mを測る。

礎盤（根石）はともに石垣角石の転用材で、北側のアが長辺 142cm、南側のイが 160cmを測る。ほぼ全体に二次加工のある切石材であるが、寛文期（石垣編年 5期）以後の特徴である稜線の縁取り加工（江戸切）が見られず、元和・寛永期（3・4期）の所産と考えられる。設置に際し、基盤の栗石との間に多量の鏝が差し込まれていた。またア周辺では、これを取り囲むように板状の木材が検出されており、掘方を支える型枠を反映する可能性がある。イの上面中央には長さ 97cm、幅 27cmの変色範囲が見られ、またア・イとも金具の痕跡らしき鉄錆が付着しており、柱痕跡と考えられる。

以上のように、菱櫓では礎盤（根石）は南北中軸上のみでしか確認されていない。しかし建物の構造からすれば、中軸や壁際以外にも柱とその基礎の存在が想定される。新段階で用いられていた礎石のうち、礎石A～F・C～Dについては、礎石Bのように直接礎盤（根石）と重複しておらず、礎石Bが1段（1石）であるのに対し、2段（2石）で構成されている。また2段のうち下部についてはすべての鬘石の転用材で、後述する五十間長屋の古段階礎盤（根石）とも共通する。さらに詳細に観察できていないが、柱材の炭化を思わせるような煤が付着するものも一部認められる（礎石D、写真図版 17）。以上から、礎石A～F・C～Dの下部は、礎盤（根石）ア・イと同時期に設置され、天明 7年（1787）の菱櫓再建時には、上部に石材を重ねられた上、改めて利用された可能性が考えられる。なお新段階に2段（2石）の状態で新規に設置されたと想定した場合、礎盤（根石）に重複する礎石Bが、中軸上にも関わらず1段（1石）である点が説明し難い。

鬘石上面には前述の通り方形孔が穿たれている。菱櫓における小型方形孔は、平面長方形（13～19×5～11cm）、深さ 10cm程度で鬘石長軸に平行するもの、平面正方形（一辺 13～15cm）を呈し、深さ 20cm程度のものが大半を占める。ともに鬘石と軸を合わせており、複数列（2ないし3列）をなしている。やや深い正方形タイプについては、側柱を直接支えた柄穴である可能性も考えられるが、全体的に間隔が一定しておらず明確にできない。ここでは側柱と鬘石との間に土台が介在したものとし、とくに平面長方形のタイプについて土台支持に係る柄穴と推測しておく。現況で方形孔が複数列認められることについても様々な推測が可能であるが、寛永創建時の鬘石を寛文修築時に再利用していること等を考えておきたい。

古段階建物の時期については、菱櫓台を含む広い範囲で石垣が修築された寛文 8年（1668）を上限とし、後述する五十間長屋において、時期的に平行すると見られる礎盤（根石）が宝暦 13年（1763）石垣修築により撤去されていることから見て、寛文 8年（1668）に再建、宝暦 9年（1759）の大火により焼失し、廃絶されたと判断できる。

（3）五十間長屋

五十間長屋は櫓（長屋）台中央に位置し、櫓（長屋）台の大部分を占める建物で、いわゆる多聞櫓と同じ形式である。建物基礎遺構として、側柱基礎＝石垣天端（鬘石）の他、表土直下で礎石が 10基、基盤である栗石中から礎盤（根石）3基が検出された。礎石と礎盤（根石）は平面的に重複している箇所があり、前後関係を有する。以下、礎石が主体となる段階を新、礎盤（根石）が主体となる段階を古として記述する。

【新段階】（全体第 18 図、北半第 64 図、南半第 65 図）

建物は、菱櫓に接続する北側南北部、東西部（以上北半、第 64 図）、続櫓に接続する南側南北部（南半、第 65 図）に三分区できる。

礎石は長屋台の中軸に沿って一列のみ配列されている。「金沢城菱櫓絵図等 ②櫓及長屋の梁伏図と

木権」・「橋爪御門渡御櫓之図」(第9・10図)によると、中軸上の柱(中柱)は五十間長屋全体で17基あるが、対応する礎石が遺存していたのは10基である(礎石番号については、欠落していると推定される箇所を含め通し番号としている。第64・65図)。北側南北部では、絵図によると中柱3基が表現されているが、対応する礎石が遺存していたのは南端(No.3)のみである。この礎石は中軸に対し、直交する方向に配置されていた。東西部では、先のNo.3の南延長ラインと東西方向の櫓台中軸線との交点(No.4)、これから約8.9m東へ離れた地点(No.5)の2箇所礎石が検出されている。絵図では3基の中柱が表現されており、遺構はその両端の柱の位置に該当する。南側南北部は、絵図によると11基の中柱が表現されているが、対応する礎石が遺存していたのは7基である。2基以上が連続して遺存している礎石間(真真)の距離は北端のNo.7～8間のみやや広く6.85m、これより以南では5.77m～5.92m、平均5.83m前後を測る。

礎石はいずれも石垣石材の転用で、No.3・No.8が角部材(角石ないし角脇石)、その他は築石(粗加工石・切石)である。面に大型の刻印を有する(No.4・6)、溶解した鉛瓦が付着する(No.3・12)、再加工とおぼしき痕跡がある(No.7・14・16)等の特徴が認められる。寛永期構築時から宝暦13年(1763)修築時まで、石垣石として使用されていたものであろう。寸法は、控長で117cm～68cmとばらつきがあるが、1mを越えるものは少なく、半数が60～80cmまでに収まる。

栗石上に設置されているNo.3・4の礎石には明瞭な据方は見られないが、礎石下に戸室石剥片等が若干敷かれる傾向がある。盛土上に設置されているNo.6～9・12～14・16には、10cm前後の浅い据方が伴い、据方底面にはやはり戸室石剥片等が敷かれていた。礎石が失われている箇所のうち、No.15地点では据方が明瞭に看取された。

五十間長屋北側南北部は菱櫓とともに「金沢城菱櫓絵図等 ②櫓及長屋の梁伏図と木権」(第9図)に詳細に描かれている。中軸上に中柱が3基表記され、このうち最北端の柱は菱櫓南辺との交点に位置する。中柱間寸法は北が1丈9尺4寸4厘(約587.94cm)、南が1丈7尺2寸9分8厘(約524.13cm)で、菱櫓南辺が斜交する分北側が長い。東西の側柱列は、菱櫓との取付部分を除き12区分され、2区間分の寸法5尺7寸6分6厘(約174.71cm)が記載される。なお東辺の南北端、西辺の北端は大型の柱が表現されている。側柱列と中柱列との間は1丈1尺7寸(約354.51cm)となっている。

五十間長屋東西部・南側南北部の詳細寸法は、「橋爪御門渡御櫓之図」(第10図)に見られる。ただし、寸法の記載は側柱側に限られ、中柱間への記入はないため、中柱と側柱との並びの一致を前提に、柱間寸法を加算することとなる。

東西部では中軸上に中柱が3基表記されており、柱間寸法は西側が1丈1尺8寸(約357.54cm)、東側は約536.92cmとなる。なお中柱列から北の側柱列までは約366.0cm、南の側柱列までは約365.9cmで、中柱列が中軸に位置していることが示される。南側南北部では中軸上に中柱が11基描かれている。柱間は10区分となるが、最北端のみ約686.83cm、以南の9区分は約583.1cmと算出とされる。なお中柱列は描写上ほぼ長屋台中軸に位置するが、記載寸法上の確認は難しい。

第64・65図では、上記絵図の寸法記載に基づき、柱筋位置を表示した。その結果、おおよそ遺構の配置と合致した。とくに南側南北部の礎石間の平均距離(5.83m)は、絵図から読み取れる中柱間寸法とほぼ一致している。

南側南北部東辺の鬘石上面には、幅25～32cmの切り込みが1.4m程の間隔を開け3本単位で刻まれている箇所が3箇所ある。これは天明8年(1788)再建建物の出し(出窓)に伴う3本の腕木の設置痕で、菱櫓の出しとは異なる構造を示唆する。

鬘石上面の方形孔は、宝暦期修築範囲である五十間長屋東西部東半以南では疎らとなり、出し腕木設置痕と重複する部分もある。この範囲において、方形孔を伴う鬘石は転用材と見てよく、新段階には方形孔は機能していないと考えられる。側柱との間には土台が介在していたと考えられ、側柱の位

置を示す痕跡は認められない。なお菱櫓ではほとんど見られなかった形状として、3～4cm四方の極小タイプがある。

新段階の礎石については、菱櫓と同じく、文化6年(1809)再建の建物に用いられていたと見て間違いない。また古段階の礎盤(根石)の遺存分布状況や文献等から、五十間長屋北側南北部では天明7年(1787)、同東西部以南が天明8年(1788)以後に設置されたと考えられる。

【古段階】(第69図)

礎盤(根石)は菱櫓同様、石垣解体作業に係り櫓台内部の栗石を掘削する中で確認された。北側南北部～東西部西側で検出され、東西部東側以南では認められない。五十間長屋南側南北部以南については推測が強くなるが、少なくとも東西部西側と一連の建物域である東側については当初設置されていたと見るべきで、宝暦13年(1763)の石垣修築により撤去されたと判断できる。掘方や柱抜き取り跡については、基盤が栗石であることもあって明確ではないが、周囲の石垣は寛文8年(1668)に修築された状態を留めていることから、礎盤(根石)は掘立柱の基礎とみなされる。

確認された礎盤(根石)は3基で、北側南北部北端ウ、同南端エ、東西部中央付近オに位置し、櫓(長屋)台の中軸線上におよそ合致する。新段階の礎石との関係では、エがNo.3と重複、オはNo.5(ただし遺存せず、絵図上での位置)と同位置にある。一方ウは、No.1(遺存せず、絵図上での位置)よりやや南に位置し、重複しない。これらの礎盤(根石)は、石垣上端(鬘石)からおよそ2.3mから2.4m下位(標高48.38～49m)に設置されている。なおウ・エ間の距離は真真でちょうど10mを測る。

礎盤(根石)の形状は、3基とも折損した鬘石を転用したもので、長軸94～114cm、幅60～64cm、厚さ25～33cmを測る。これらの上面には一辺47～49cmの正方形を呈する変色部分が認められ、柱の痕跡と判断される。礎盤(根石)エは、櫓(長屋)台中軸線に対し、斜交した状態で検出されているが、柱の痕跡が礎盤(根石)の形状と平行していることから、元は中軸線に平行しており、柱を抜き取った際、何らかの事情でずれたものと想定される。なお、柱の位置については、ウ・エ間あるいはエ・オ間のコーナーをなす箇所等にも想定されるが、周囲が栗石であるため、礎盤(根石)ごと抜き取られていたとすると確認は困難である。

礎盤(根石)以外に、柱を支えた基礎として鬘石がある。古段階の状況を留めている北側南北部・東西部西側では、鬘石上面の方形孔の密度が高い。方形孔の機能については、菱櫓の項で記した通り、側柱を直接支えたものもあるかも知れないが、土台支持に係る柄穴の可能性も考えておきたい。

古段階建物の時期については、菱櫓と同じく寛文8年(1668)を上限とし、上記の通り礎盤(根石)が宝暦13年の石垣修築で撤去されていることから、寛文8年(1668)に再建、宝暦9年(1759)の大火により焼失し、廃絶されたと判断できる。

(4) 橋爪門続櫓(第66～68図)

橋爪門続櫓は櫓(長屋)台南端に位置した建物である。建物基礎遺構として、外側側柱基礎＝石垣天端(鬘石)の他、表土直下で礎石が6基検出された。

礎石の配列は櫓台外縁と同軸で、東西に長い矩形を呈し、礎石本体は四隅及び北辺・南辺のほぼ中央に設置されている。なお前述の通り、橋爪門続櫓と五十間長屋の櫓台主軸は直交していないが、礎石列についても同様である。

鬘石及び礎石の真真を計測した場合、鬘石～礎石間は1.63m～1.77m、平均1.72m、礎石間は東西間(礎石Ⅰ～Ⅲ、Ⅲ～Ⅴ、Ⅱ～Ⅳ、Ⅳ～Ⅵ)が6.88～7.13m、南北間(礎石Ⅰ～Ⅱ、Ⅴ～Ⅵ)が6.58m～6.77m、平均6.65mを測る。礎石の配置や大きさからすれば、東西軸の東部(礎石Ⅰ～Ⅲ・Ⅱ～Ⅳ)及び西部(礎石Ⅲ～Ⅴ・Ⅳ～Ⅵ)はおおよそ等距離と見なされる。

なお東西間・南北間ごとに距離が一定で、径5寸の柱が礎石端にあったとした場合、東西柱間は最小で6.67m、最大で7.37m、南北柱間は最小で6.46m、最大で6.83mと算出される。

礎石（Ⅰ～Ⅵ）は、鬘石・石垣築石・別遺構の礎石等の転用材であるが、菱櫓や五十間長屋に比べると一辺80cm～100cmの大型で整った方形の平面形を呈するものが多い（第67・68図）。いずれの礎石も長径2m前後、深さ30～50cmほどの掘方を有する。礎石は掘方底面の置土上に設置されており、砂層を含む土砂で丁寧に埋め戻されている。礎石上面には柱痕跡は認められず、土台を介して柱を受けていた可能性がある。礎石上面のレベルは、周辺一帯の地盤が下がっている礎石Ⅳや折損して傾いた礎石Ⅱを除くと標高50.59～50.67mで、ほぼ一定であり、櫓台外縁の鬘石よりやや低い。

外側側柱の基礎となる鬘石のうち、東辺・南辺に位置するものは、菱櫓や五十間長屋のそれに比べ高さ（厚み）があり、上面には極小タイプを除き方形孔が見られない。文化期修築に伴う新材と判断される。北辺・西辺には、若干方形孔を伴う鬘石があり、転用材が混じっている。ともに絵図に描写された側柱の痕跡は認められず、側柱との間には土台が介在していたと判断される。なお、一辺3～4cmの極小方形孔は、鬘石の中軸ライン上ではなく、ほとんどが外側寄りに位置する。土台支持の柄穴の可能性もあるが、機能は不明である。

「橋爪御門渡御櫓之図」（第10図）では、櫓台の縁を巡る柱列（外側の柱列）と、検出された礎石列と類似した柱列（内側の柱列）を描くが、内側の柱列について、東半のみ柱を線で囲み、角及び一辺の中央に大型の柱、さらに角と辺中央の間に2本の小型の柱を等間隔に描いている。寸法については北辺・南辺について2丈1尺（636.3cm）、東辺について2丈2尺（666.6cm）と記し、それぞれを3等分した数値（柱2区間分、7尺（212.1cm）・7尺3寸3分3厘（222.19cm））を添える。この線で囲まれた範囲は、菱櫓と同様、三階を示していると考えられ、囲い線上の柱は三階の側柱に該当する。

内側の柱列と外側の側柱列との間隔については、直接寸法は記載されていないが、柱位置の描写からすると、外側の柱間寸法より北・東・南は5尺5寸（166.65cm）、西は6尺7寸（203.01cm）と見なしうる。またこのことより、やはり直接寸法が記載されていない内側の柱列西半の東西長（北辺・南辺）についても、2丈4尺5歩余との寸法（728.84cm）が得られる。

第66図では、上記絵図の寸法記載に基づき、柱筋位置を表示した。その結果、南北軸等合致する部分もあるものの、遺構の配置との間に相違が見られる。まず①遺構（礎石）では、東西軸の2区間の距離はほぼ等しく見なされるが、絵図記載寸法では東部が短く、西部が長い。東部を構成する礎石Ⅰ～Ⅲ及びⅡ～Ⅳ間（真真6.88m）は絵図記載寸法（2丈1尺＝6.363m）よりかなり長く、礎石と絵図上での柱が一致しない。②また絵図では東部北辺中央や東辺中央に支柱が描写されるが、遺構としては確認できない。③外側柱列西辺と礎石との距離について、遺構（鬘石・礎石）では真々で1.74mであるが、絵図では203.01cm（6尺7寸）であり、やはり一致しない。

このうち①・②に対しては、絵図における内側の柱列東半（囲い線）のうち、北東角・南東角柱を除く柱は、一階からの通し柱ではなく、すべて三階の柱とみなし、北西角・南西角については一階の柱位置（＝礎石Ⅲ・Ⅳ上）とずれがあり、一階の柱は描写されていないと考えると、遺構の配置と一応整合する。この場合、礎石の配置は三階の範囲と一致しないこととなる。橋爪門続櫓の柱位置を描く平面絵図は、知られている限り「橋爪御門渡御櫓之図」と同様の記載（第8図右等）である以上、上記のような解釈も可能と考える。③については有効な解釈を得ていないが、橋爪門続櫓と五十間長屋との主軸のずれが関連するのかも知れない。

なお第66図では、遺構配置による礎石列として、礎石Ⅲ～Ⅳ・Ⅴ～Ⅵ間についてもラインを表示した。礎石Ⅲ～Ⅳ間では、橋爪門続櫓台中軸にほぼ一致し、礎石中心点近くを通り、東西軸東部（礎石Ⅰ～Ⅲ、Ⅱ～Ⅳ）と西部（礎石Ⅲ～Ⅴ、Ⅳ～Ⅵ）が等距離になる箇所を求めた。その結果、東西軸2区間がそれぞれ2丈3尺（696.9cm）となる位置にラインを設定することができた。

以上の建物の時期は、最後の再建である文化6年（1809）以後に求められる。礎石など基礎構造についても、文化5年（1808）に櫓台が大きく修築されていることから、これに先行するものではない。

3. 階段

(1) 櫓（長屋）台取付階段

絵図の記載によると、櫓（長屋）台には、建物への出入り口となる合計3箇所（①菱櫓南辺・②五十間長屋東西部南辺・③五十間長屋南側南北部西辺）の階段が取り付いていたが、調査着手時にはすべて撤去された状態であった。発掘の結果、①・③の位置では基礎ごと撤去されており、②の位置にのみ基礎石垣の最下段が遺存していることが確認された。ただし、3箇所とも石垣に階段取付の痕跡（加工痕、変色）が認められる。

①の階段痕跡は菱櫓南辺に接し、幅は2.12mを測る。②の階段痕跡は、その西端が、石垣の西側出角から4.52m東に位置する。幅は3.15mを測る。③の階段痕跡は、その北端が、石垣の北側入角から28.39m南に位置する。幅は3.02～3.05mを測る。なお、階段により隠れる石垣面について、とくに①・③では周囲に比べ調整・加工が粗いなどの違いが顕著である。

①・②は寛文8年（1668）、③は宝暦13年（1763）の櫓（長屋）台修築後に構築されたものであるが、以後の変遷をたどり得る資料に乏しい。なお②・③については、「橋爪御門渡御櫓之図」（第9図）に見える位置と若干の相違がある。

(2) 二ノ丸階段（第72図）

橋爪門続櫓台の西側には、橋爪門と二ノ丸を結ぶ大規模な階段があったが、近代以後撤去され、戦後も金沢大学の設備等が置かれた。調査の結果、西辺を限る石垣台基礎付近の他、石段を抜き取られながらも、遺構面が全体の1/6程度残存していることが確認された。また東側の橋爪門続櫓台石垣には、階段縁石の取り付けを示す、平滑な加工痕が認められた。

階段の規模は、幅（東西）11.8m、奥行14.8m、高低差2.2m以上と推定される。なお縁石最上部の標高は47.88mを測るので、近世後期二ノ丸面はこのレベル以上ということになる。

残存遺構面は、階段全体から見ると西半中央付近に当たり、幅4.55m、高低差0.95m、奥行6.36mの範囲である。石段は遺存していなかったが、幅51～75cmを測る溝状の抜き取り痕が6基平行して検出された。抜き取り痕の背後は概ね削平ないし流出により傾斜しているが、一部の遺存状況の良い所では、小砂利が敷かれた水平面が認められる。このように階段一段分（踏面）は本来、足掛かりの石段（雁木石）と背後の水平面から構成される。抜き取り痕とその背後を合わせた長さは86～115cm、上下の高低差は11～22cmを測り、それぞれ推定一段分の奥行・高さ（蹴上）に近似した数値であろう。なお、東側の櫓台石垣に残る縁石痕跡の勾配は約10°であり、遺構面の勾配と概ね一致している。以上の状況から総合すると、残存遺構面は、階段7段分に相当する。ただし、最下段は石段（雁木石）部分、最上段は石段背後の部分が欠如している。

階段西側の石垣は、遺構面より上部は撤去されているが、遺存部分は切石積で、上面に切欠をもつ等、東側の橋爪門続櫓台石垣の下部と類似の特徴が認められる。また、この石垣の南辺根石は、平成11年度に実施された鶴ノ丸第1次調査区で検出されている。根石は大型刻印が施された粗加工石であり、石垣台が橋爪門続櫓台石垣等と同時期に構築されたことを示している。

第3節 三ノ丸第3次調査区

1. 概要

三ノ丸第3次調査区は、二ノ丸内堀西部西端（97-4区）の北側に位置する（第16図）。一帯は三ノ丸の一部であるが、二ノ丸内堀（南側）と三ノ丸内堀（北側）に挟まれた東西に伸びる帯郭状を呈し、最も狭い地点では幅約10m程度となる。現標高は44.6mで、二ノ丸面からは約4m低いが、東側の三ノ丸主要部から見て1.5m程度高くなっている。また北側の新丸面（三ノ丸内堀北岸）との高低差は調査区付近で約10mを測る。なお三ノ丸内堀を臨む北側縁辺・法面は、金沢大学施設の建設によ

り改変され、旧状を留めていない。

本調査は、第1章に記述した通り、二ノ丸内堀の整備復元に際し、水量調整のための排水路（余水吐）を三ノ丸内堀側（新丸側）へ通す工事に係るもので、調査区は帯郭状の地形を横断する形で設けたが、既存の配管との関係上、北区・南西区・南東区の3区に分かれている（第73図）。

2. 層位と遺構

調査区の土層は、遺構・遺物・土質等の点から、上層・中層・下層に大別される（第74図）。

上層（第74図、北区1～9層、南西区・南東区1～3層ないし6層）は、近代以降に形成されたと見られる堆積層である。北区4層はビニール等近年の廃棄物を含む、大学施設施工に関連すると思われる掘込内の埋土である。また北区7層は鉄管の掘方埋土であり、この層までは近代の土層であることが確実である。北区8層は、鉄管埋設時の地盤であり、下位の9層とともに近世に遡る可能性も考えられるが、8・9層の除去後にほぼ同規模のピットが展開する遺構面が検出されたことから、近代初期の整地層と推定した。なお南西区・南東区の4～6層は、上層・中層両方の可能性を残す。

中層（北区10～26層、南西区・南東区4ないし7～11層）は、近世前期～末期に形成されたと考えられる堆積層であり、整地土及び遺構埋土で構成される。整地土は上部・下部に2大別できる。上部整地土は、北区では遺構の基盤面となっている17・18層とその下位の19層、南西区・南東区では北区17～19層と類似した土質の7～9層が相当する。下部整地土は、上部が硬く締まり面を形成している暗褐色～褐色土層で、北区では26層、南西区・南東区では10・11層が相当する。

中層上部整地面の遺構は、灰褐色～暗灰褐色土を埋土とするピット等（北区11層～16層）であるが遺物は出土していない。なお、SX01とした土坑状の掘り込みは、近代以降の鉄管埋設溝と重複しており、基盤面が上部と下部のどちらであるのか明確ではないが、埋土最下層からは、18世紀後半に属する陶磁器がまとまって出土した。また北区25層は、下部整地面に係る遺構の可能性はあるが、遺物は出土していない。

下層（北区27～29層、南西区・南東区12層）は、黄褐色系の色調を呈する礫混じり土で、遺構及び出土遺物は見られないが、土質からみて、近世初期に形成されたと考えられる。本調査区の南側に接する二ノ丸内堀西部北岸の一部では、地山層が露呈し東へ下降していることが看取されるが（第1節3）、この地山層の上部には、傾斜を埋めて平坦面を形成する、郭造成に係る盛土が厚く堆積しており、本調査区の下層は、この盛土層の上部に相当すると考えられる。

3. 小結

本調査区では、現地表下約40～60cmで、近世の整地面・遺構が検出された。整地面は2面認められ、遺物がまとまって出土した遺構（SX01）は、どちらの整地面に属するか判断が難しいが、18世紀後半の陶磁器を含むことから、少なくとも上部整地面は近世後期に属するものと判断される。下部整地面の年代については根拠に乏しいが、近世前期の可能性を考えておきたい。なお、遺構の性格等については明確にできなかった。

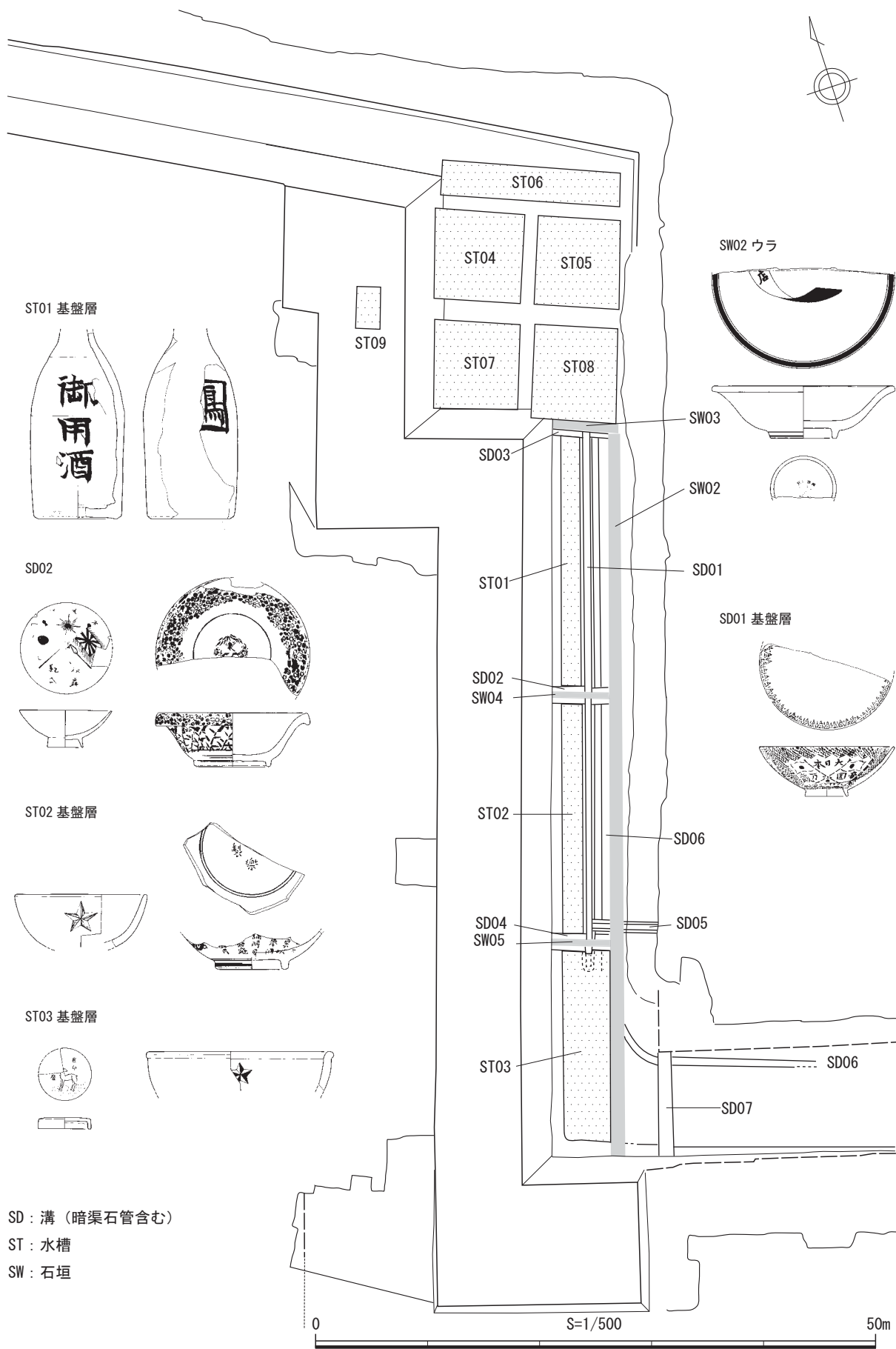
また、現地表下60～100cmで検出された下層については、郭造成に係る盛土層の一端に相当し、近世初期に遡ると考えられる。

第4表 菱櫓・五十間長屋・橋爪門続櫓 主要計測値一覧表

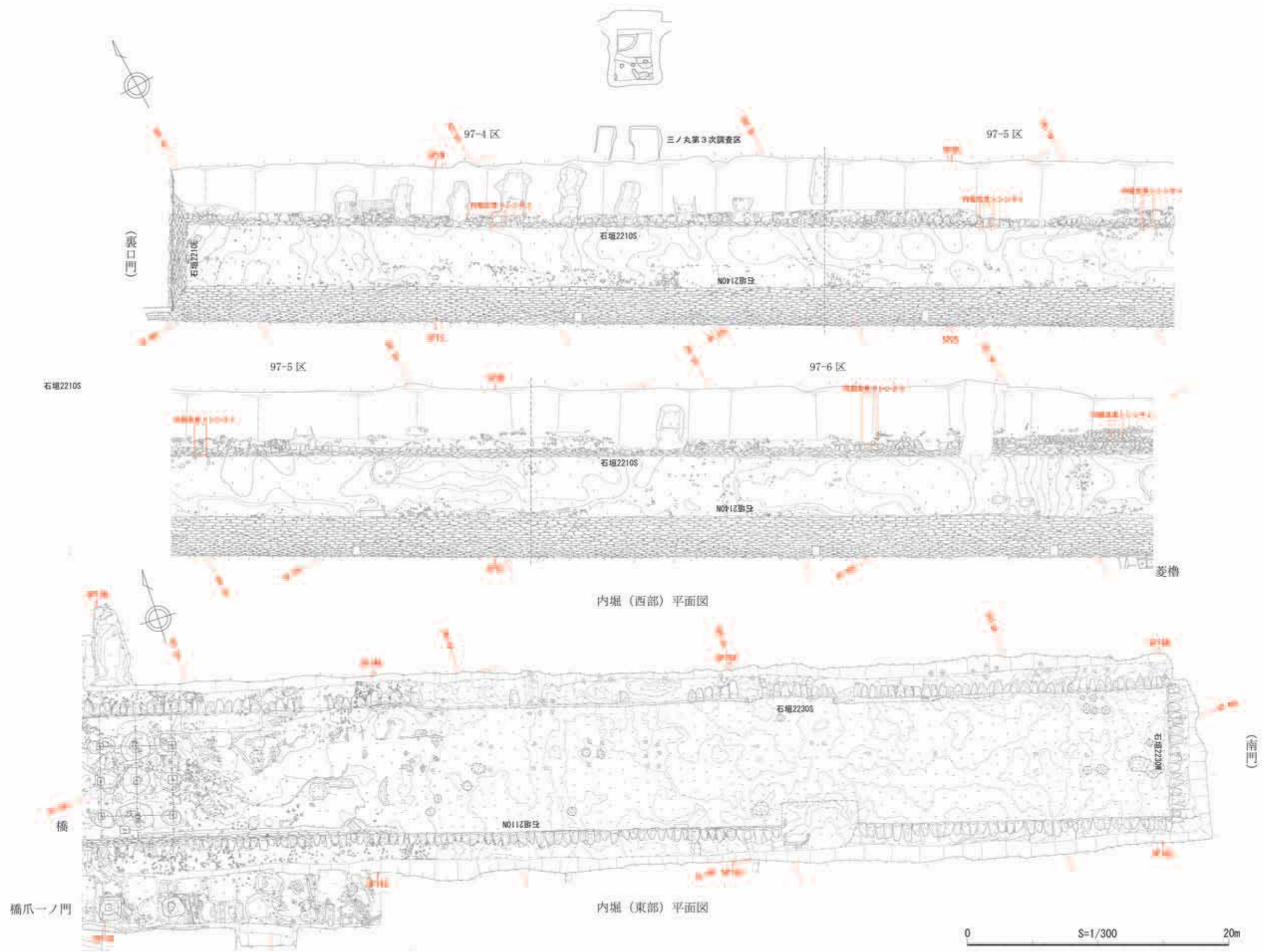
箇所	長さ m	軸方向 N-E °	軸方向 N-W °	特記事項
菱櫓 南北長	10.66	18.2		中軸で計測
菱櫓 東西長	10.68			中軸で計測
五十間長屋北側南北部 南北長	10.74	18.2		中軸で計測
五十間長屋北側南北部 東西長	7.66			中軸で計測
五十間長屋東西部 南北長	7.87			中軸で計測
五十間長屋東西部 東西長	18.34	107.9	72.1	中軸で計測
五十間長屋南側南北部 南北長	58.83	18.1		中軸で計測
五十間長屋南側南北部 東西長	7.51			中軸で計測
橋爪門続櫓 南北長	10.68	16.5		中軸で計測
橋爪門続櫓 東西長	17.95	106.3	73.7	中軸で計測
菱櫓北辺	10.84	118.5	61.5	
菱櫓南辺	3.06	115.9	64.1	長さ復元値
菱櫓西辺	10.90	18.2		
菱櫓・五十間長屋北側南北部東辺	20.62	18.2		
五十間長屋北側南北部・東西部西辺	19.24	18.2		
五十間長屋東西部北辺	10.65	107.9	72.1	
五十間長屋東西部南辺	10.88	107.5	72.5	
五十間長屋東西部・南側南北部東辺	66.60	18.1		
五十間長屋南側南北部・橋爪門続櫓西辺	69.53	18.1		
橋爪門続櫓北辺	10.27	106.3	73.7	
橋爪門続櫓南辺	18.09	106.7	73.3	
橋爪門続櫓東辺	10.77	16.5		
菱櫓 櫓台外縁鬘石-礎石距離	2.05 1.98~2.10			真真平均値 真真数値幅
菱櫓 礎石間距離	3.10 2.98~3.19			真真平均値 真真数値幅
五十間長屋北側南北部~東西部 櫓台外縁鬘石-礎石(No3-4)距離(西)	3.58 3.52~3.64			真真平均値 真真数値幅
五十間長屋北側南北部~東西部南西 礎石間距離(No3-4)	3.57			真真
五十間長屋東西部 東西中軸上 礎石間距離(No4-6)	8.91			真真
五十間長屋東西部 櫓台外縁鬘石-礎石(No6)距離(北)	3.63			真真
五十間長屋東西部 櫓台外縁鬘石-礎石(No6)距離(東)	5.20			真真
五十間長屋南側南北部 櫓台外縁鬘石-礎石距離	3.46 3.28~3.55			真真平均値 真真数値幅
五十間長屋南側南北部 礎石間距離(No7-8)	6.85			真真
五十間長屋南側南北部 礎石間距離(No8-9, No12-13, No13-14)	5.83 5.77~5.92			真真平均値 真真数値幅
橋爪門続櫓 櫓台外縁鬘石-礎石距離	1.72 1.63~1.77			真真平均値 真真数値幅
橋爪門続櫓 礎石間距離(東西東部 I-III, II-IV)	7.13			真真
橋爪門続櫓 礎石間距離(東西西部 III-V, IV-VI)	6.88			真真
橋爪門続櫓 礎石間距離(南北 I-II, III-IV, V-VI)	6.65 6.58~6.77			真真平均値 真真数値幅

第5表 菱槽・五十間長屋・橋爪門続槽 礎石・礎盤（根石）計測表

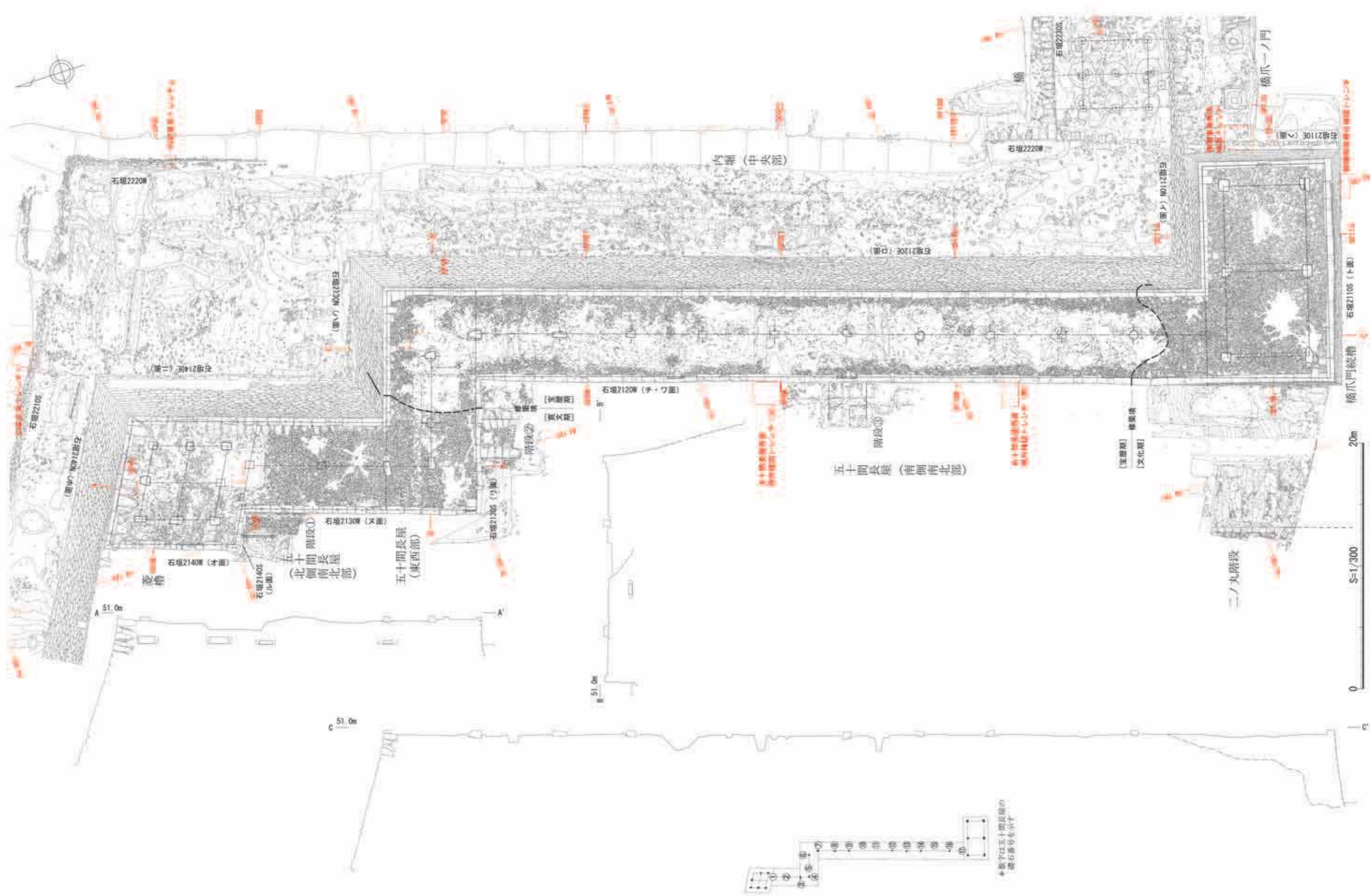
新段階・礎石		単位mm						
箇所	番号	最大長	最大幅	最大厚	石材	特記事項（転用の有無・加工等）		
菱槽	A (上)	530	490	290	赤戸室	転用材 不明 (切石)	下部に角欠き加工あり	
	A (下)	950	420	230	青戸室	転用材 礎石(略完形)	現上面←旧上面	
	B	790	670	280	青戸室	転用材 礎石？(切石)	現上面←旧下面？	
	C (上)	700	480	460	青戸室	転用材 礎石？(切石)	不明	
	C (下)	610+	680	270	赤戸室	転用材 礎石(折損)	現上面←旧上面	
	D	790+	620	330	赤戸室	転用材 礎石(折損部再加工)	現上面←旧下面	
	E	1030+	590	220	青戸室	転用材 礎石(折損)	現上面←旧下面	
五十間長屋	F	895	600	270	青戸室	転用材 礎石(略完形)	現上面←旧下面	
	No.3	1170	440	460	青戸室	転用材 角石？	現上面←旧下面？	
	(No.3東)	630	470	280	赤戸室	自然石？ 一部割面	No.3の東に隣接	
	No.4	940	510	590	青戸室	転用材 礎石(粗加工石)	現上面←旧上面	
	No.6	1070	670	530	赤戸室	転用材 礎石(粗加工石)	現上面←旧上面	
	No.7	950	610	540	赤戸室	転用材 礎石(切石、正面再加工途中)	現上面←旧上面	
	No.8	1170	440	380	青戸室	転用材 礎石(粗加工石)	面再加工を中止し礎石に転用か	
	No.9	740	450	570	青戸室	転用材 礎石(切石)	現上面←旧上面？	
	No.12	780	410	650	赤戸室	転用材 礎石(切石)	現上面←旧側面	
	No.13	700	770	570	青戸室	転用材 礎石(粗加工石)	現上面←旧上面	
	No.14	770	600	440	青戸室	転用材 礎石(切石？)	現上面←旧上面	
	No.16	680	680	540	赤～青戸室	転用材 礎石(粗加工石？)	現上面←旧上面	
	橋爪門続槽	I	940	850	610	赤戸室	専用材？	不明
		II	940	700?	610	青戸室	専用材？	整った矩形を呈する 矢穴
		III	840	760	420	青戸室	転用材 礎石(切石)	Iに比べ不整形だが規模等類似
		IV	1060	760	430	青戸室	転用材 礎石(切石)	旧正面 大型刻印
V		780	770	450	青戸室	転用材 不明(切石)	旧上面 丸柄穴 現上面・旧上面 周囲を切り込み段を付ける加工	
VI		1350	580	460	赤戸室	転用材 礎石(切石)	整った矩形を呈するが調整粗い、上面北西隅に浅い方形の切り込み加工	
古段階・礎盤（根石）		単位mm						
箇所	番号	最大長	最大幅	最大厚	石材	特記事項（転用の有無・加工等）		
菱槽	ア	1420	740	610	青戸室	転用材 角石	現上面←旧下面	
	イ	1598	697	572	赤戸室	転用材 角石	現上面←旧上面	
五十間長屋	ウ	1141+	635	327	青戸室	転用材 礎石(折損)	現上面←旧上面	
	エ	1067+	604	249	赤戸室	転用材 礎石(折損)	現上面←旧下面	
	オ	944+	616	318	青戸室	転用材 礎石(折損)	現上面←旧上面	



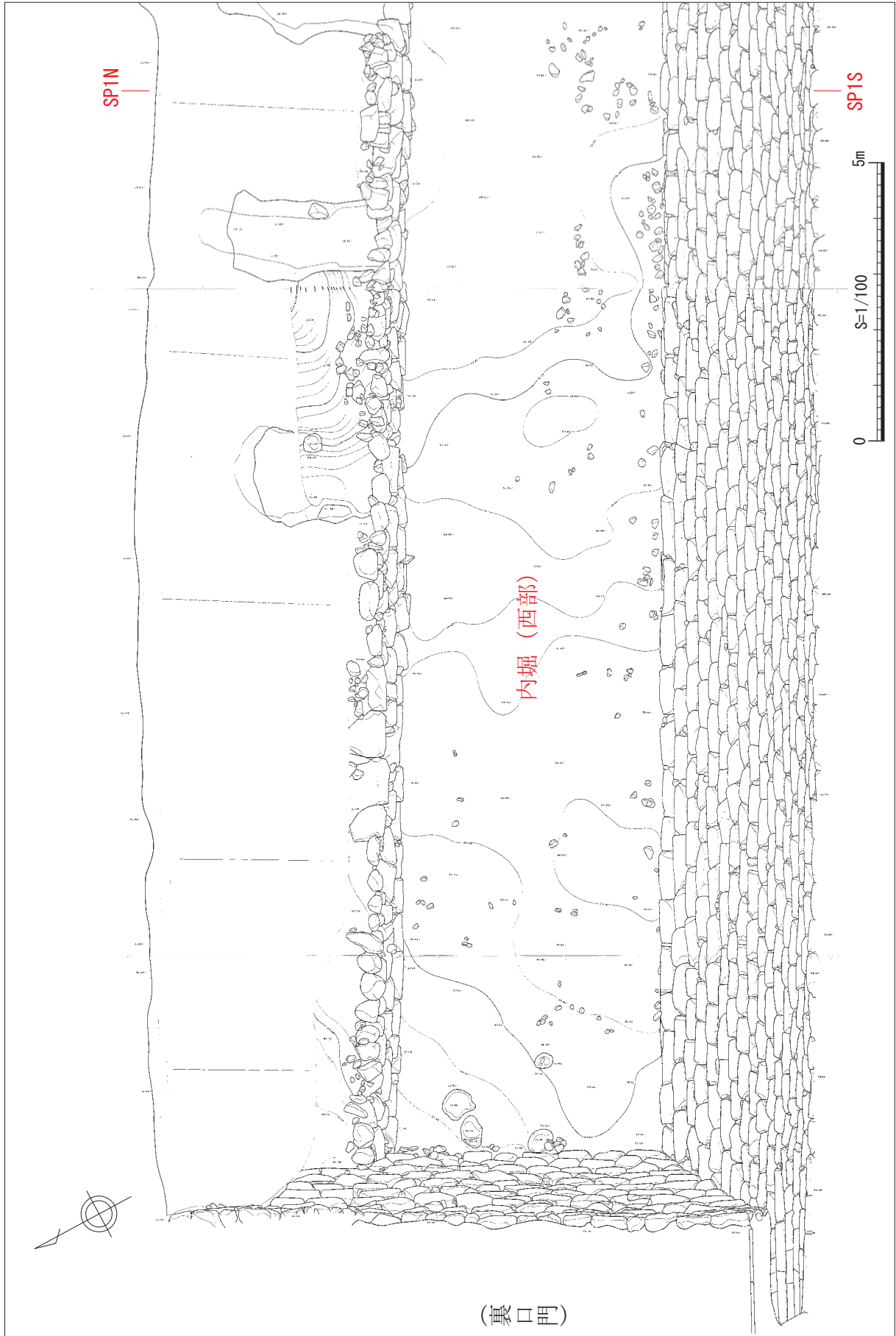
第 16 図 近代遺構平面略図 (S=1/500、遺物は 1/5)



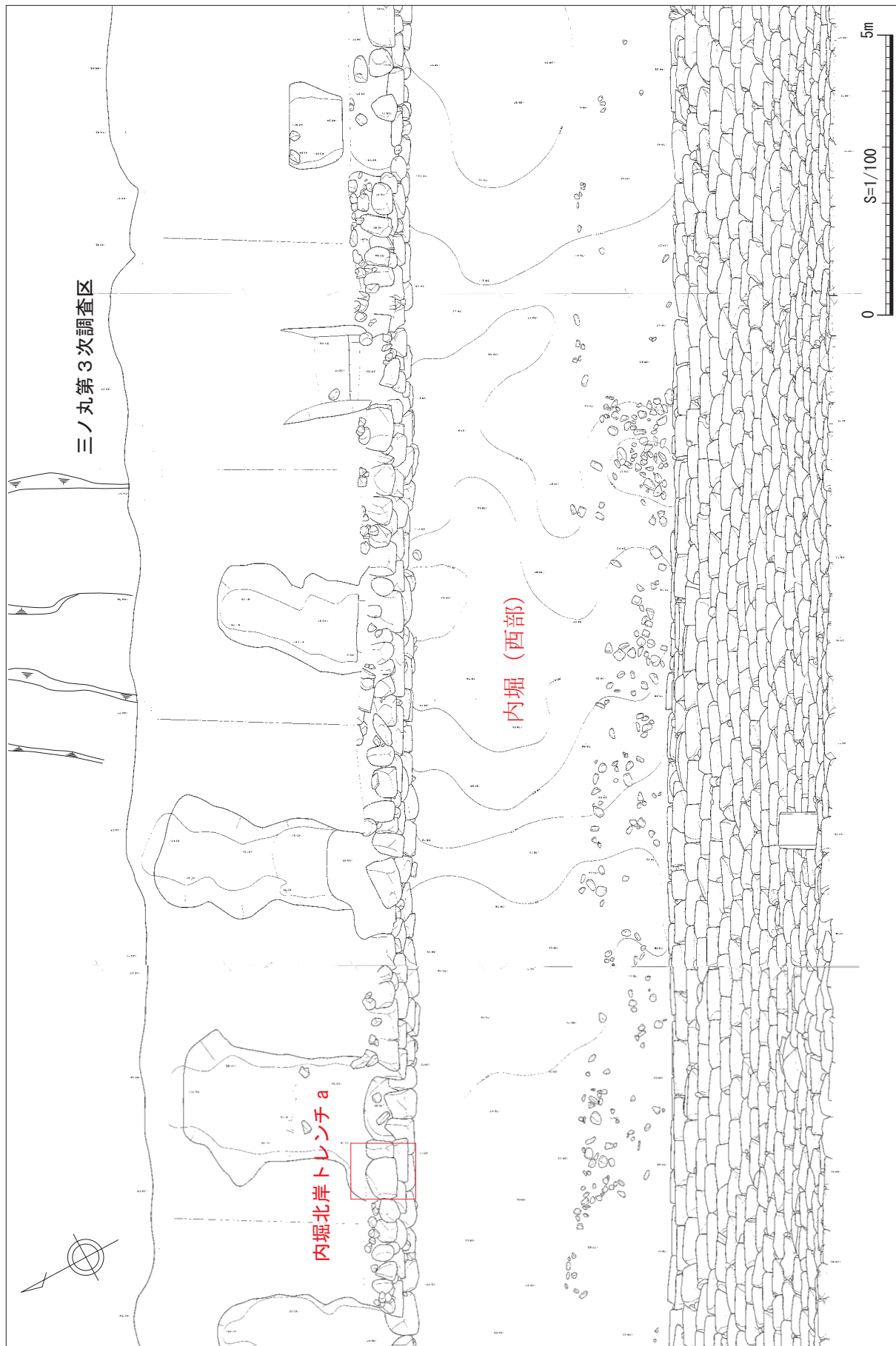
第17図 内堀(西部・東部)平面図 (S=1/300)



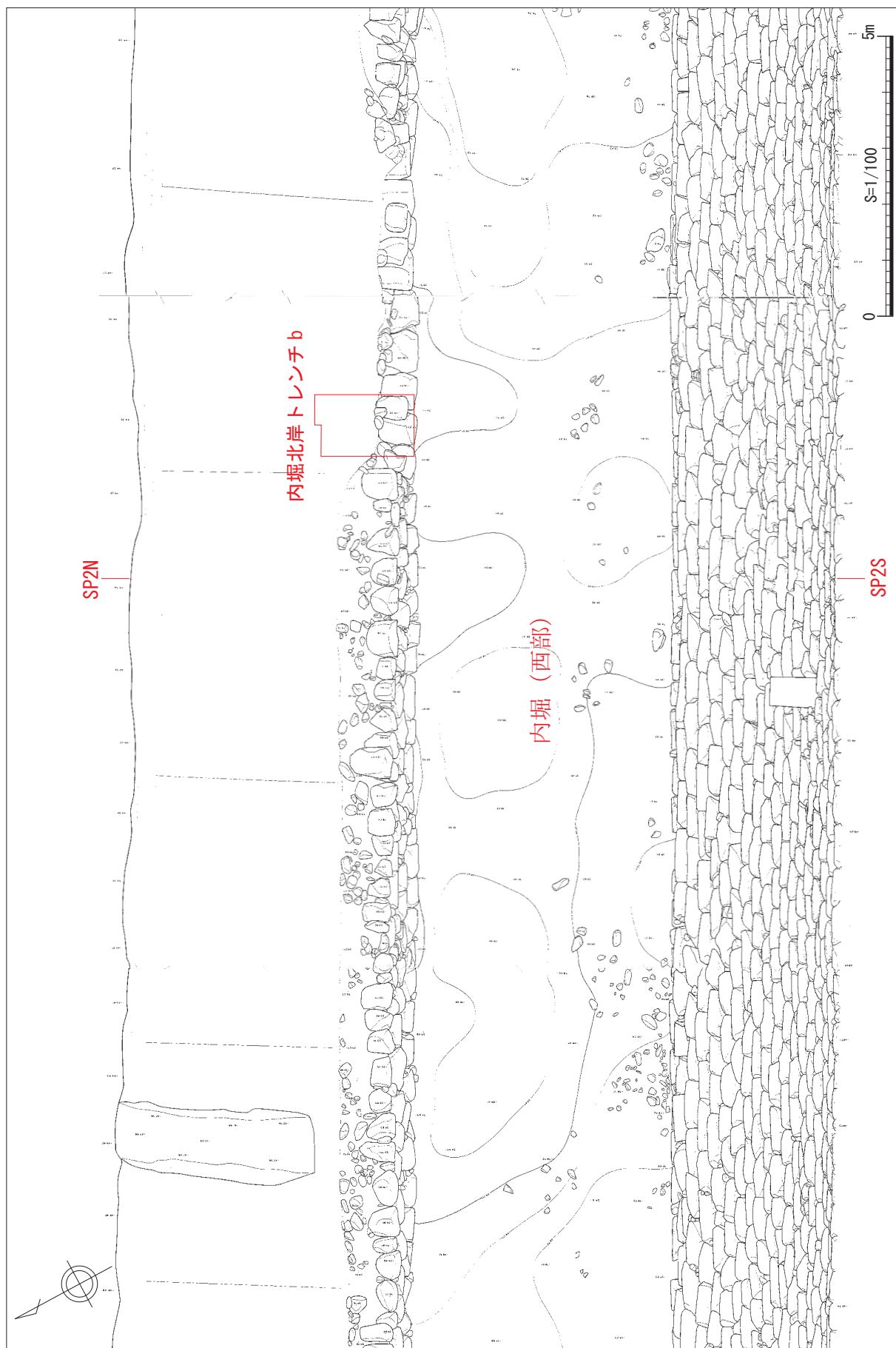
第18図 内堀 (中央部)・菱櫓・五十間長屋・橋爪門結構遺構図 (S=1/300)



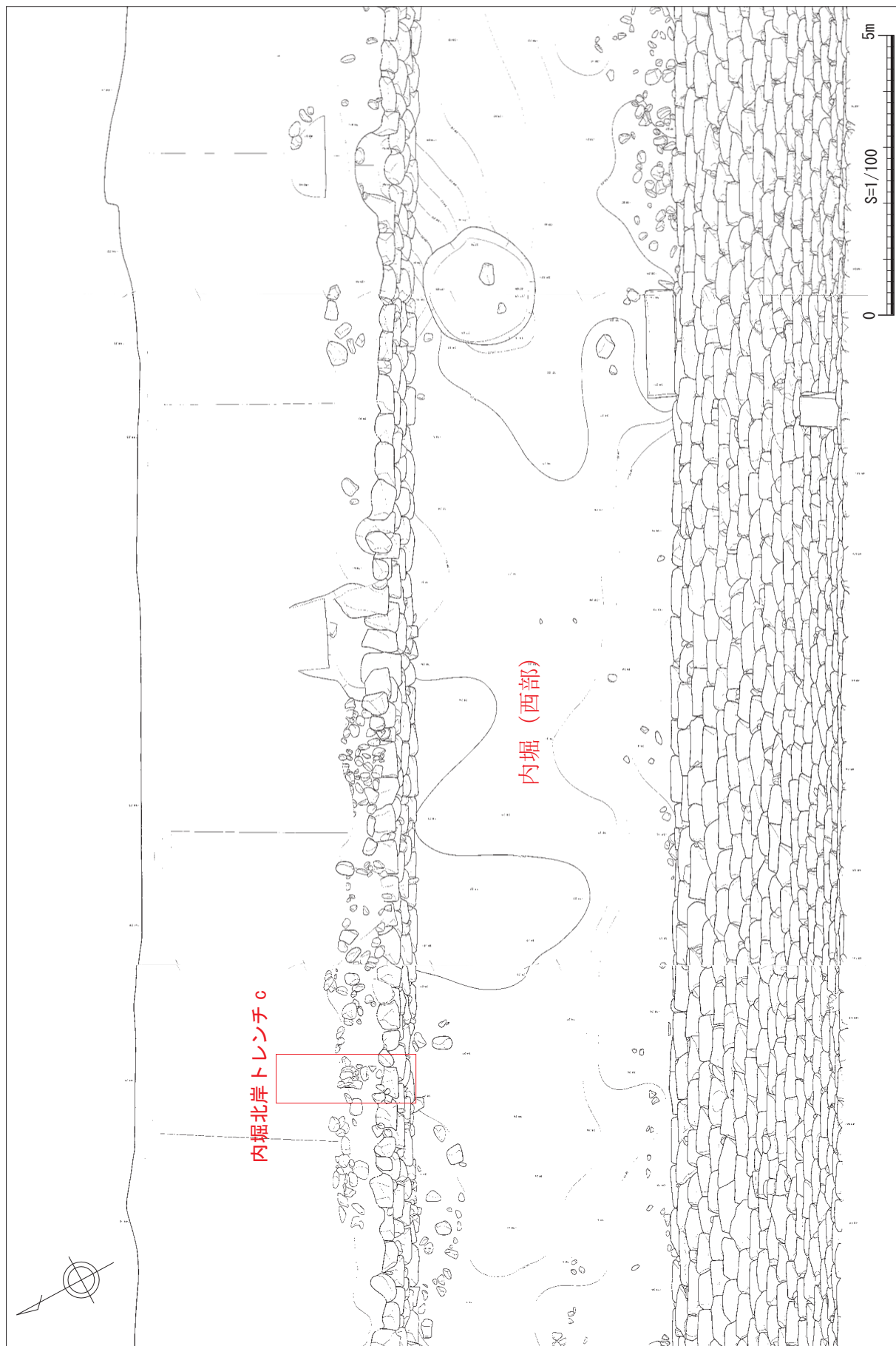
第 19 図 調査区全体分割図 1 (S=1/100)



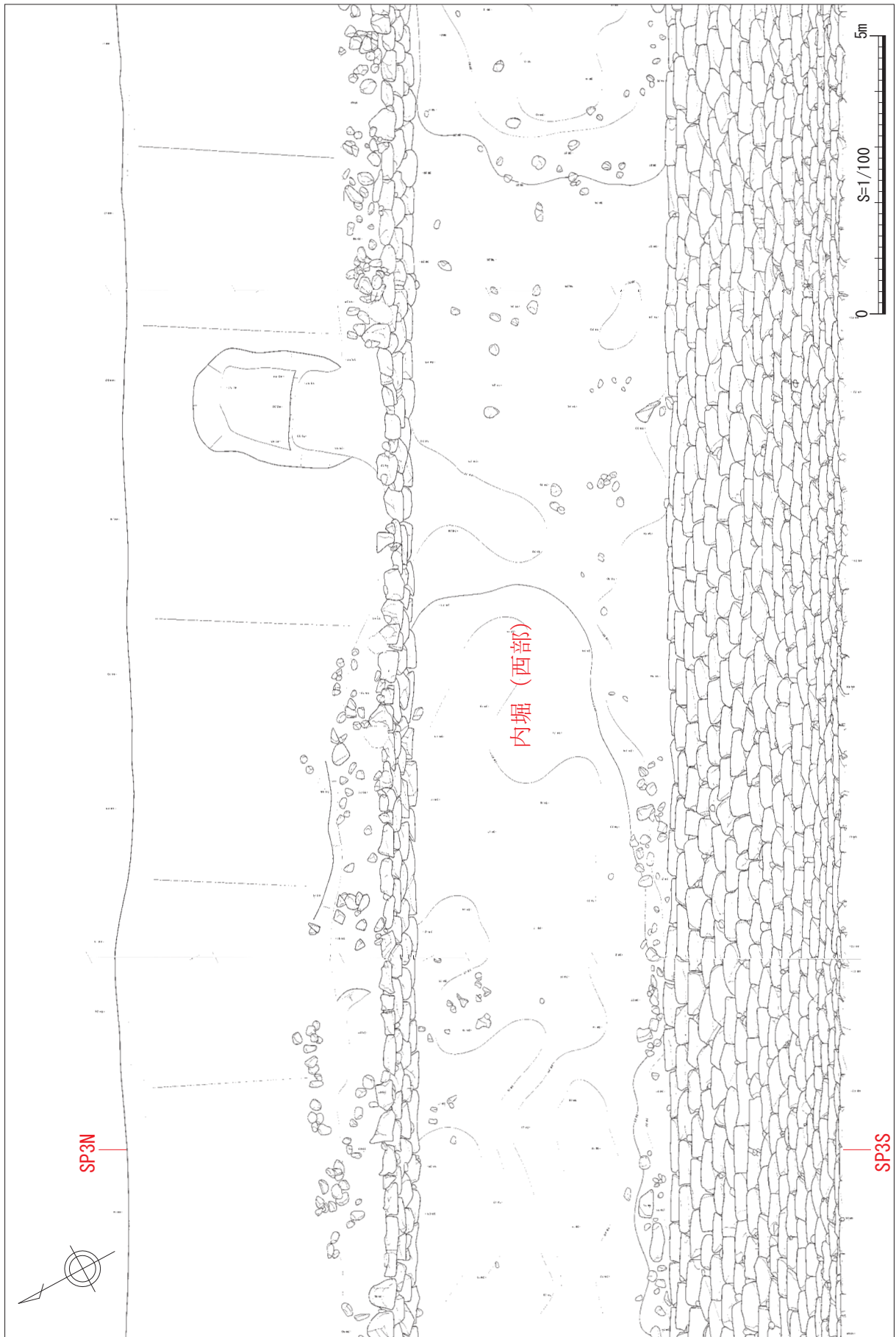
第20図 調査区全体分割図2 (S=1/100)



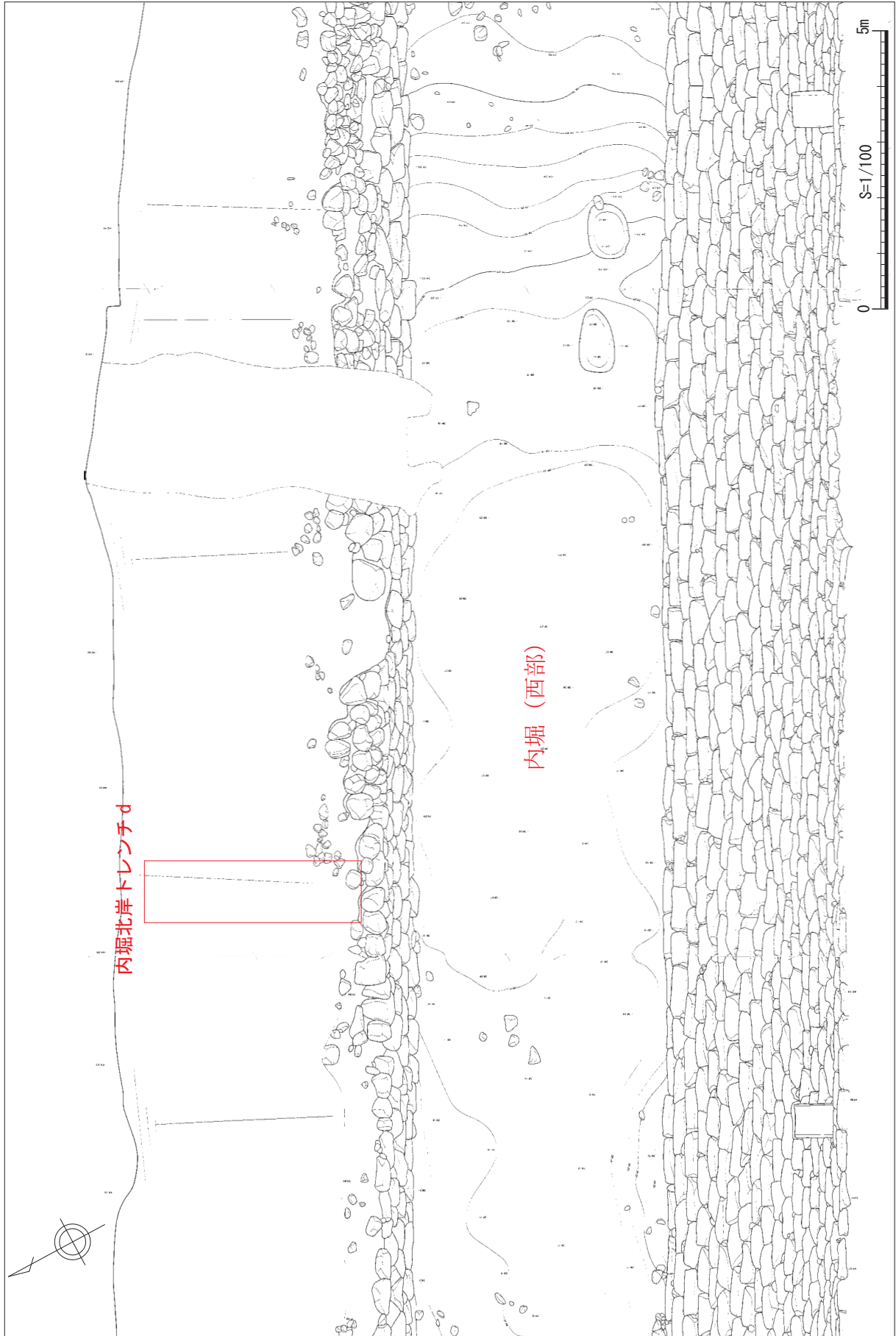
第 21 図 調査区全体分割図 3 (S = 1 / 100)



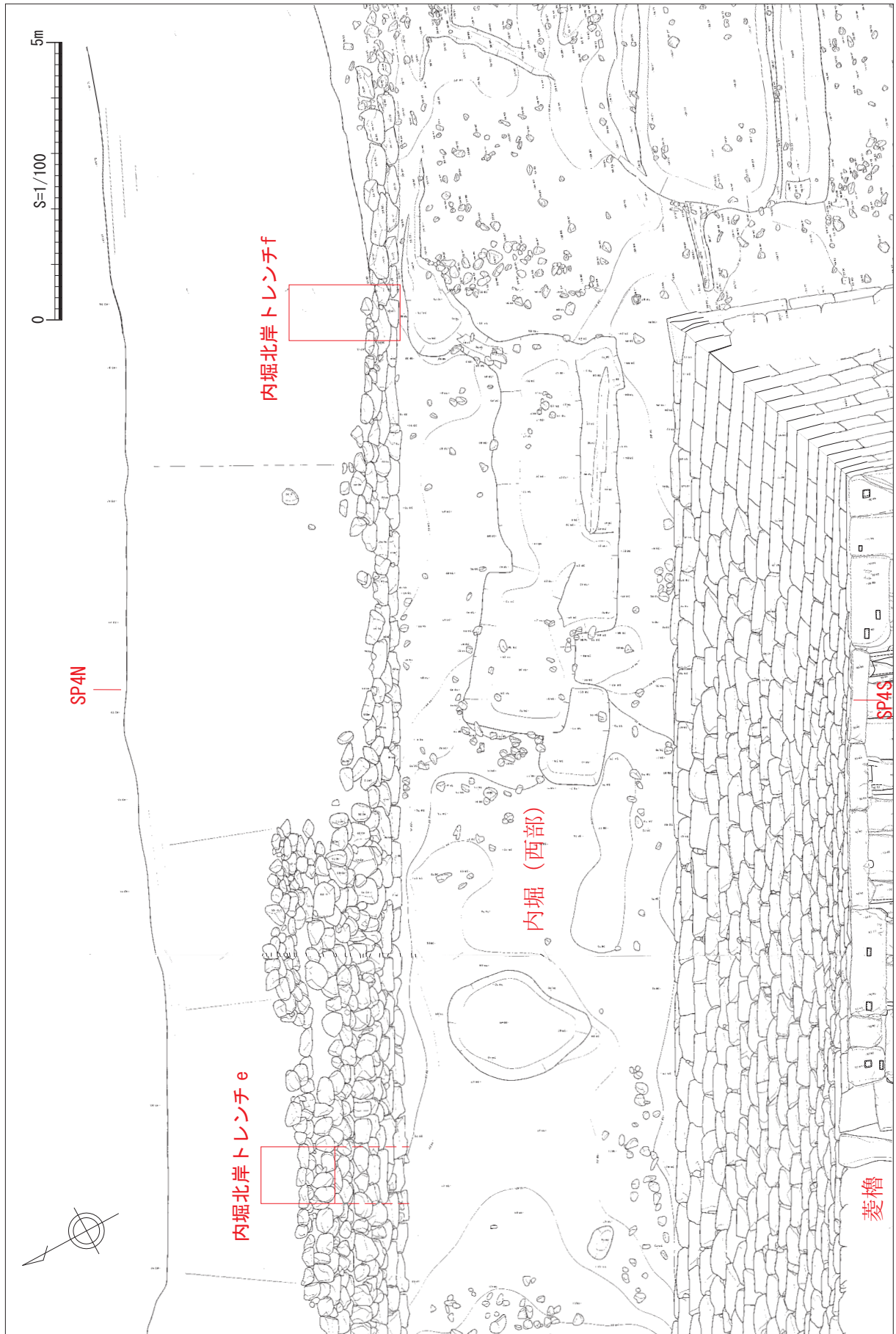
第 22 図 調査区全体分割図 4 (S=1/100)



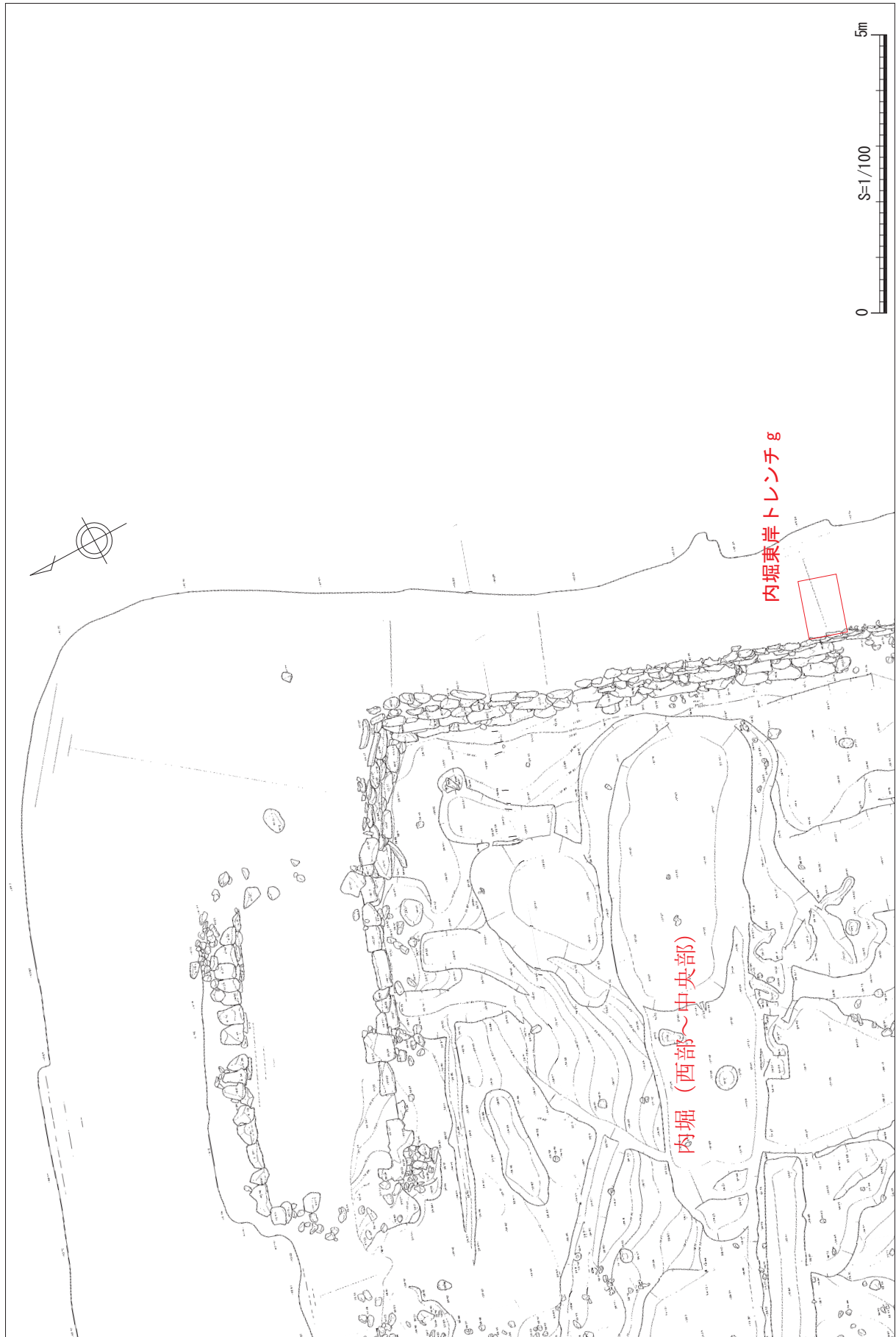
第 23 図 調査区全体分割図 5 (S = 1 / 100)



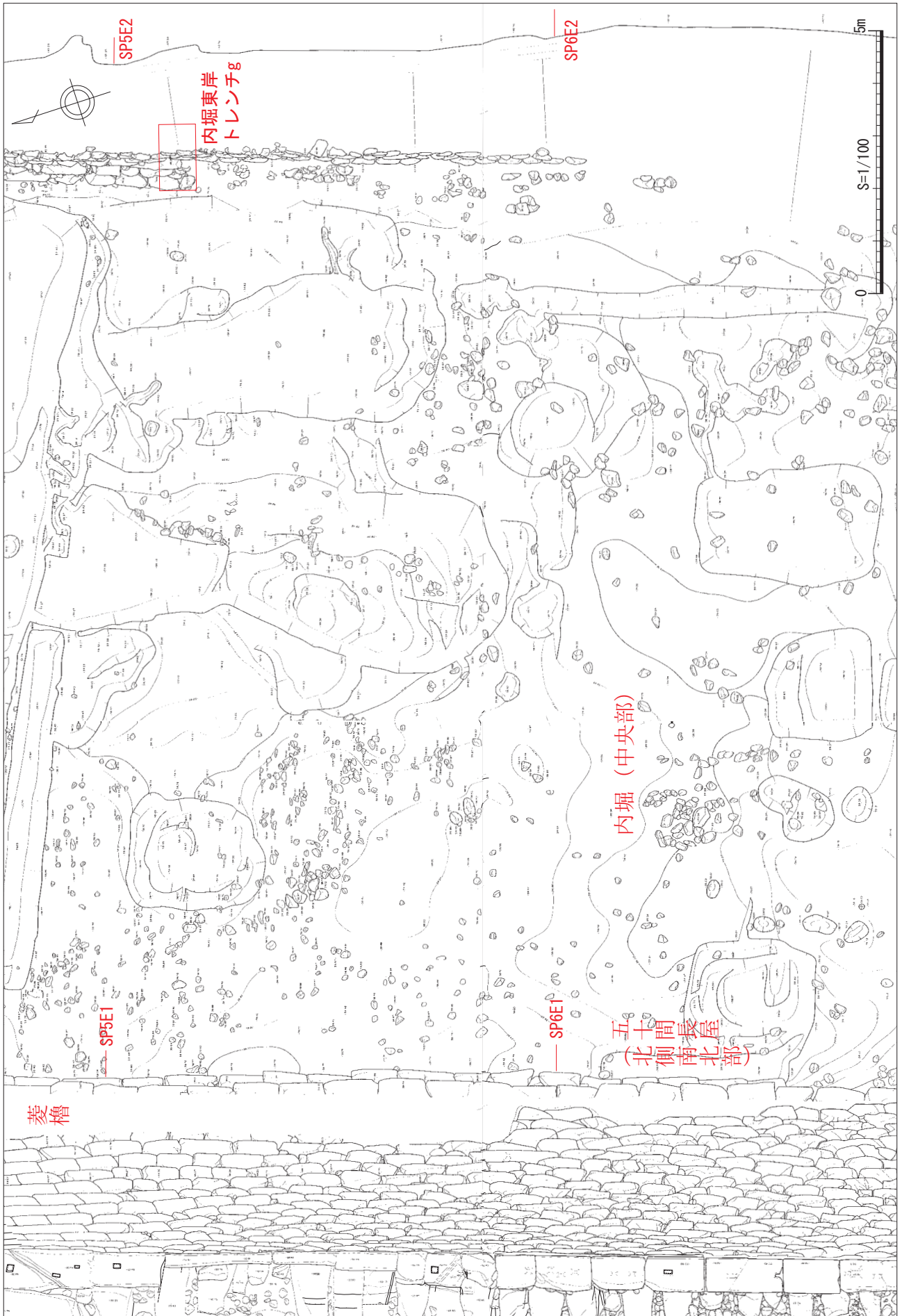
第24図 調査区全体分割図6 (S=1/100)



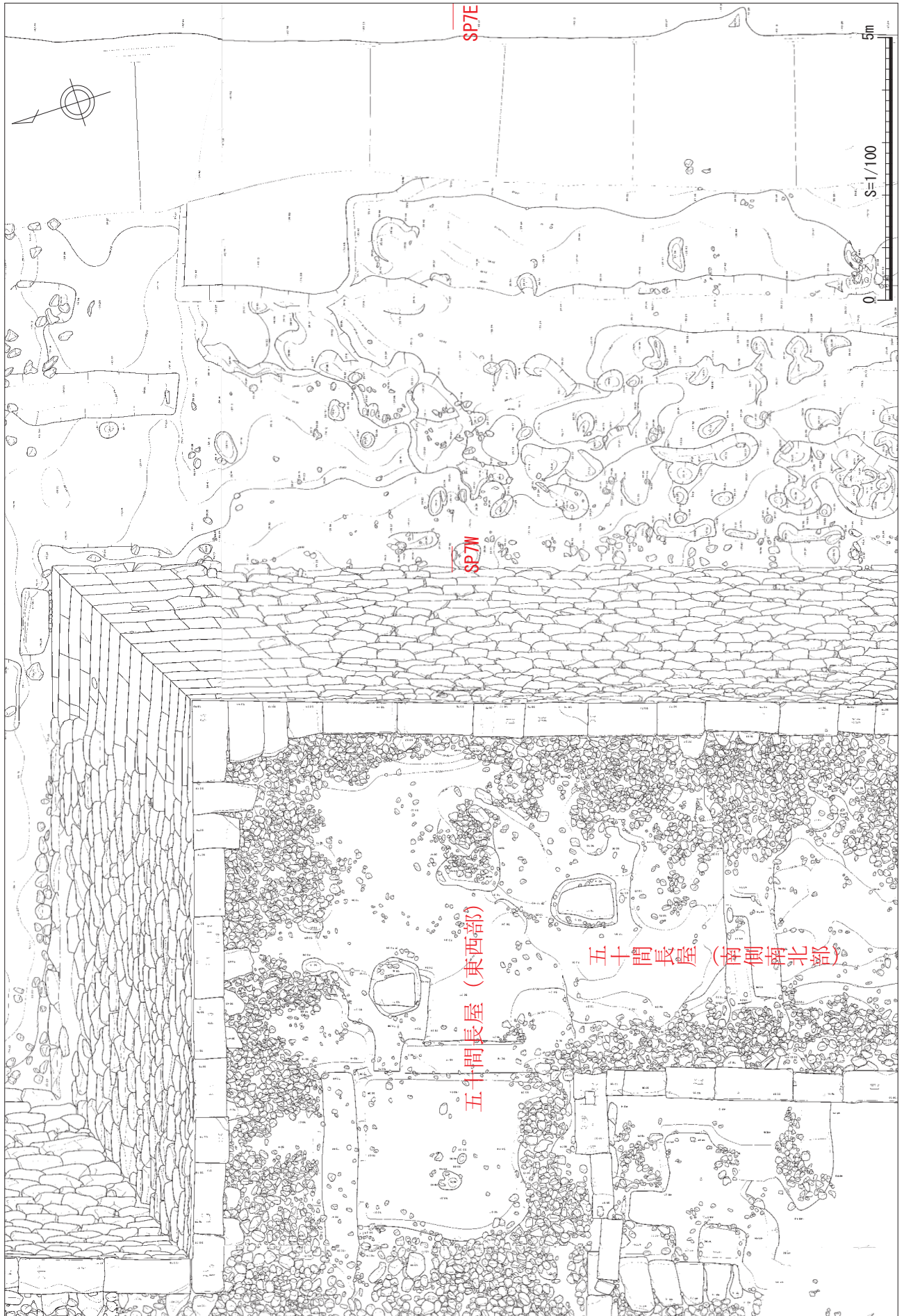
第 25 図 調査区全体分割図 7 (S = 1 / 100)



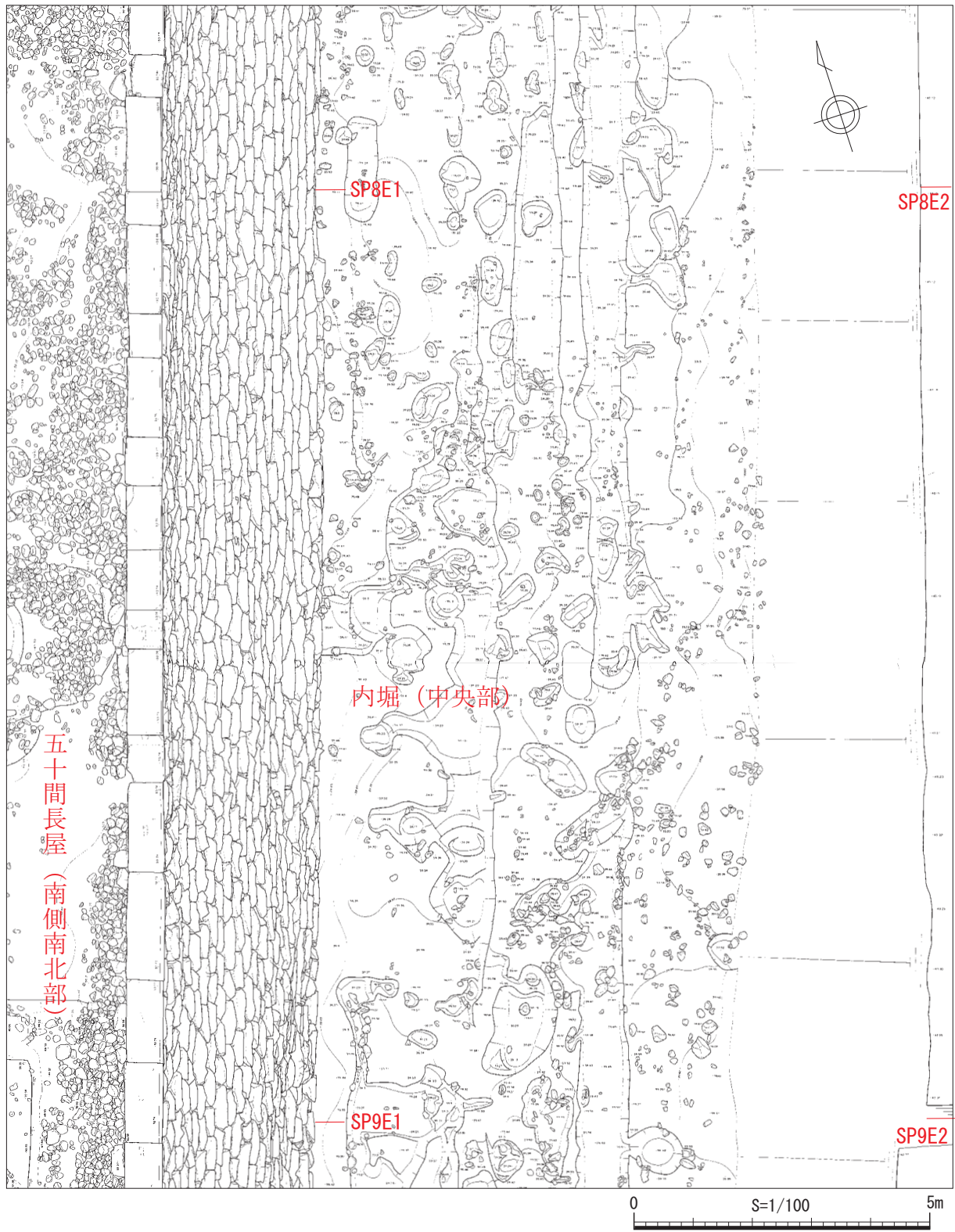
第 26 図 調査区全体分割図 8 (S=1/100)



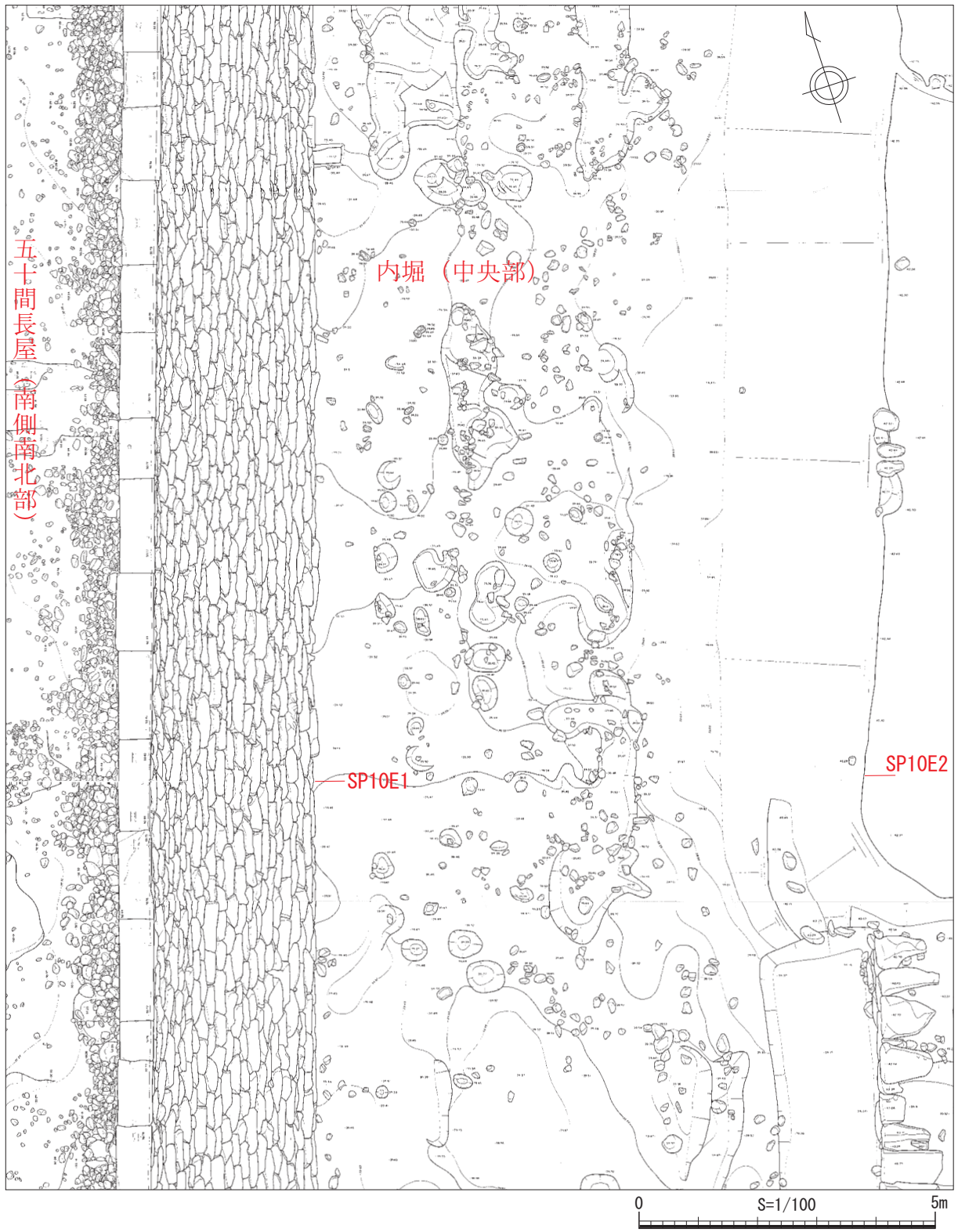
第27図 調査区全体分割図9 (S=1/100)



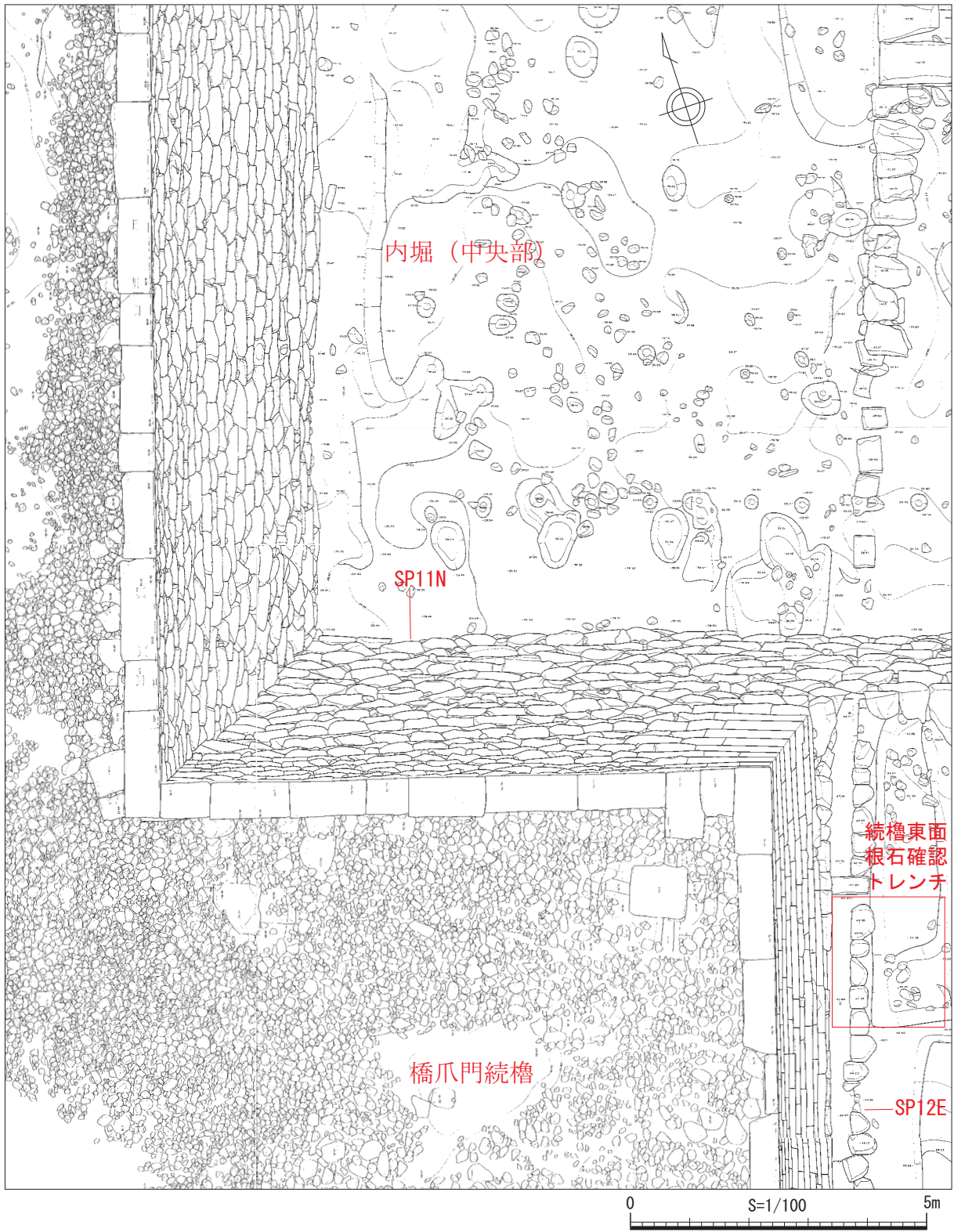
第28図 調査区全体分割図10 (S=1/100)



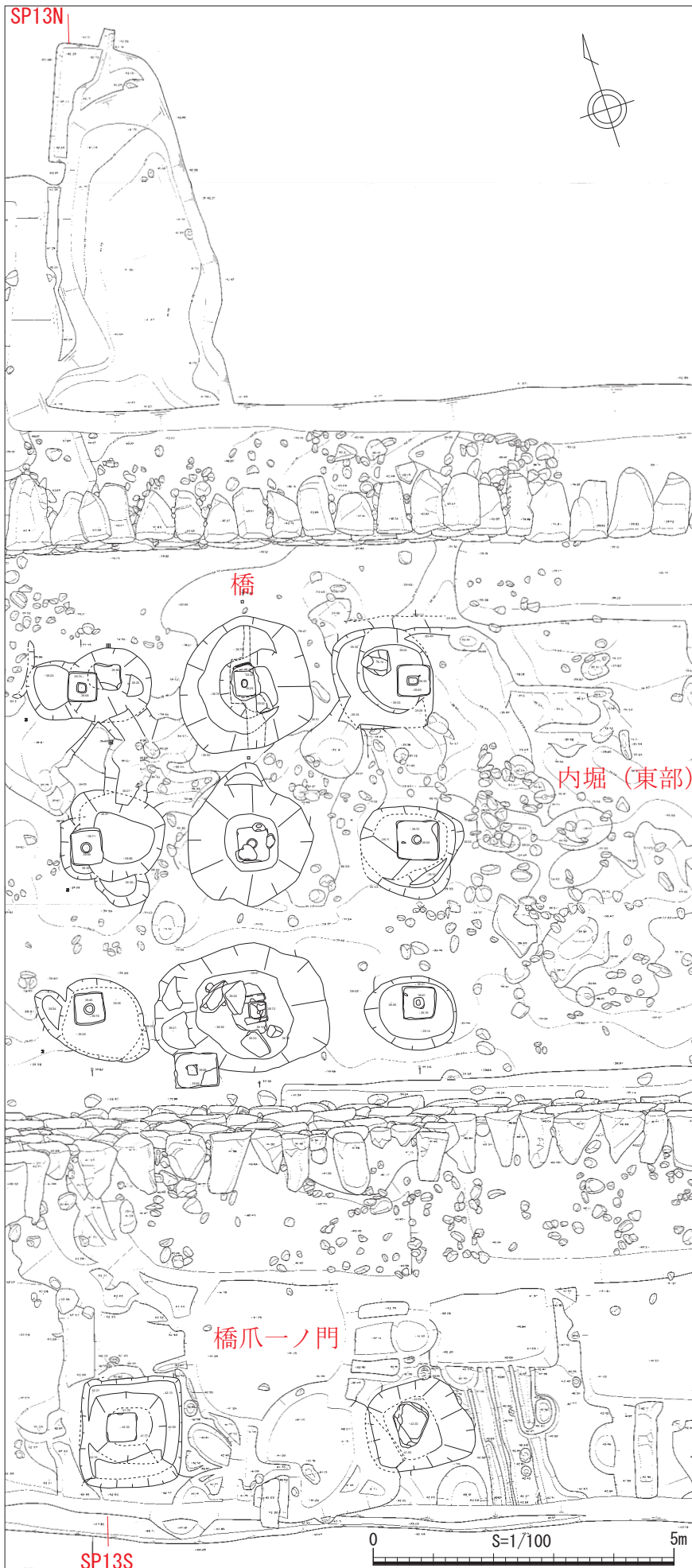
第29図 調査区全体分割図11 (S=1/100)

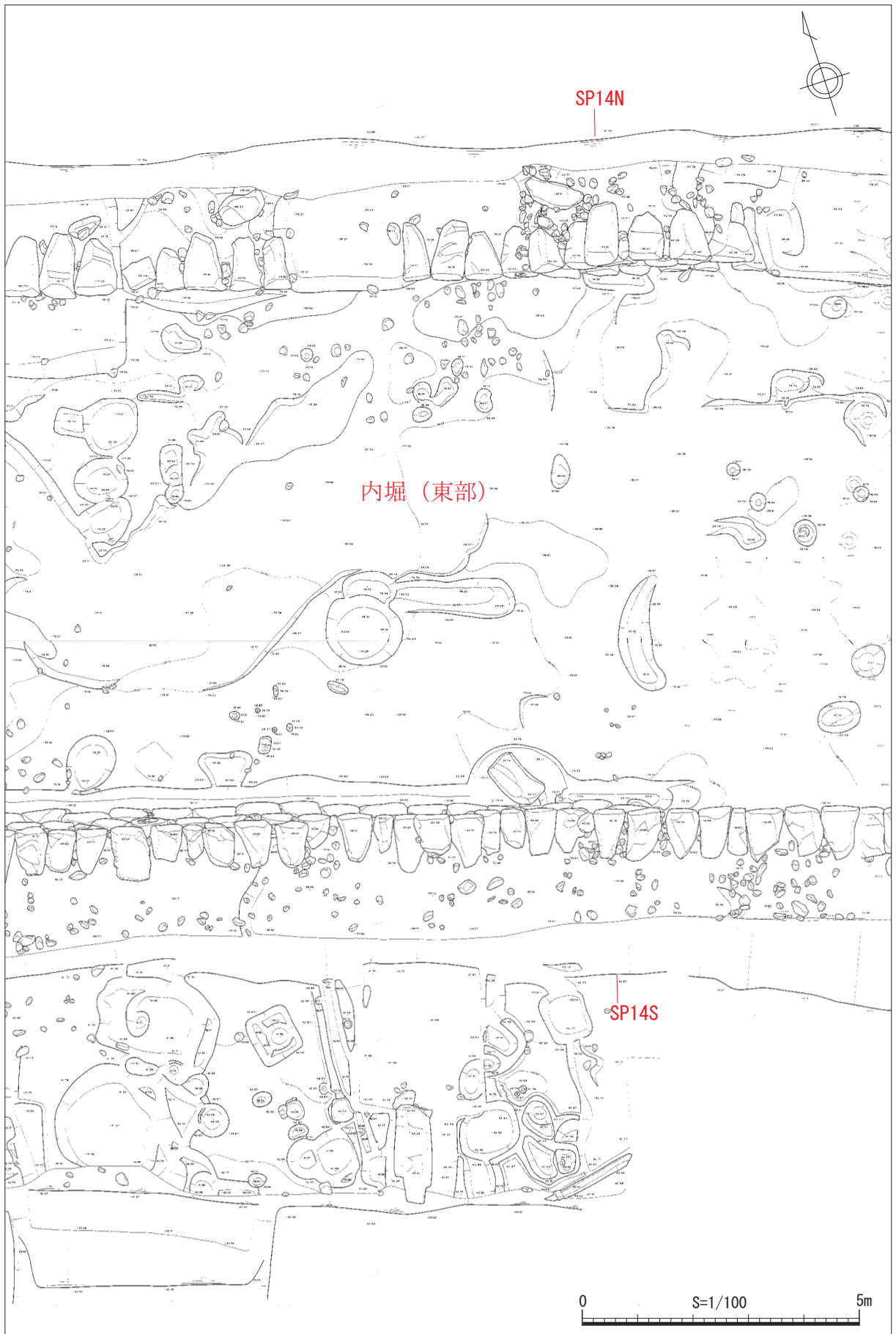


第 30 図 調査区全体分割図 12 (S=1/100)

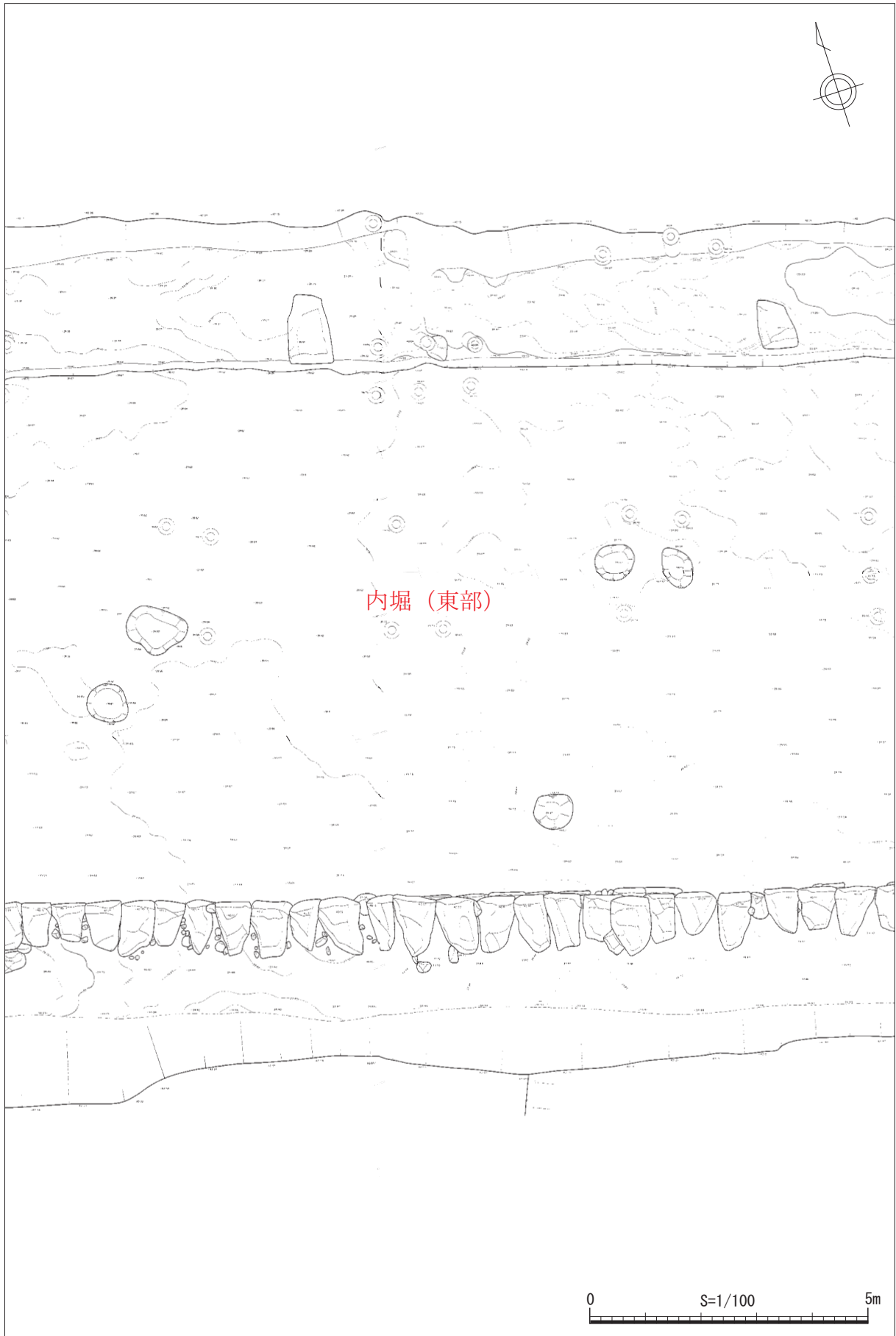


第31図 調査区全体分割図13 (S=1/100)

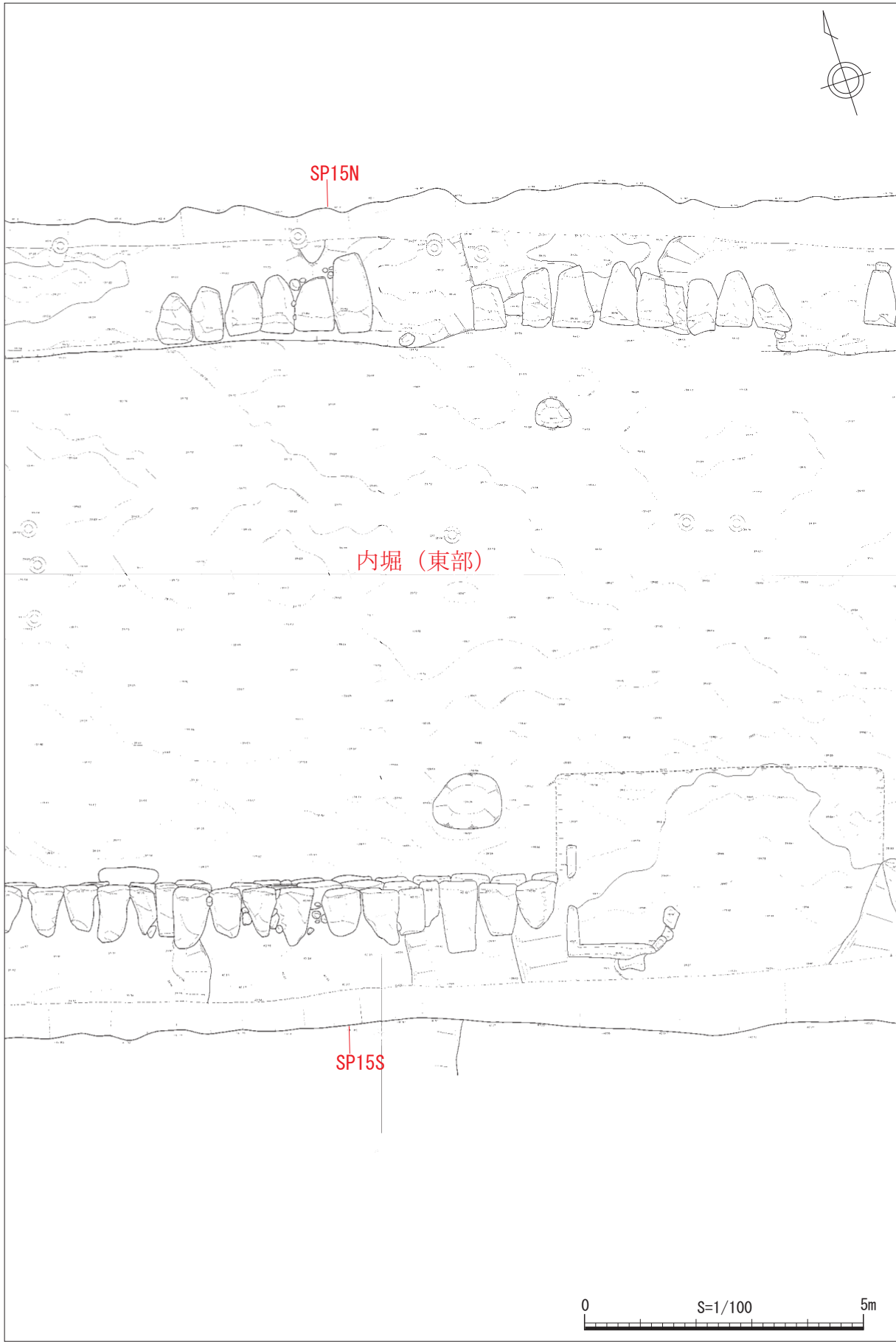




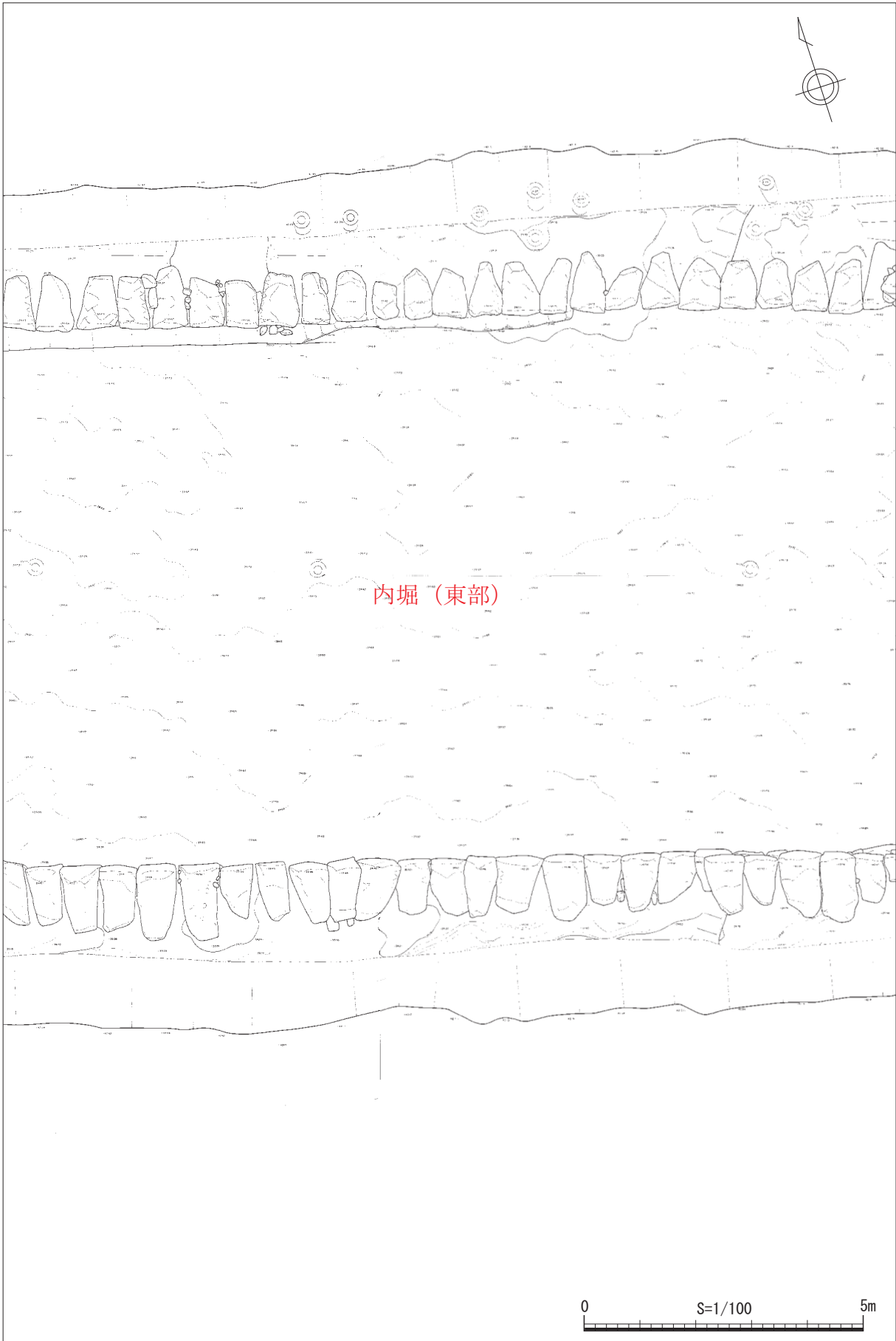
第33図 調査区全体分割図15 (S=1/100)



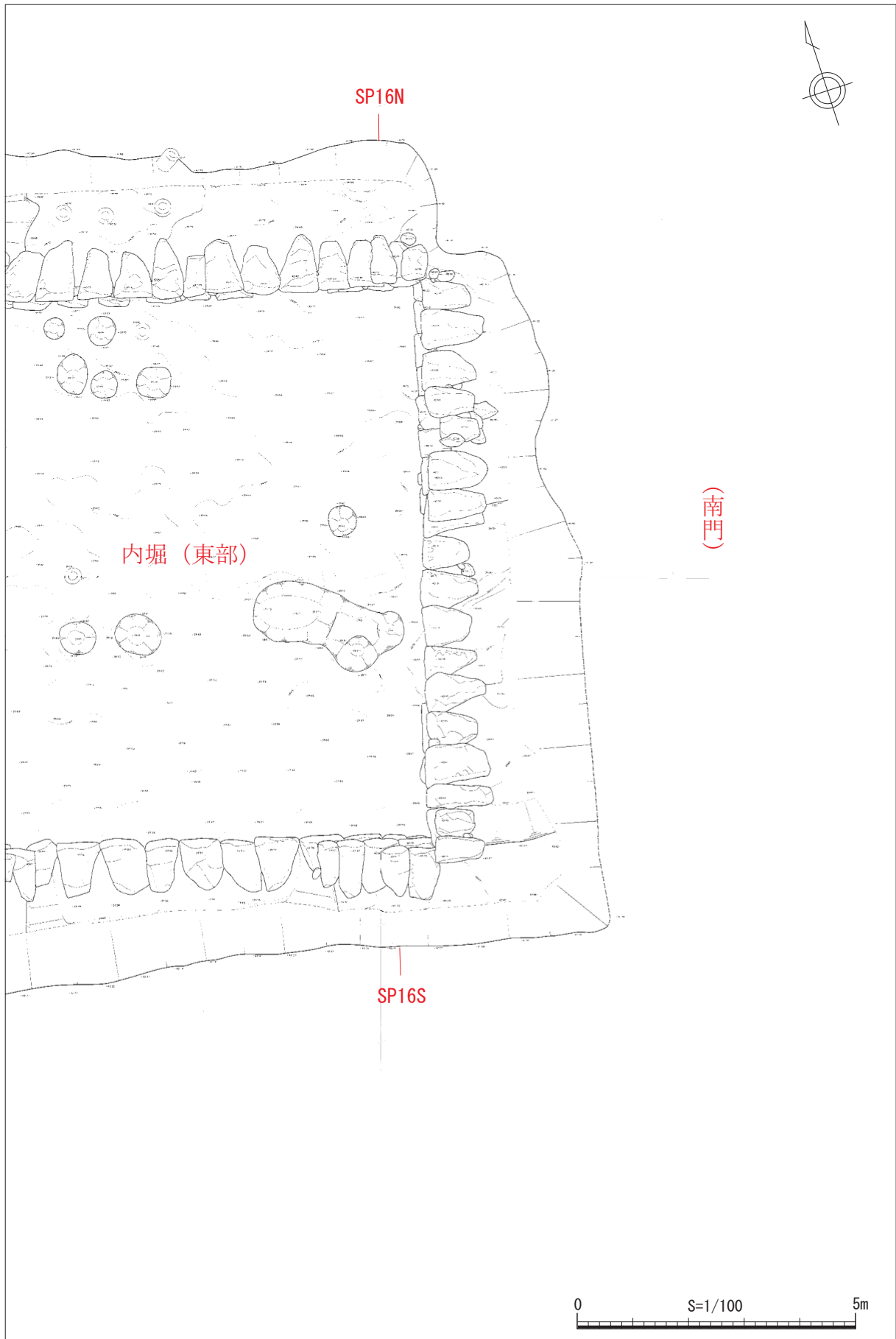
第 34 図 調査区全体分割図 16 (S = 1/100)



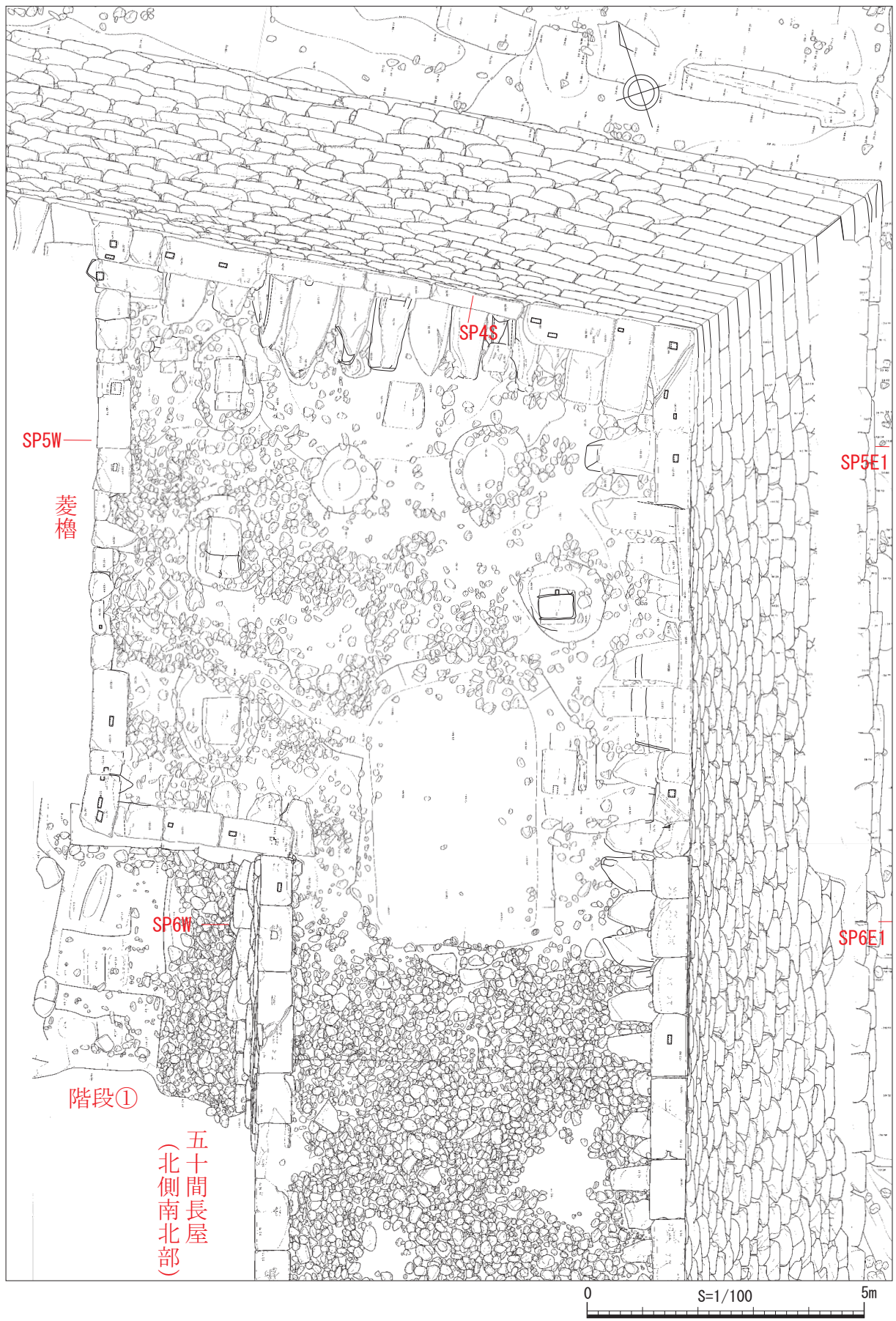
第 35 図 調査区全体分割図 17 (S=1/100)



第 36 図 調査区全体分割図 18 (S=1/100)



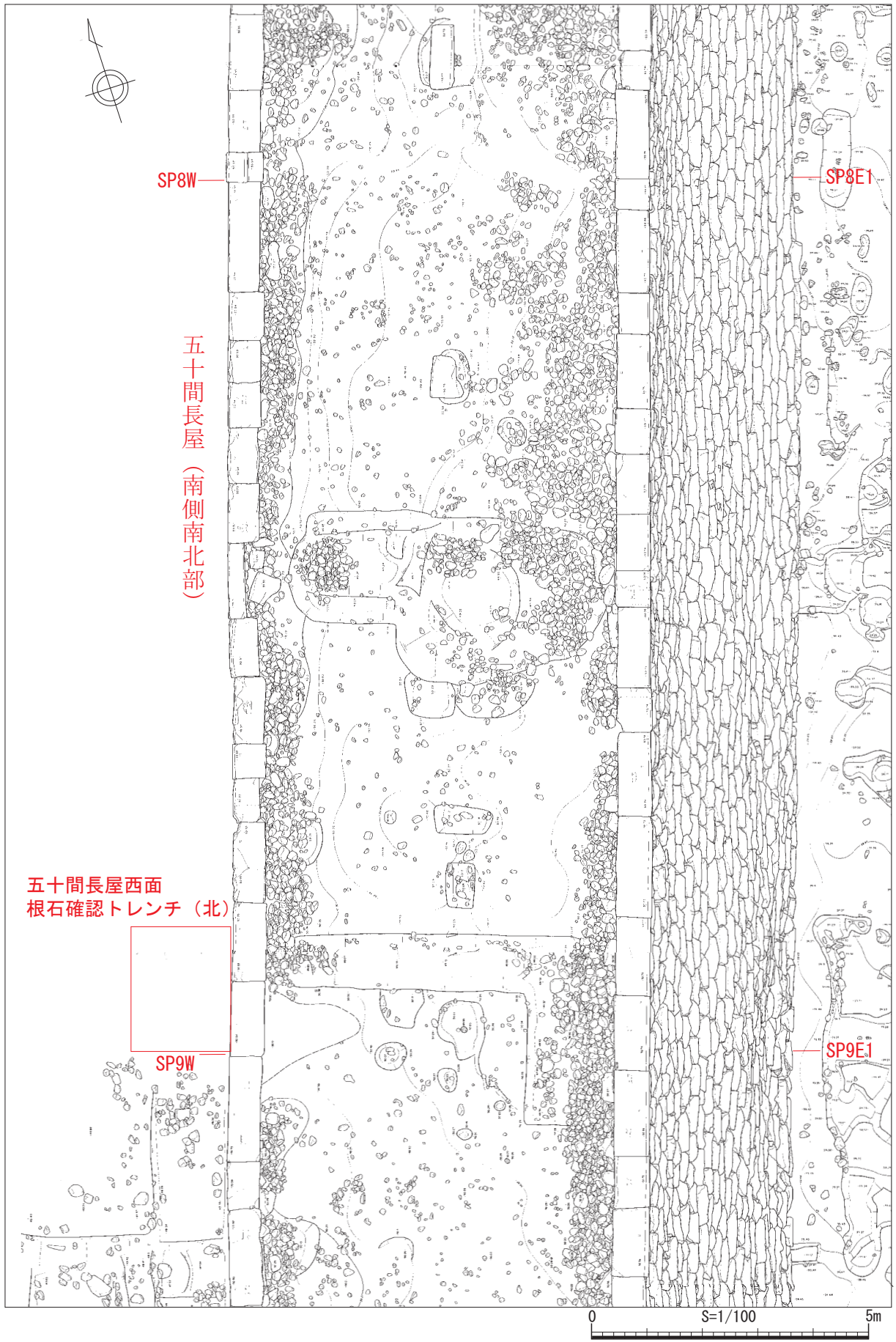
第 37 図 調査区全体分割図 19 (S = 1/100)



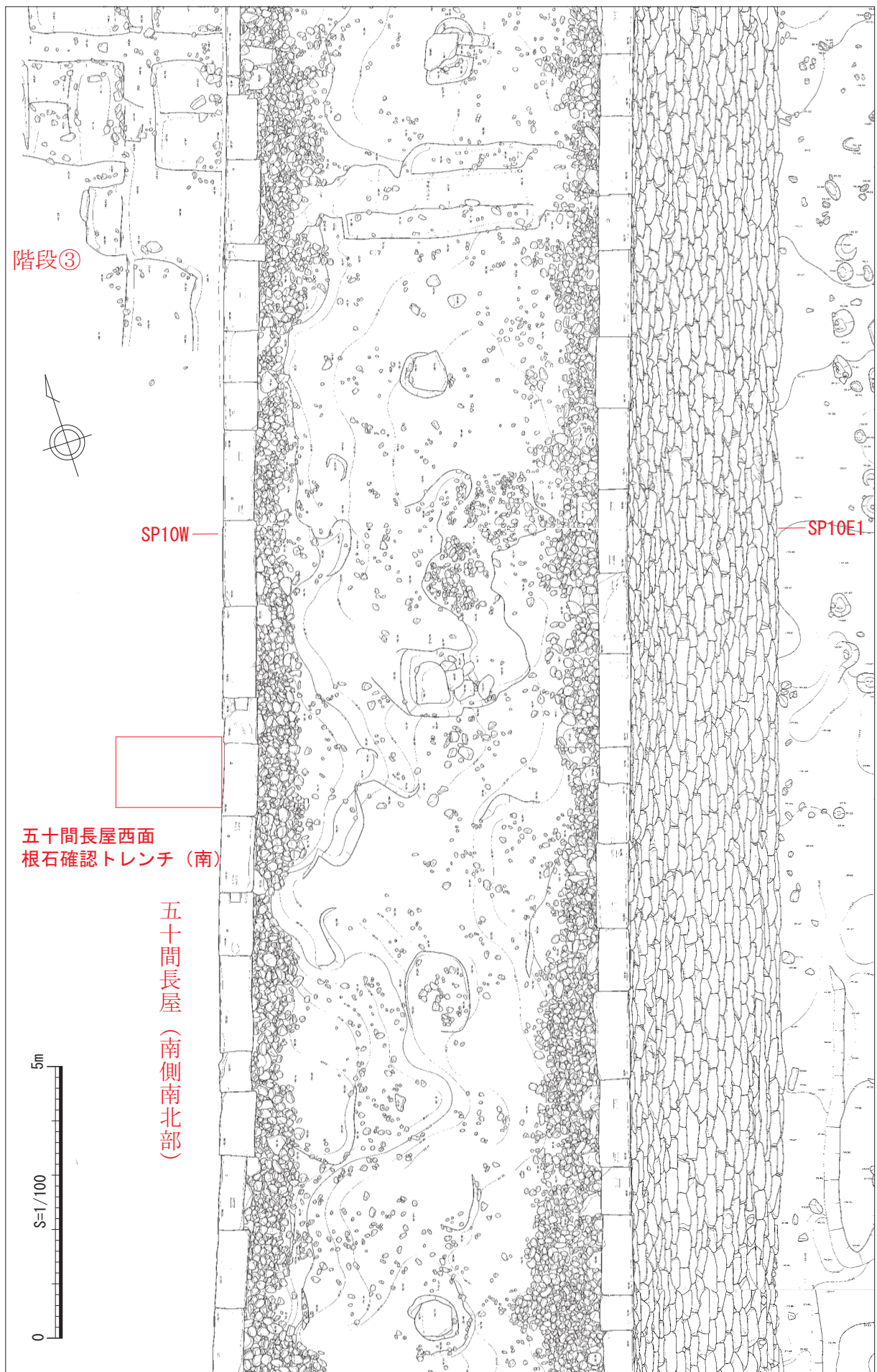
第38図 調査区全体分割図20 (S=1/100)



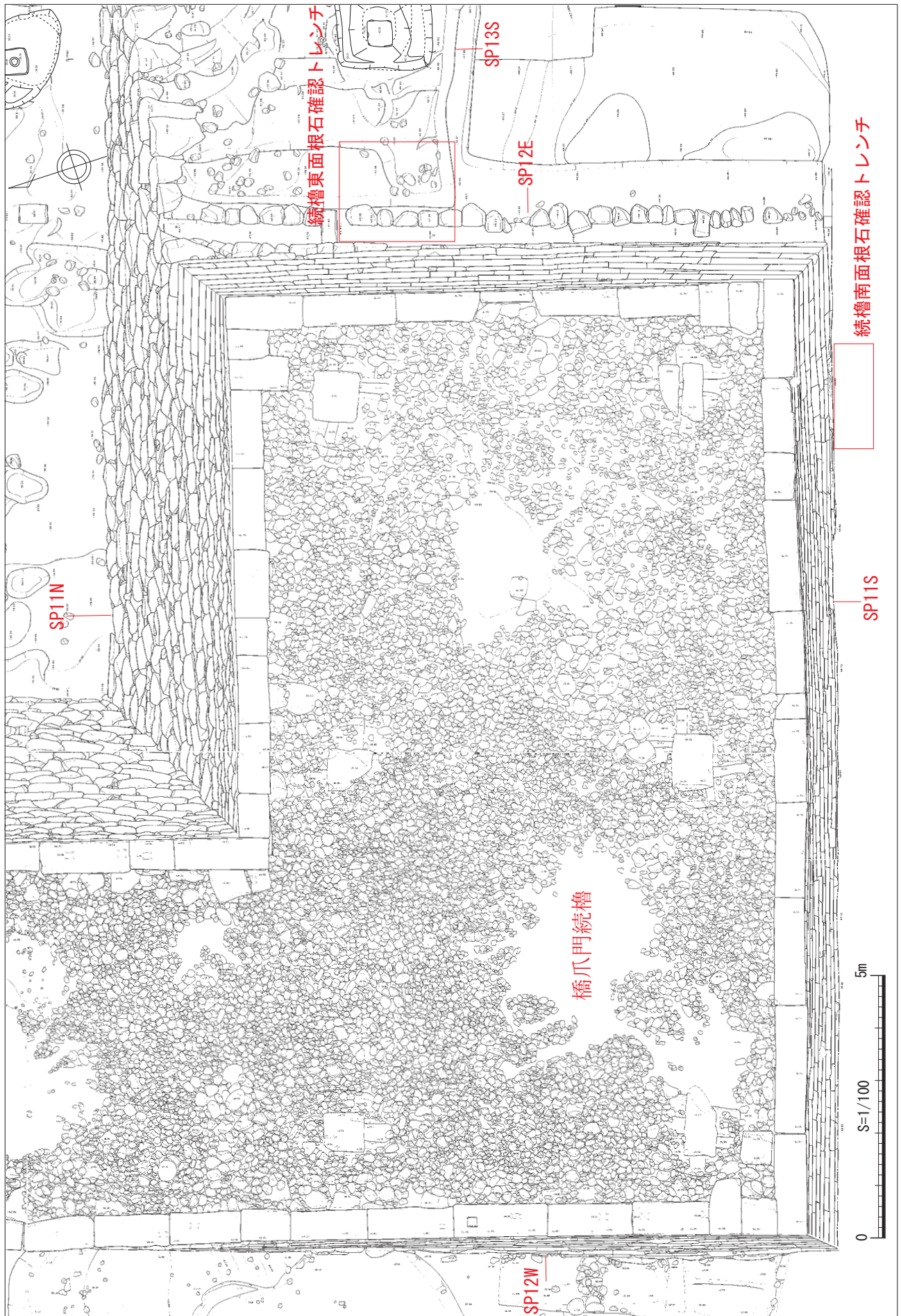
第 39 図 調査区全体分割図 21 (S = 1/100)



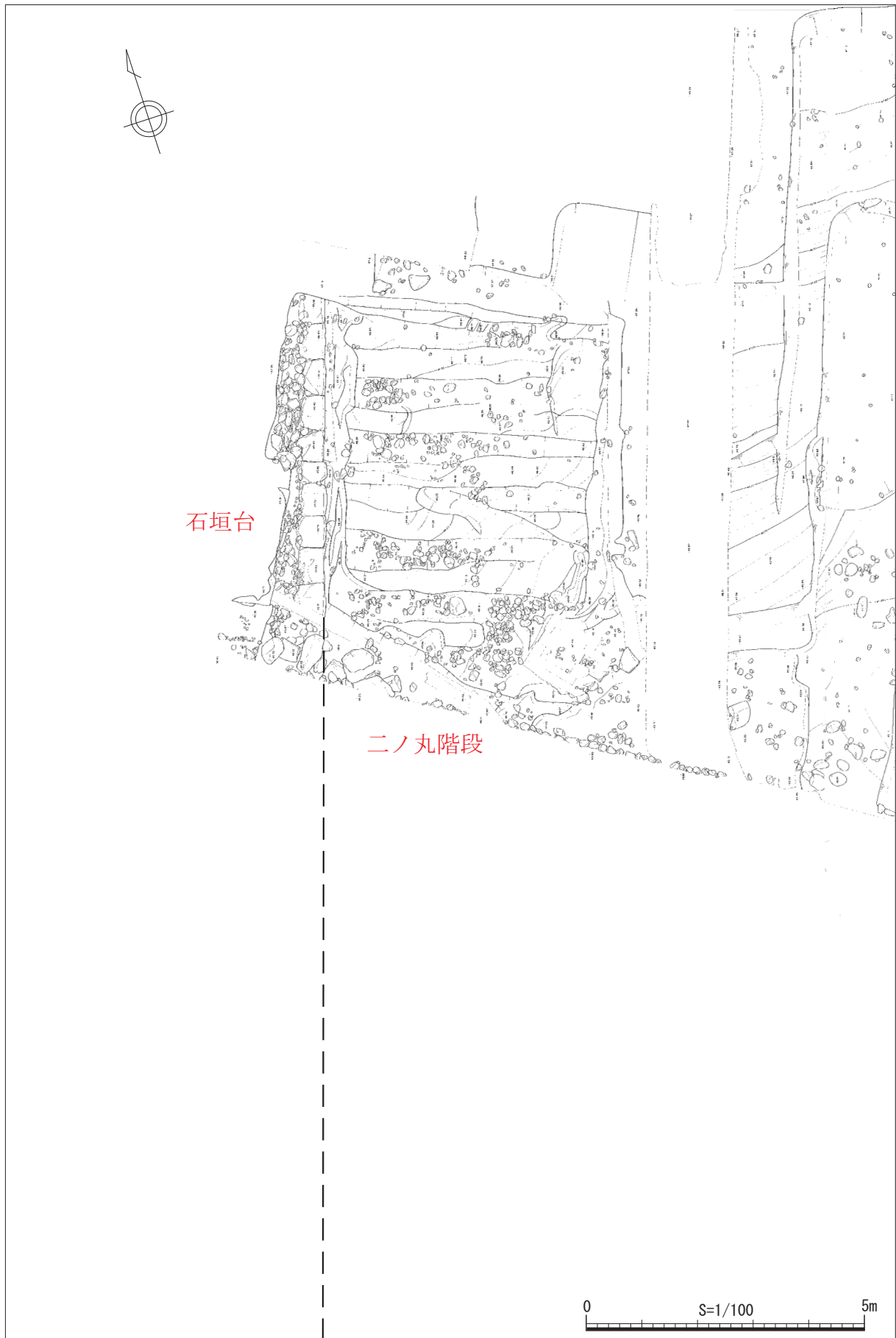
第40図 調査区全体分割図22 (S=1/100)



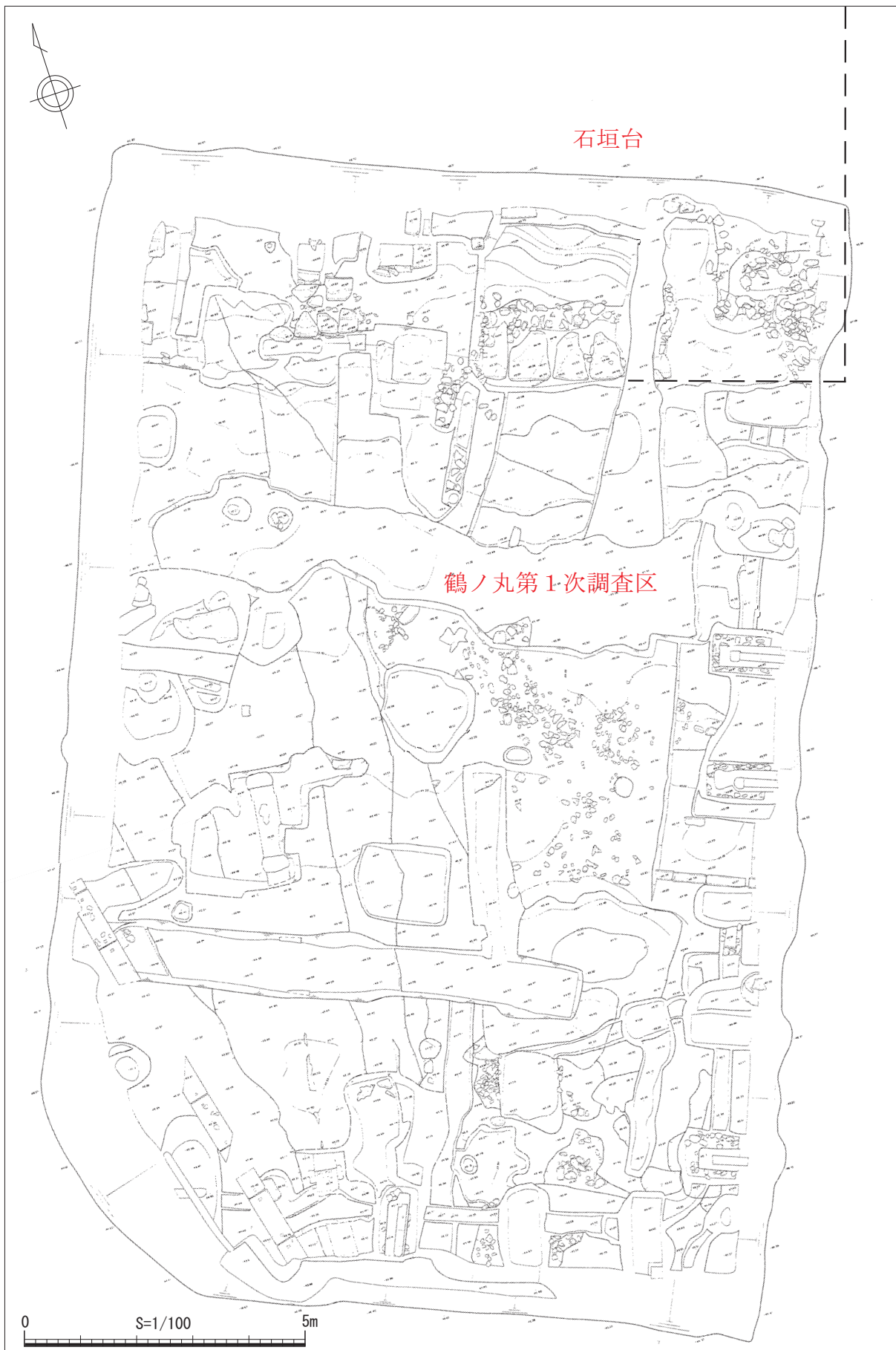
第41図 調査区全体分割図23 (S=1/100)



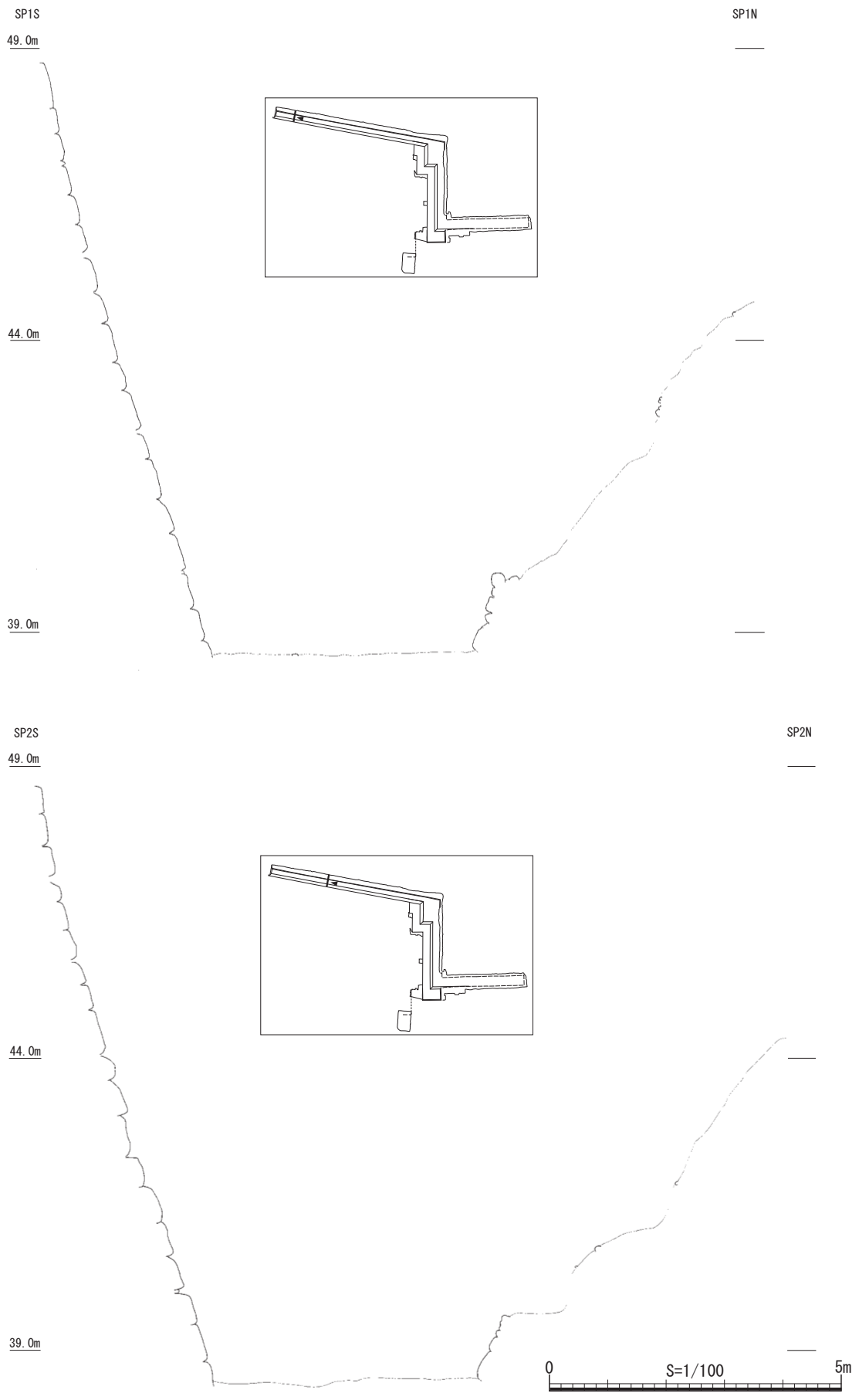
第 42 図 調査区全体分割図 24 (S = 1/100)



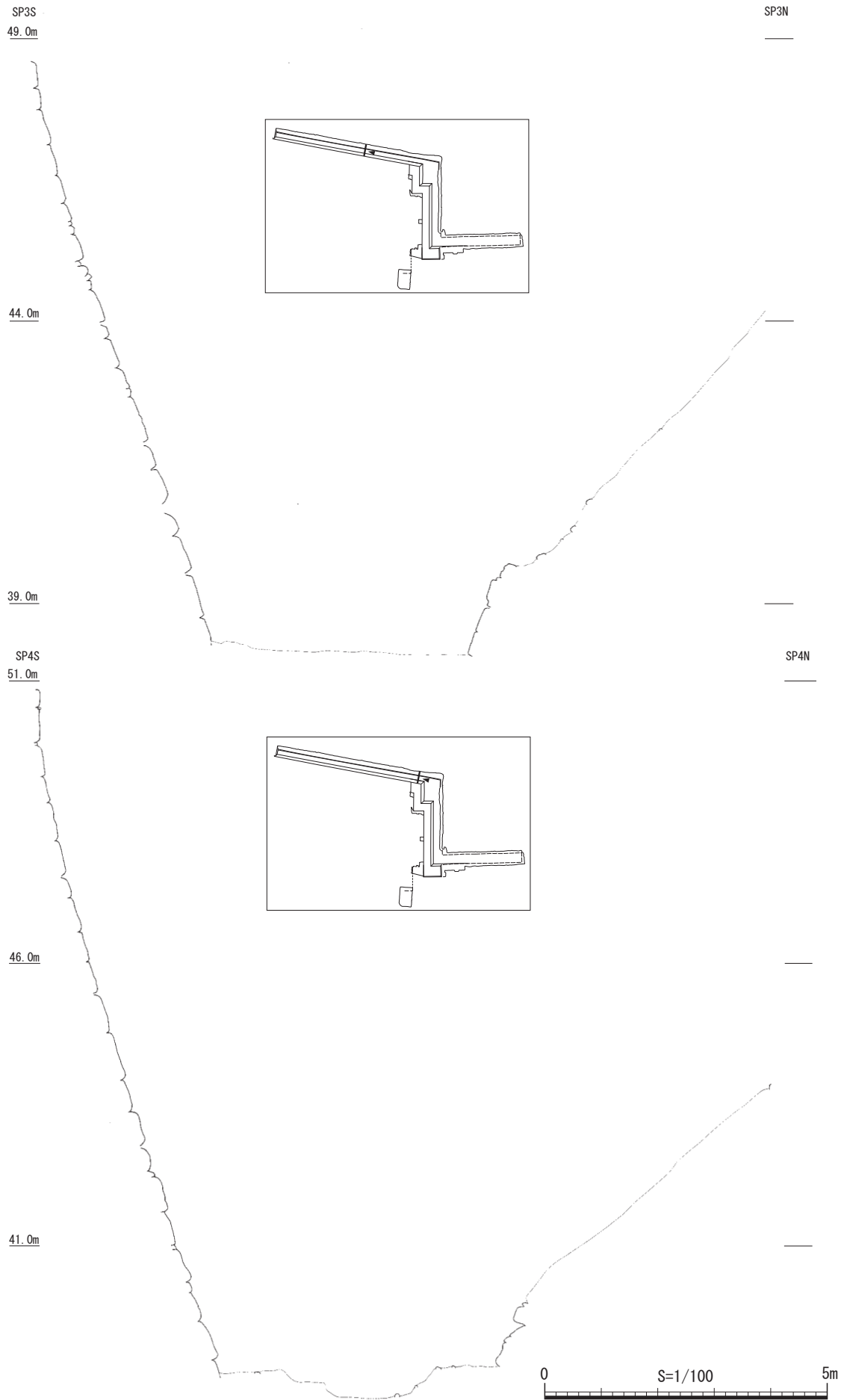
第 43 図 調査区全体分割図 25 (S=1/100)



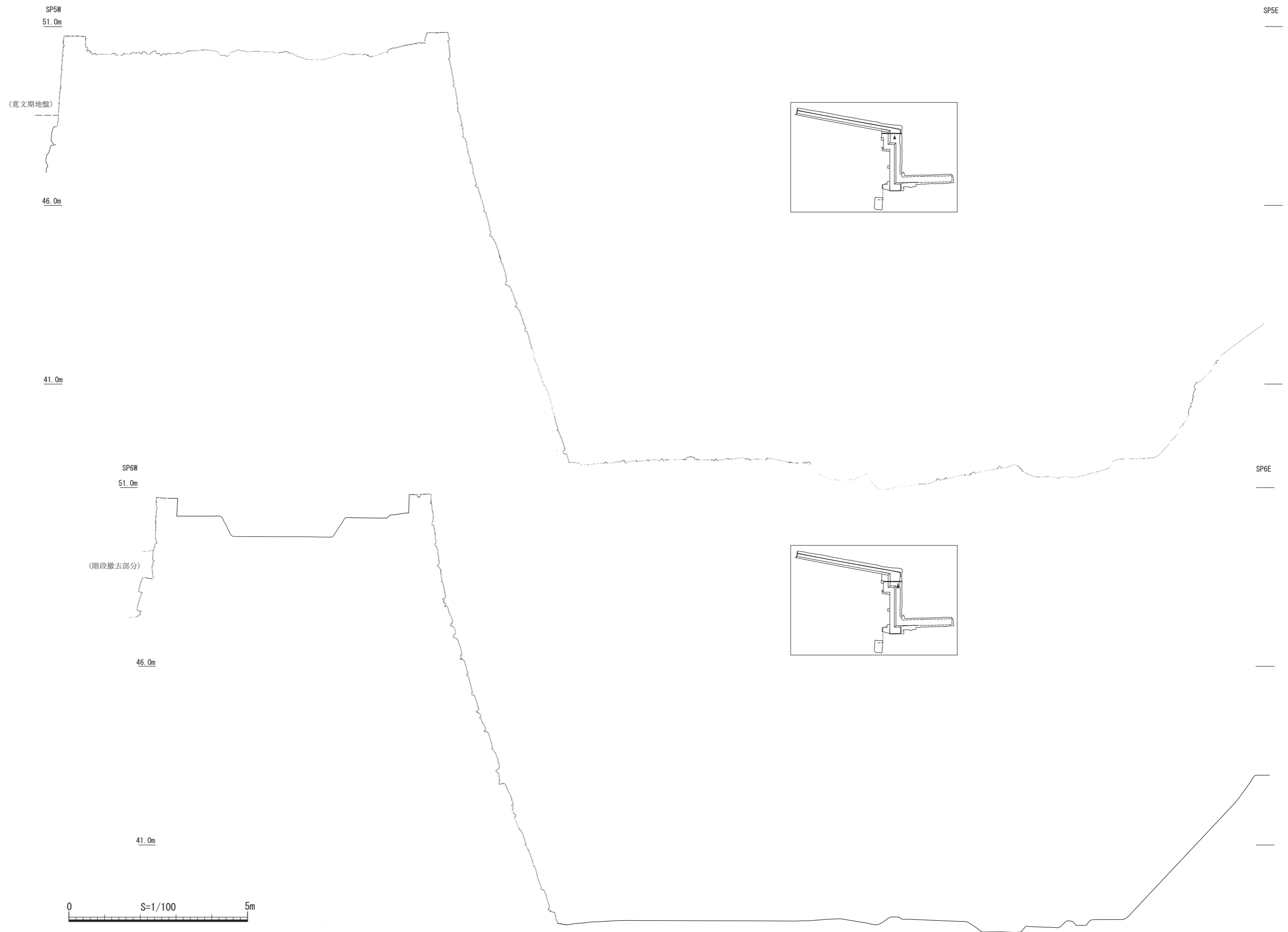
第44図 調査区全体分割図26 (S=1/100)



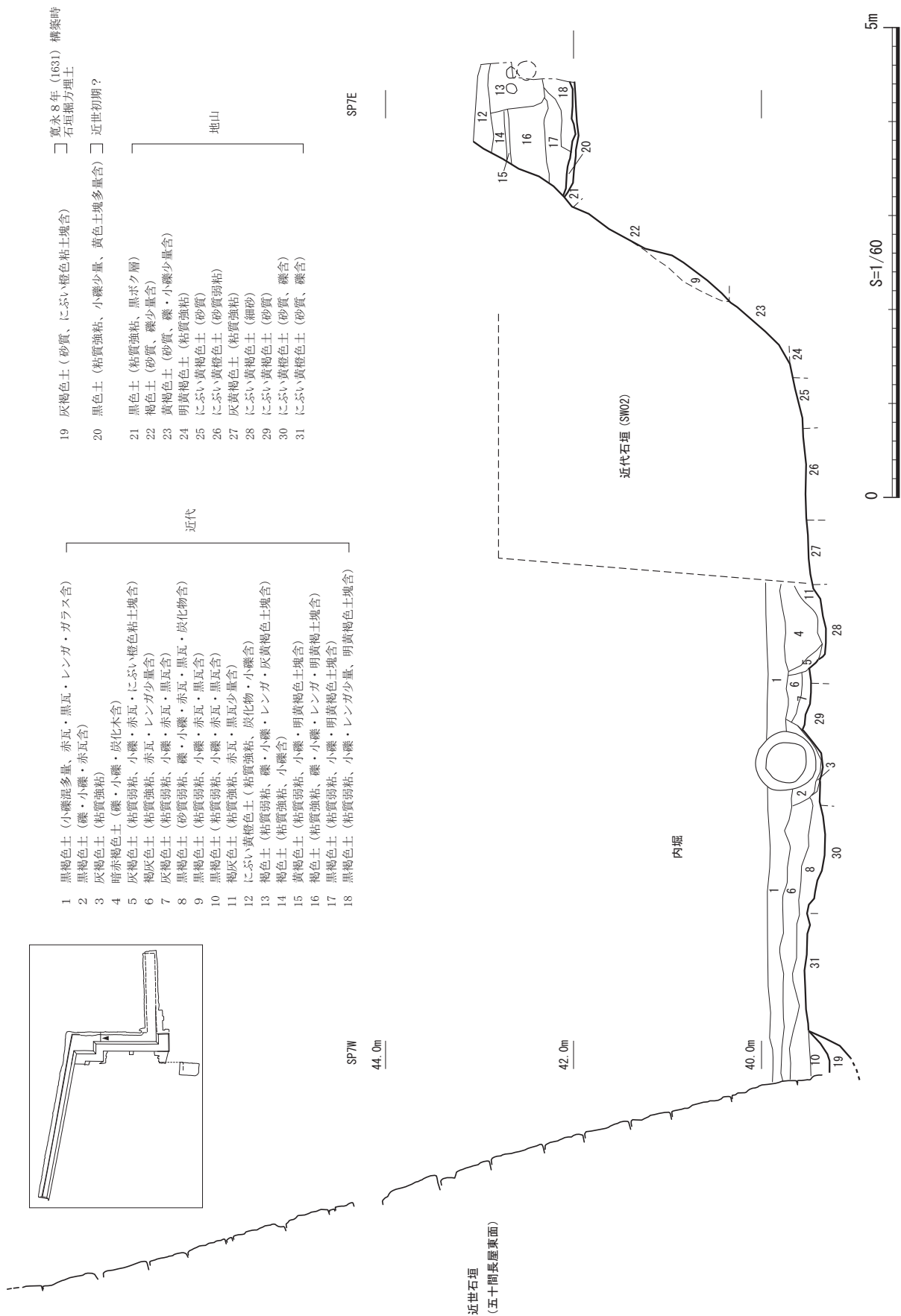
第 45 図 内堀（西部）断面図 1 (S=1/100)



第46図 内堀（西部）断面図2（S=1/100）



第47図 菱櫓台・内堀（中央部）断面図（S=1/100）



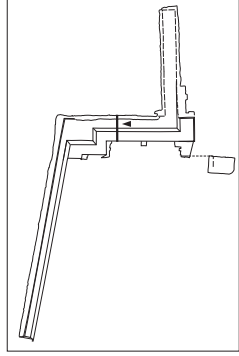
- 寛永8年(1631)構築時
 □ 石垣掘方埋土
- 近代
 □ 近世初期?
- 19 灰褐色土(砂質、にぶい、橙色粘土塊含)
 20 黒色土(粘質強粘、小礫少量、黄色土塊多量含)
- 21 黒色土(粘質強粘、黒ボク層)
 22 褐色土(砂質、礫少量含)
 23 黄褐色土(砂質、礫・小礫少量含)
 24 明黄褐色土(粘質強粘)
 25 にぶい黄褐色土(砂質)
 26 にぶい黄褐色土(粘質弱粘)
 27 灰黄褐色土(粘質強粘)
 28 にぶい黄褐色土(細砂)
 29 にぶい黄褐色土(砂質、礫含)
 30 にぶい黄褐色土(砂質、礫含)
 31 にぶい黄褐色土(砂質、礫含)
- 地山
- SP7E

- 1 黒褐色土(小礫混多量、赤瓦、黒瓦、レンガ・ガラス含)
 2 黒褐色土(礫・小礫、赤瓦含)
 3 灰褐色土(粘質強粘)
 4 暗赤褐色土(礫・小礫、炭化木含)
 5 灰褐色土(粘質弱粘、小礫、赤瓦、にぶい、橙色粘土塊含)
 6 褐灰色土(粘質強粘、赤瓦、レンガ少量含)
 7 灰褐色土(粘質弱粘、小礫・小礫、黒瓦含)
 8 黒褐色土(砂質弱粘、礫・小礫、赤瓦、黒瓦、炭化物含)
 9 黒褐色土(粘質弱粘、小礫・赤瓦、黒瓦含)
 10 黒褐色土(粘質弱粘、小礫・赤瓦、黒瓦含)
 11 褐灰色土(粘質強粘、赤瓦、黒瓦少量含)
 12 にぶい黄褐色土(粘質強粘、炭化物・小礫含)
 13 褐色土(粘質弱粘、礫・小礫)
 14 褐色土(粘質強粘、小礫含)
 15 黄褐色土(粘質弱粘、小礫・明黄褐色土塊含)
 16 褐色土(粘質強粘、礫・小礫、レンガ・明黄褐色土塊含)
 17 黒褐色土(粘質弱粘、小礫・明黄褐色土塊含)
 18 黒褐色土(粘質弱粘、小礫・レンガ少量、明黄褐色土塊含)
- 近代

第48図 内堀(中央部)断面図 (S=1/60)

SP8E2

SP8W
51.0m



(宝曆御地盤)

(断面詳細：第157図)

46.0m

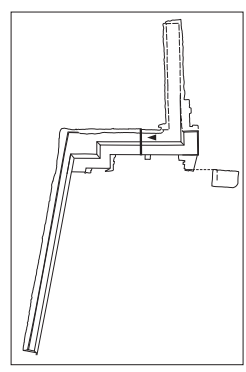
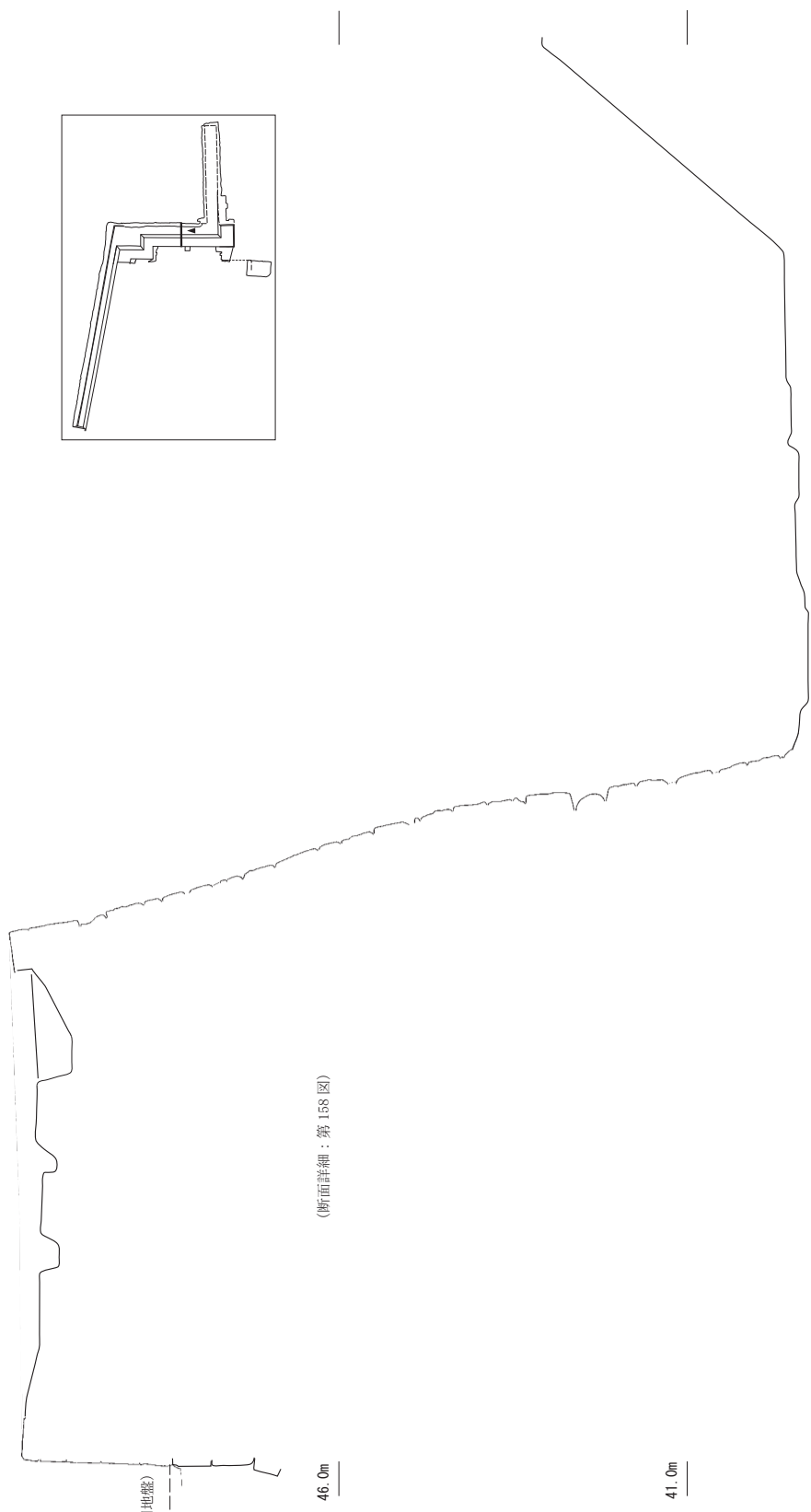
41.0m



第49図 五十間長屋台・内堀（中央部）断面図1（S=1/100）

SP9E2

SP9W
51.0m



(宝曆期地蔵)

46.0m
(断面詳細：第158図)

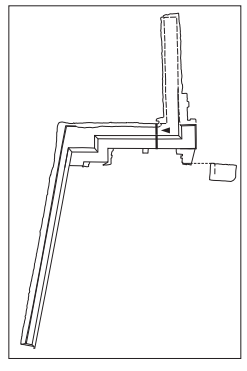
41.0m



第50図 五十間長屋台・内堀（中央部）断面図2（S=1/100）

SP10E2

SP10W
51.0m



(宝曆期地盤)

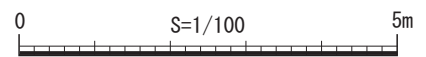
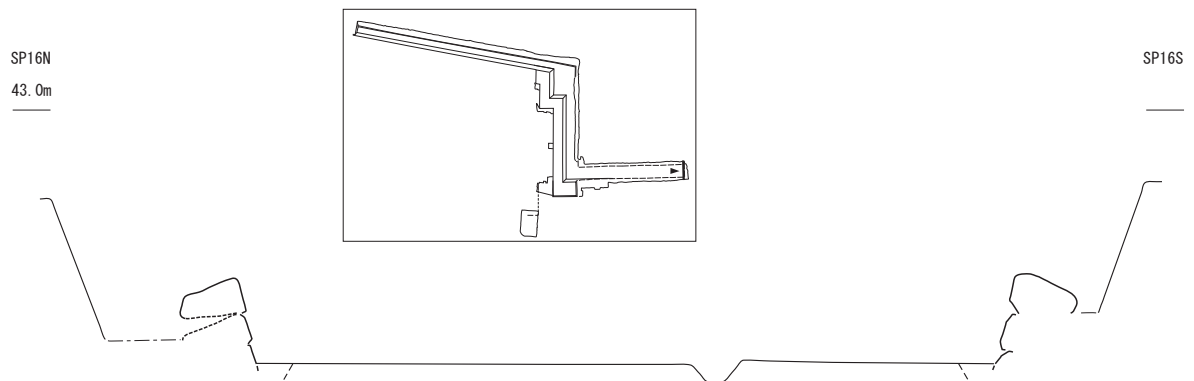
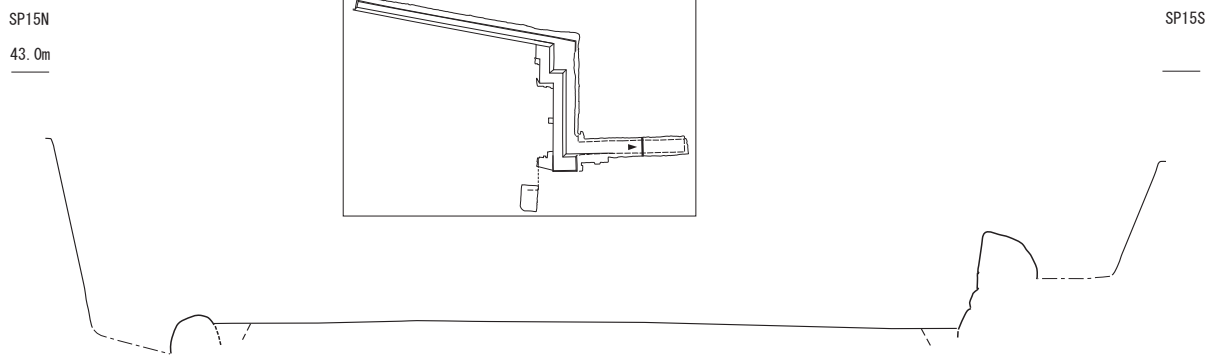
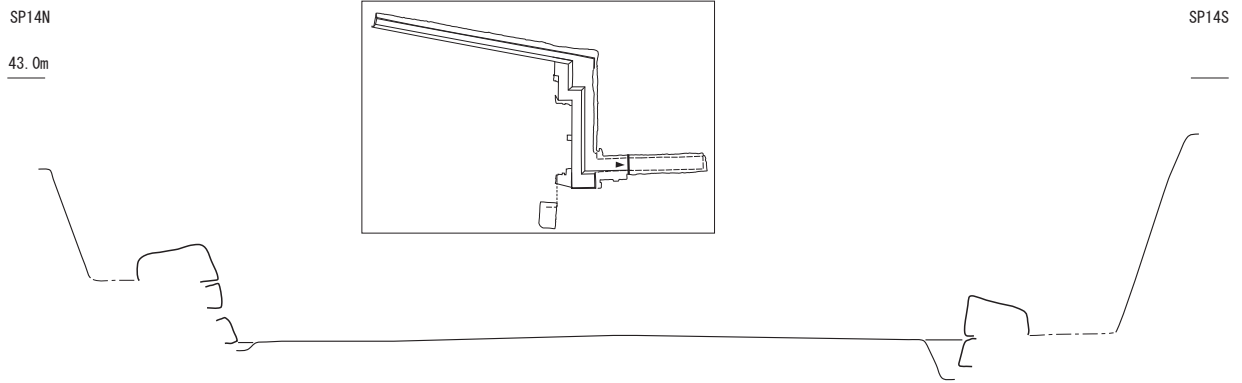
(断面詳細：第159図)

46.0m

41.0m



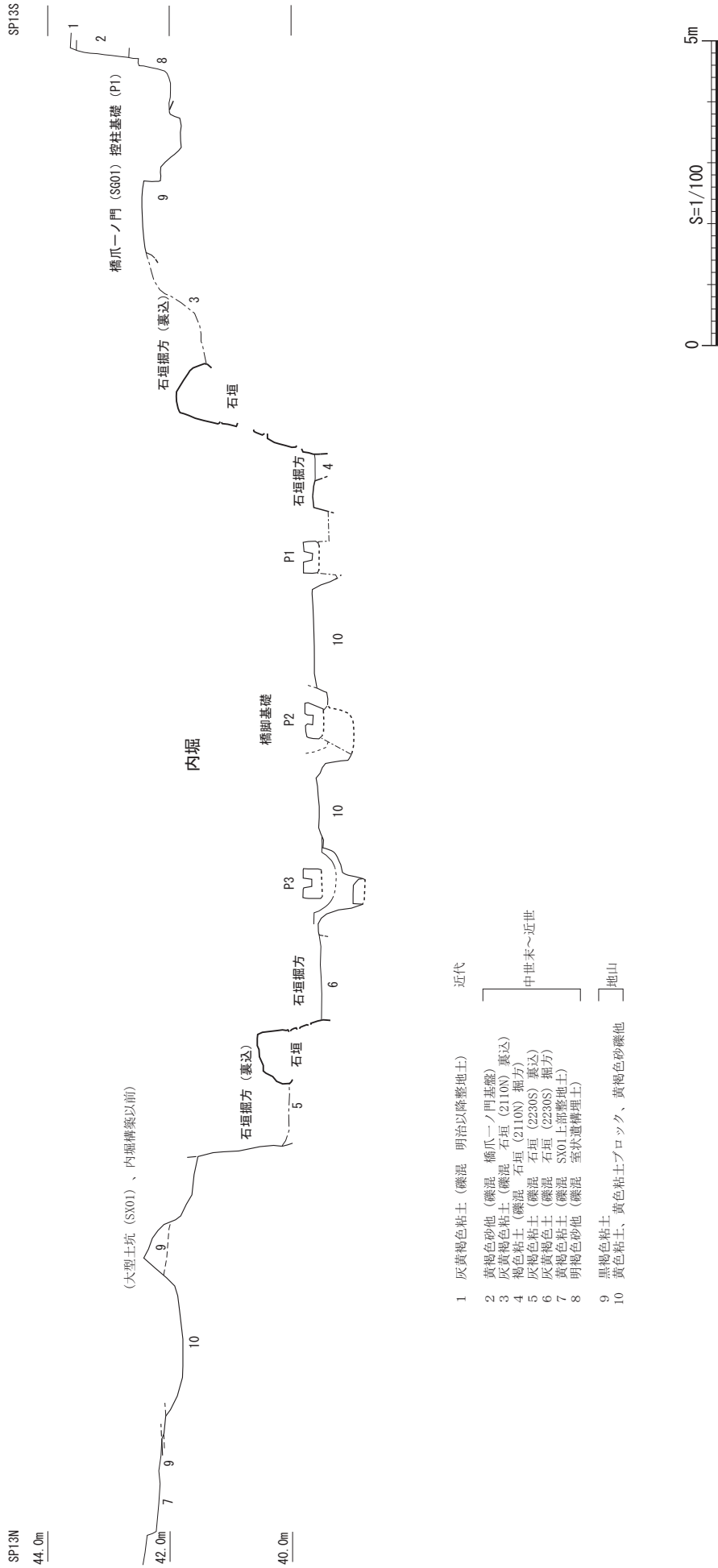
第51図 五十間長屋台・内堀（中央部）断面図3（S=1/100）



第 52 図 内堀（東部）断面図（S=1/100）

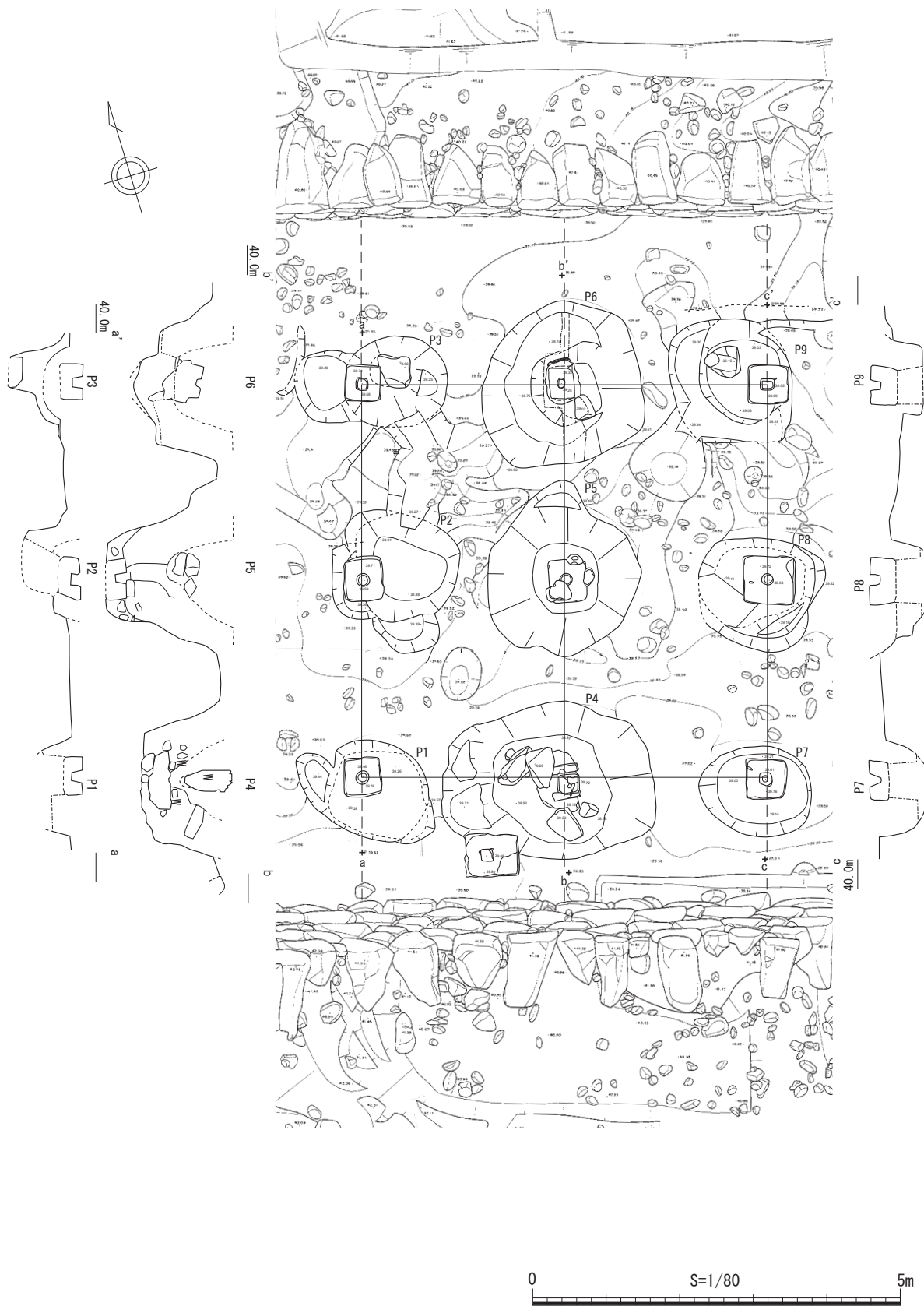
北 (三ノ丸側)

南 (鶴ノ丸側)

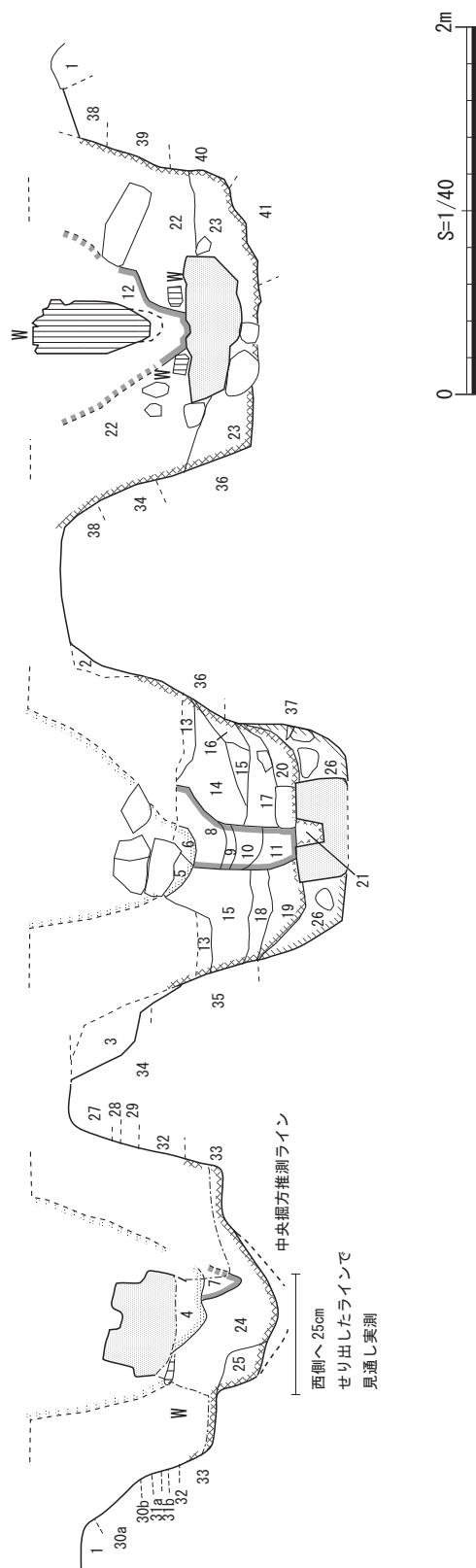
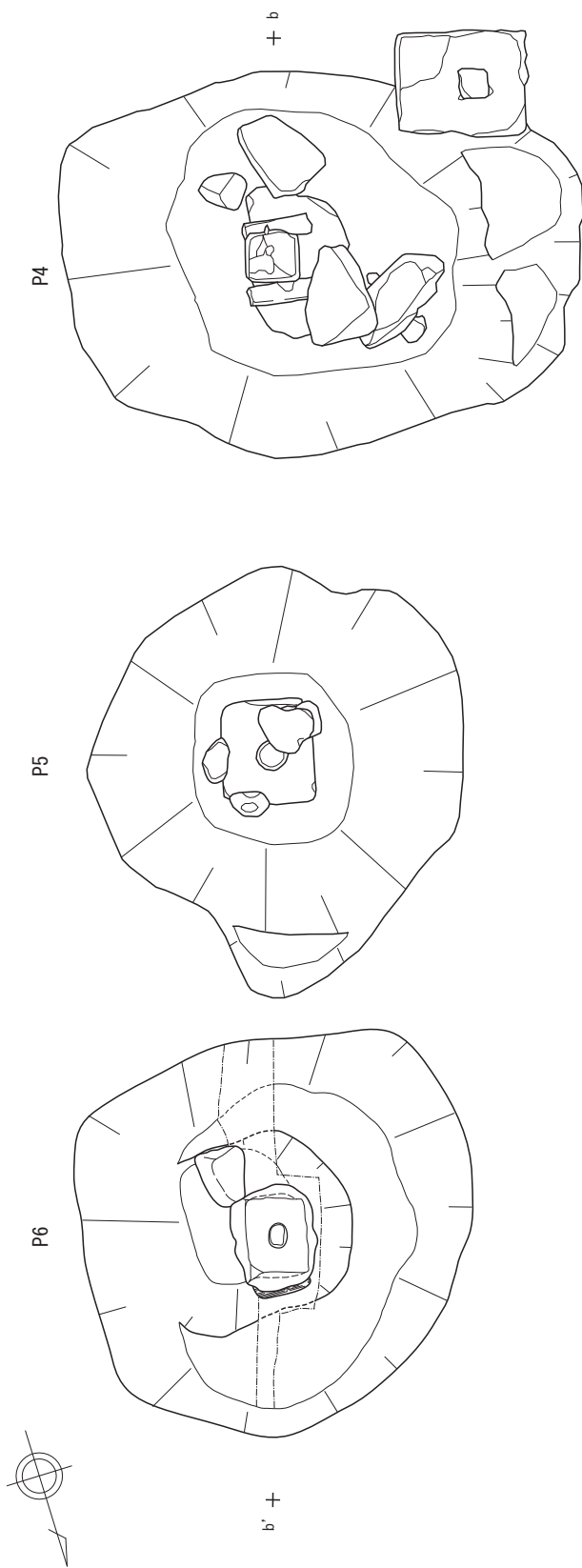


- | | | | |
|----|----------------------|---------------|--------|
| 1 | 灰黄褐色粘土 (礫混) | 明治以降(整地土) | 近代 |
| 2 | 黄褐色砂他 (礫混) | 橋爪一ノ門基礎 | 中世末〜近世 |
| 3 | 灰黄褐色粘土 (礫混) | 石垣 (2110N) 裏込 | |
| 4 | 褐色粘土 (礫混) | 石垣 (2110N) 掘方 | |
| 5 | 灰褐色粘土 (礫混) | 石垣 (2230S) 裏込 | |
| 6 | 灰黄褐色土 (礫混) | 石垣 (2230S) 掘方 | |
| 7 | 黄褐色粘土 (礫混) | SX01 上部(整地土) | |
| 8 | 明褐色砂他 (礫混) | 室状(運轉埋土) | |
| 9 | 黒褐色粘土 | | |
| 10 | 黄色粘土、黄色粘土ブロック、黄褐色砂礫他 | | 地山 |

第53図 内堀橋・橋爪一ノ門付近断面図 (S=1/100)



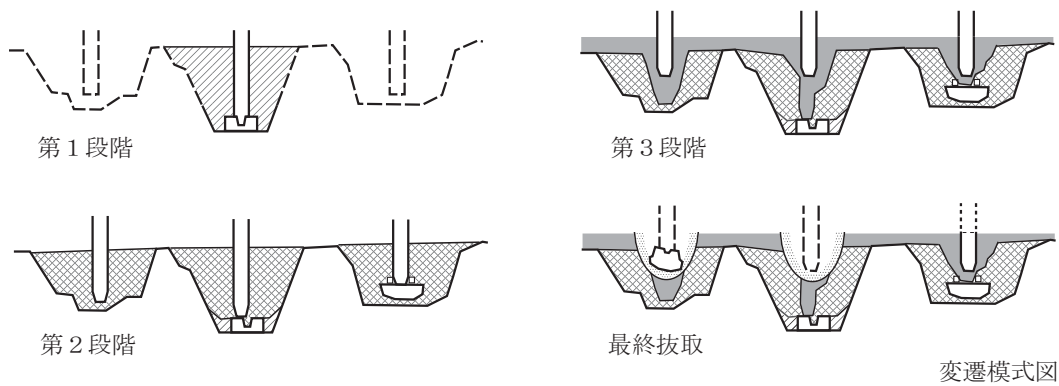
第54図 内堀橋遺構図 (S=1/80)



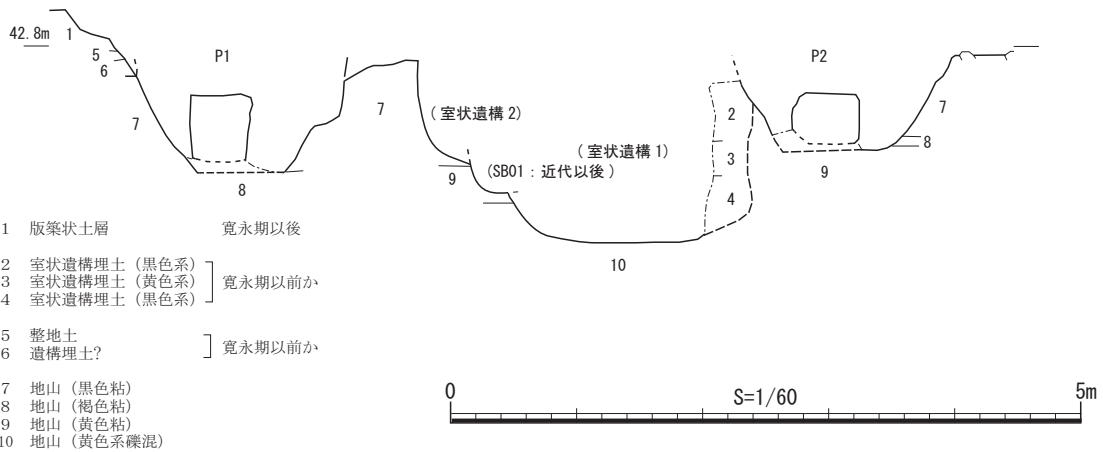
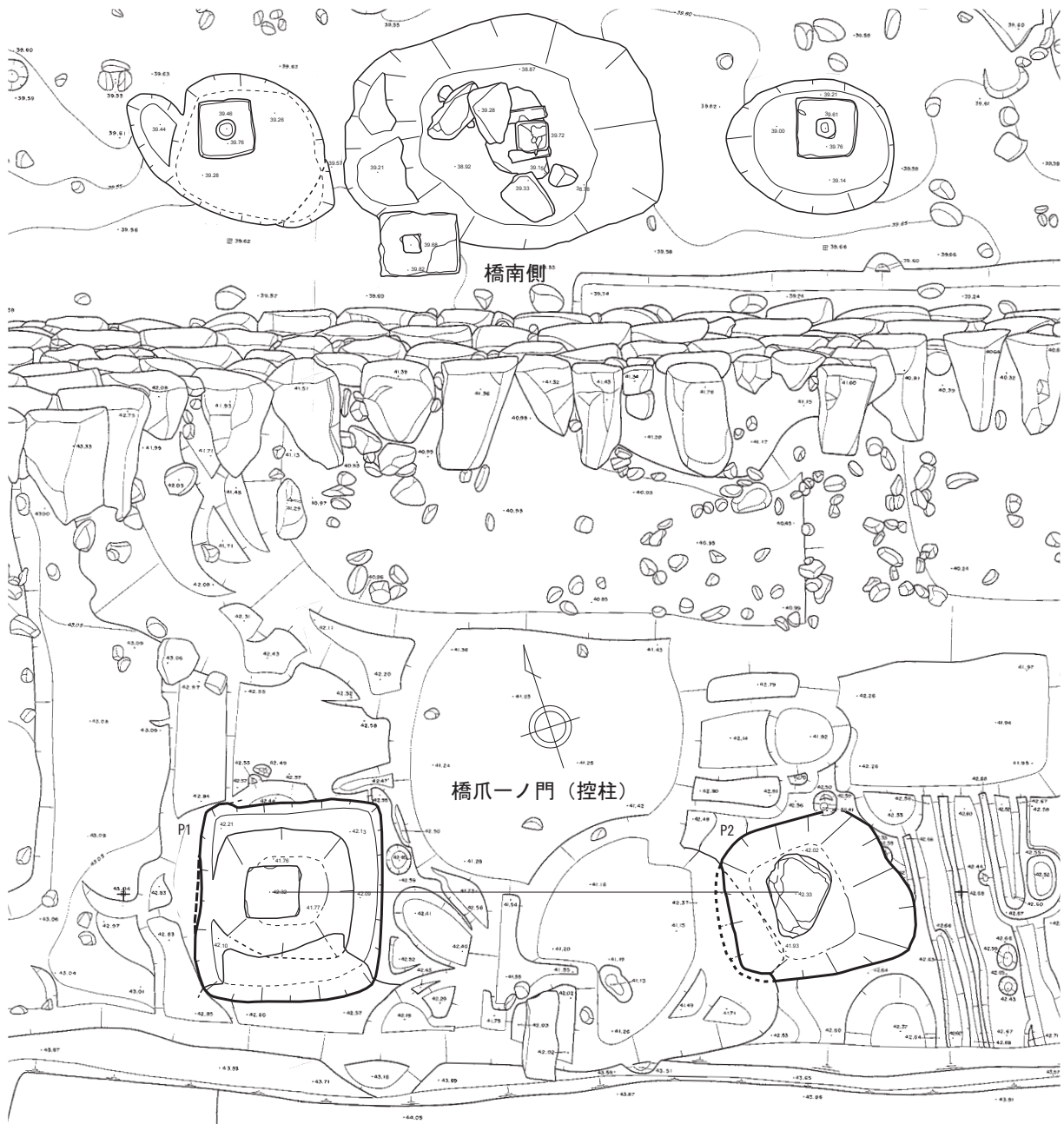
第55図 内堀橋遺構図 (橋脚中央列) (S=1/40)

I	1 黄褐色砂礫 シルト他混 [内堀石垣掘方埋土]	2 白灰色砂質土 礫混 3 鈍い黄褐色土 礫混 [IV・V層に含まれる可能性あり]	1 黄褐色砂礫 シルト他混 [内堀石垣掘方埋土]
II	4 暗灰褐色粘質土主体 黄灰褐色砂質土混 (鏝出土)	5 黒褐色砂質土 6 黒褐色砂質土+黒色粘土ブロック	
III	7 淡灰黄褐色砂質土 比較的均質	8 黄褐色砂質土 (木皮の有無不明) 9 黒褐色砂質土 (木皮の有無不明) 10 黒色粘土 (木皮あり、木片出土) 11 黒色砂質土 (木皮あり、鏝出土)	12 黒褐色砂質土
IV	24 褐灰色粘～砂質土 礫混 25 淡褐灰色砂質土 比較的均質	13 明赤褐色砂質土+黒褐色粘土ブロック 礫混 14 褐灰色砂質土+黒褐色粘土ブロック 礫混 15 黒褐色粘質土 礫混 (磁器染付出土) 16 明赤褐色砂質土+黒褐色粘土ブロック 17 褐色土 礫混 18 黒褐色砂質土 19 鈍い黄褐色粘質土 礫混 20 黄褐色粘質土 21 黒色シルト	22 黒色粘砂+緑灰色粘土ブロック 礫混 23 鈍い黄褐色粘質土 礫多量混
V		26 鈍い赤褐色粘質土 礫多量混	
VI	27 黄褐色細砂+シルト 28 黄灰色シルト 29 淡灰色シルト 30a 黄褐色細砂+シルト 30b 黄褐色細砂+シルト (鉄分多) 31a 黄灰色粗砂+シルト (硬い) 31b 黄灰色粗砂+シルト (鉄分多) 32 黄灰色粗砂 33 黄灰色粗砂+シルト (硬い)	34 鈍い黄褐色粘土 礫多量混 35 鈍い黄褐色砂質土 36 鈍い黄褐色砂質土 礫混 37 灰黄褐色粘質土 礫混	34 鈍い黄褐色粘土 礫多量混 36 鈍い黄褐色砂質土 礫混 38 鈍い黄褐色砂質土 礫混 39 浅黄色シルト 40 黄褐色シルト 41 オリーブ色粘土

- I 石垣掘方等
- II 最終抜取痕
- III 第3段階基礎埋土 (第2段階基礎抜取痕)
- IV 第2段階基礎埋土 (第1段階基礎抜取痕)
- V 第1段階基礎埋土
- VI 地山



第55図土層注記・補足

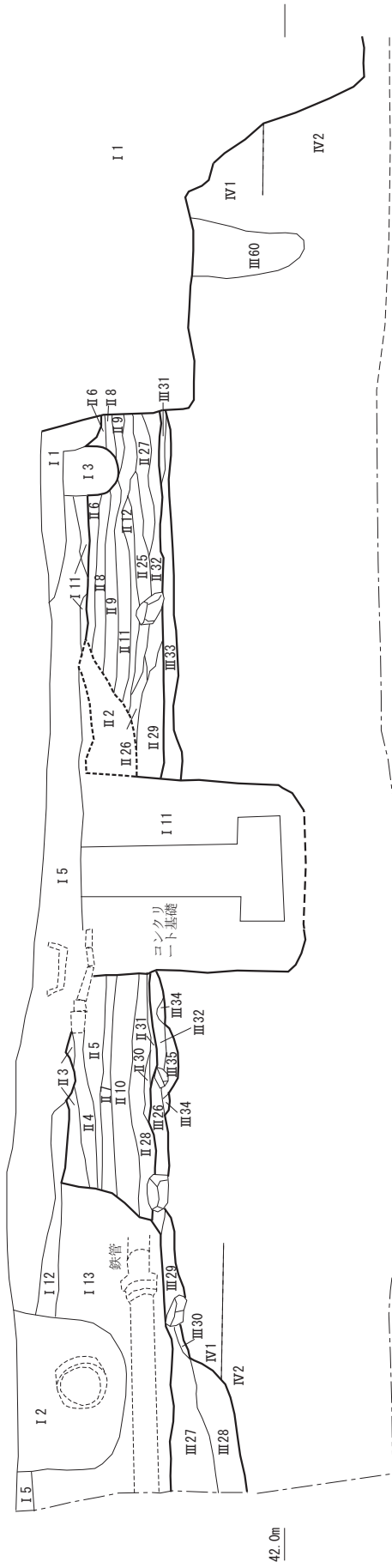


- 1 版築状土層 寛永期以後
- 2 室状遺構埋土 (黒色系)] 寛永期以前か
- 3 室状遺構埋土 (黄色系)]
- 4 室状遺構埋土 (黒色系)]
- 5 整地土] 寛永期以前か
- 6 遺構埋土?]
- 7 地山 (黒色粘)
- 8 地山 (褐色粘)
- 9 地山 (黄色粘)
- 10 地山 (黄色系礫混)

第 56 図 橋爪一ノ門遺構図 (S=1/60)

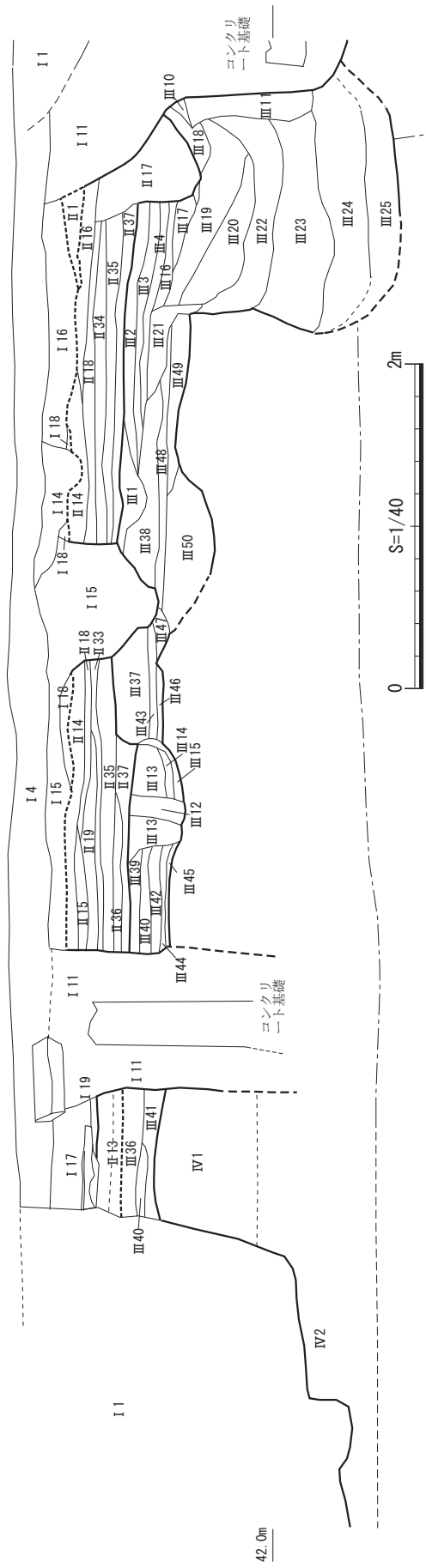
東 A
44.0m

B



B
44.0m

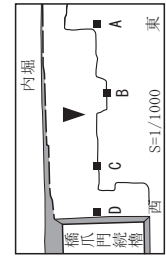
C



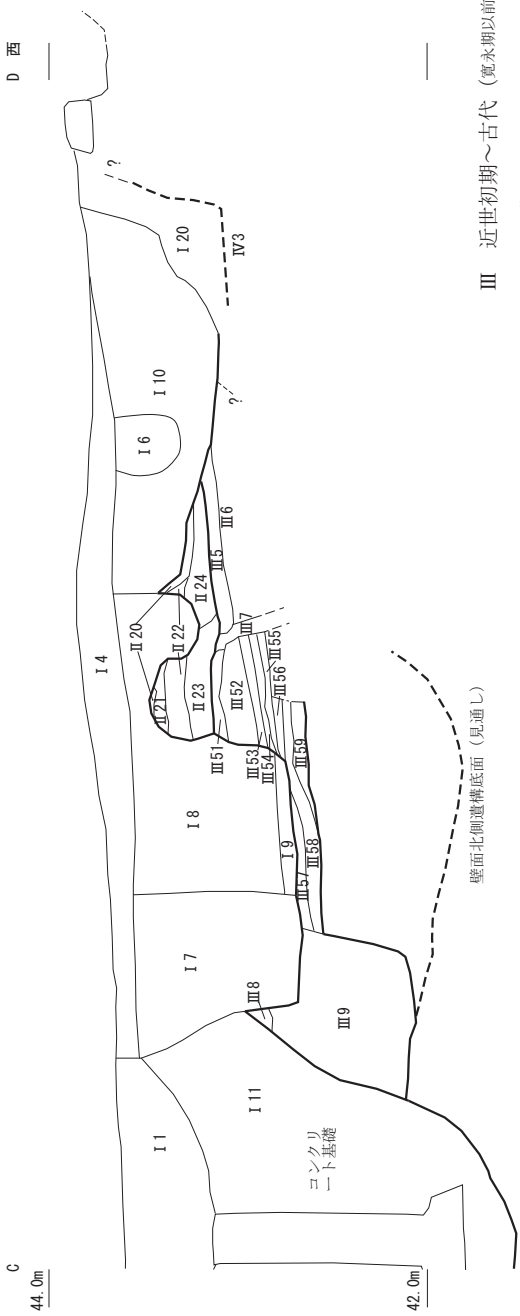
42.0m



第 57 図 内堀東部南岸土層断面図 I (S=1/40)

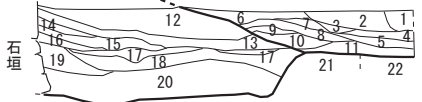
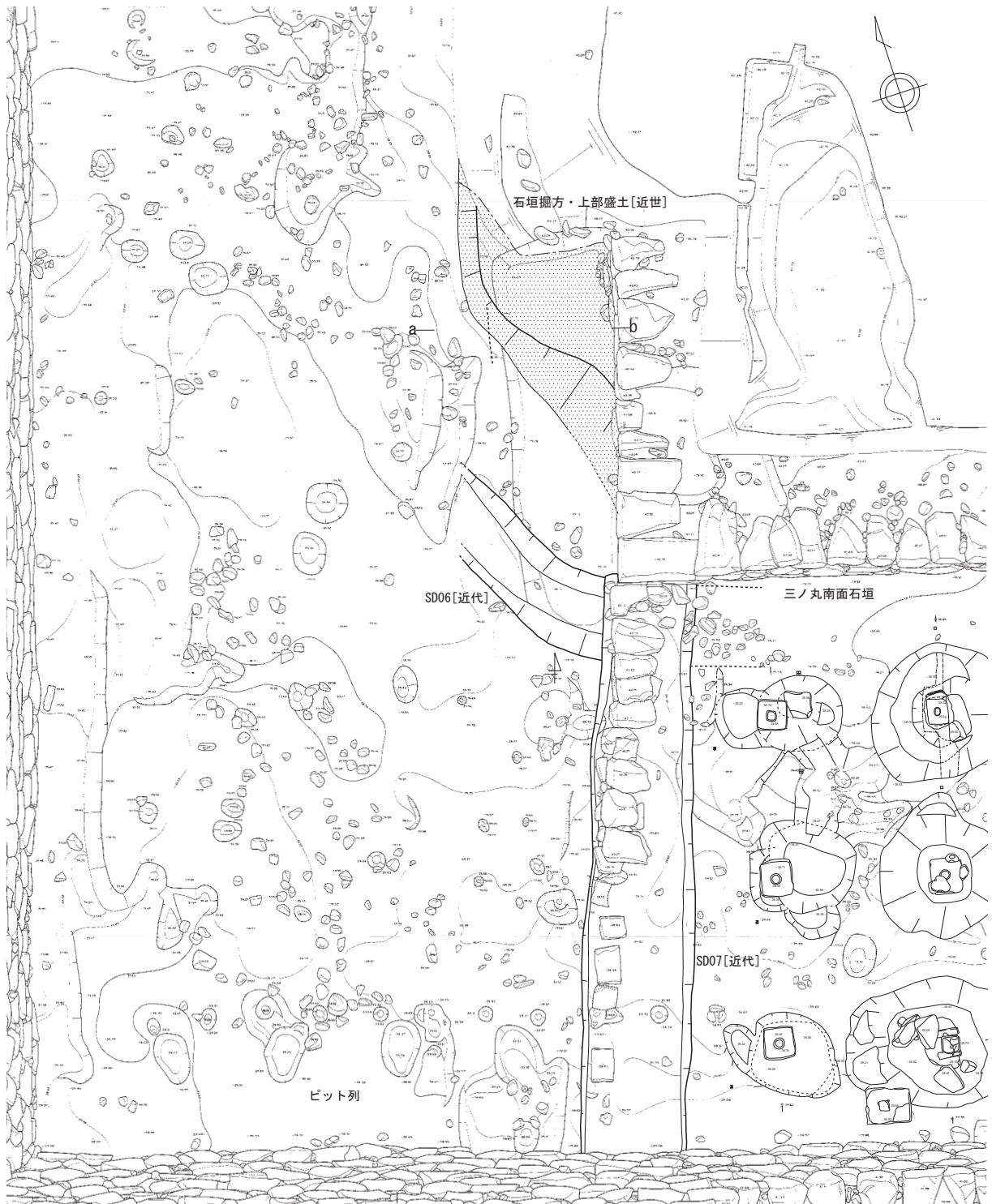


- III26 淡褐色砂質土 (少し粘性あり)
- III27 濁淡褐色砂質土 (炭+黄色土塊、小さい砂礫多く含む)
- III28 濁淡褐色砂質土 (粗砂及び径5~10cm大の礫含む、黄色地山塊混じる、底面に1cmの黒褐色粘質土層がある)
- III29 濁褐色粘質土 (黄色地山小塊混じる)
- III30 淡褐色粘質土 (砂混じる)
- III31 黒褐色粘質土
- III32 濁褐色粘質土 (砂混じる)
- III33 淡褐色砂質土
- III34 淡黄褐色粘質土 (砂混じる)
- III35 褐色粘質土 (III32より粘性強い)
- III36 濁褐色砂質土 (黄色粘質土塊・黒色粘質土塊混じる)
- III37 褐色砂質土 (径10~15cm大の礫含む)
- III38 褐色砂質土 (径10~15cm大の礫ほとんど含まない)
- III39 褐色粘質土 (淡黄色砂礫少量含む)
- III40 濁黄色粘質土
- III41 濁黄褐色砂質土 (礫含む)
- III42 濁淡黄褐色砂質土 (礫含む)
- III43 淡褐色粘質土
- III44 濁暗褐色粘質土 (暗褐色粘質土小塊混じる)
- III45 淡黄褐色砂質土
- III46 淡明褐色粘質土
- III47 淡褐色砂質土
- III48 褐色砂質土
- III49 濁暗褐色粘質土
- III50 濁暗褐色粘質土 (淡褐色砂質土小塊多量に混じる)
- III51 濁褐色粘質土
- III52 淡褐色砂質土
- III53 褐色砂質土
- III54 灰褐色砂質土
- III55 明褐色砂質土
- III56 淡灰褐色砂質土 (硬くしまっている)
- III57 褐色粘質土
- III58 淡灰褐色砂質土
- III59 暗褐色砂質土
- III60 (遺構・ピット)



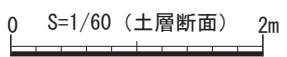
- ### III 近世初期〜古代 (寛永期以前か)
- III 1 濁暗褐色砂質土 (黒褐色粘質土塊が多く混じる)
 - III 2 暗褐色粘質土 (硬くしまる)
 - III 3 暗灰色細砂土
 - III 4 褐色砂質土
 - III 5 暗灰色砂質土
 - III 6 濁褐色粘質土 (礫含む)
 - III 7 褐色砂質土 (粘性)
 - III 8 濁褐色粘質土
 - III 9 灰褐色砂質土
 - III 10 濁暗褐色粘質土
 - III 11 暗褐色粘質土
 - III 12 淡褐色砂質土
 - III 13 濁灰褐色粘質土
 - III 14 濁暗褐色粘質土
 - III 15 褐色砂質土
 - III 16 明黄褐色粘質土
 - III 17 褐色粘質土
 - III 18 濁褐色砂質土
 - III 19 淡褐色砂質土
 - III 20 明淡褐色砂質土
 - III 21 暗褐色土 (黄色粘質土塊混じる)
 - III 22 黒褐色土
 - III 23 濁黒褐色土 (暗褐色粘質土塊多く混じる。黄色砂質土塊混じる)
 - III 24 明淡褐色砂質土
 - III 25 暗褐色粘質土 (黄色砂質土塊混じる)
- ### II 近世整地土 (寛永期以後か)
- II 20 黄灰色粘質土
 - II 21 褐色砂質土
 - II 22 淡褐色砂質土 (やわらかい)
 - II 23 褐色粘質土 (砂混じる)
 - II 24 灰褐色砂質土
 - II 25 濁淡灰褐色砂質土 (粘性)
 - II 26 灰褐色粘質土
 - II 27 濁淡灰褐色砂質土 (淡黄灰色粗砂多く混じる)
 - II 28 灰褐色砂質土 (粘性、炭)
 - II 29 灰褐色砂質土 (粘性、炭、黄色地山小塊混じる)
 - II 30 暗褐色土 (粘性)
 - II 31 淡灰黄色粗砂土
 - II 32 淡灰褐色砂質土
 - II 33 灰褐色粘質土
 - II 34 淡褐色砂質土
 - II 35 灰褐色砂質土
 - II 36 明褐色砂質土
 - II 37 褐色砂質土
- ### I 近代以降
- I 1 (最近年の攪乱)
 - I 2 濁灰褐色砂質土 (土管)
 - I 3 灰褐色砂質土
 - I 4 濁暗褐色砂質土 (礫、凝灰岩多く含む)
 - I 5 暗灰褐色粘質土
 - I 6 (ヒューム管敷方)
 - I 7 (攪乱)
 - I 8 褐色砂質土
 - I 9 濁灰褐色砂質土
 - I 10 (攪乱)
 - I 11 濁黄灰色粘質土
 - I 12 褐色粘質土
 - I 13 濁灰褐色砂質土 (ガス管?埋設土)
 - I 14 黒褐色粘質土 (礫多く混じる)
 - I 15 褐色砂質土 (礫多く混じる)
 - I 16 褐色粘質土 (小礫多く混じる)
 - I 17 濁褐色砂質土
 - I 18 褐色粘質土
 - I 19 褐色粘質土 (黄色粘質土小ブロック混じる)
 - I 20 褐色砂質土

第58図 内堀東部南岸土層断面図2 (S=1/40)

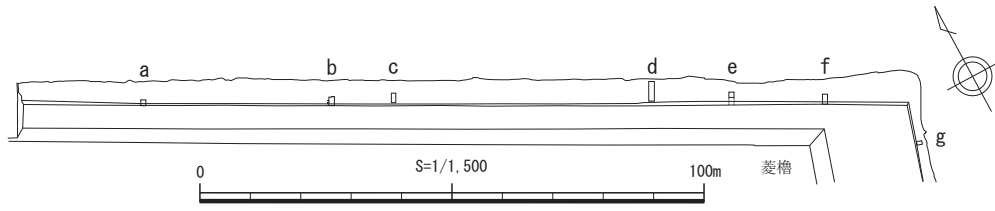


- | | | |
|-------------------|----------------------|---------------|
| 1 灰色土 (ブロック) | 6 灰色粘土 |] 内堀埋土等 (近代) |
| 2 黄褐色砂礫 | 7 灰色粘土 (礫混じる) | |
| 3 暗灰粘土 (黄褐色砂礫混じる) | 8 灰色シルト |] 石垣掘方埋土 (近世) |
| 4 灰色シルト | 9 暗黄灰色砂 | |
| 5 灰色砂 (鉄分含む) | 10 灰色粘土 (礫混じる) |] 地山 |
| | 11 灰色シルト (礫混じる、鉄分含む) | |

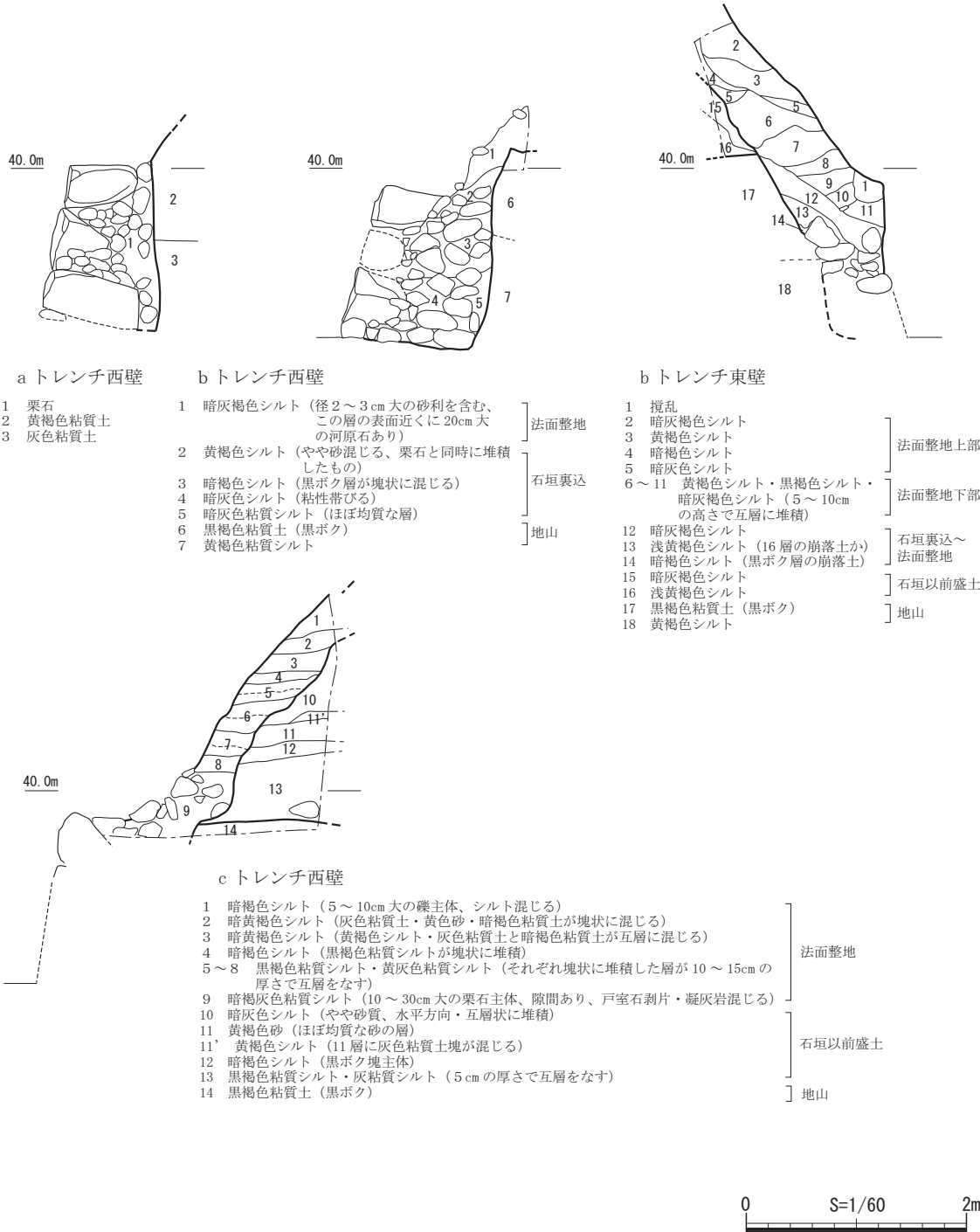
- | | |
|--------------------------|-----------------|
| 12 黄灰色砂 (礫混じる) |] 石垣掘方上部盛土 (近世) |
| 13 灰褐色シルト (第15層より多く礫を含む) | |
| 14 灰褐色砂礫 (鉄分含む) | |
| 15 灰褐色シルト (第13層より礫量は少ない) | |
| 16 淡灰褐色シルト (礫混じる) |] 石垣掘方埋土 (近世) |
| 17 オリーブ灰色シルト (礫混じる、地山質) | |
| 18 黄褐色砂礫 (地山質) |] 地山 |
| 19 灰褐色粘土 (礫混じる) | |
| 20 淡黄褐色砂礫 | |
| 21 淡黄灰色砂+淡灰褐色シルト | |
| 22 黄褐色砂礫 | |



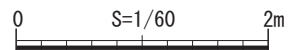
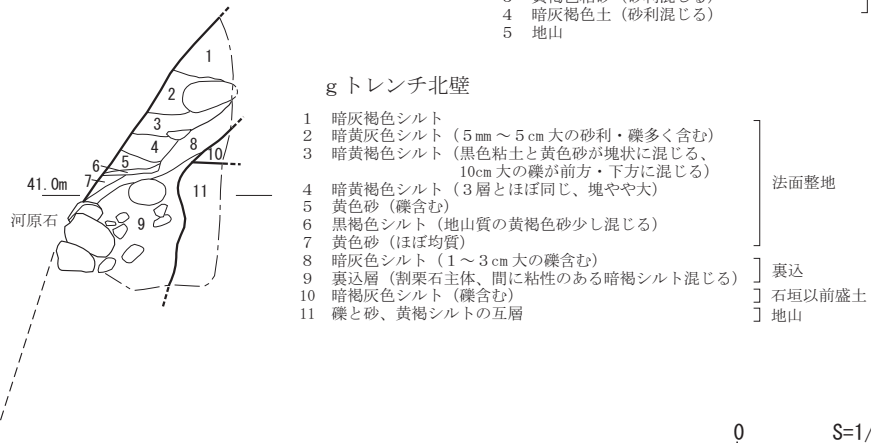
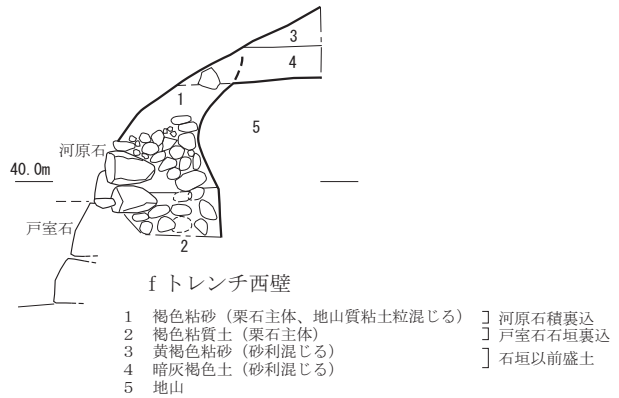
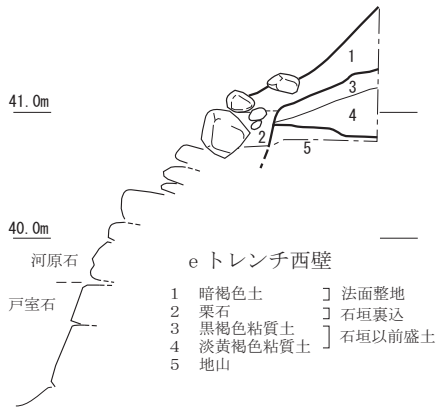
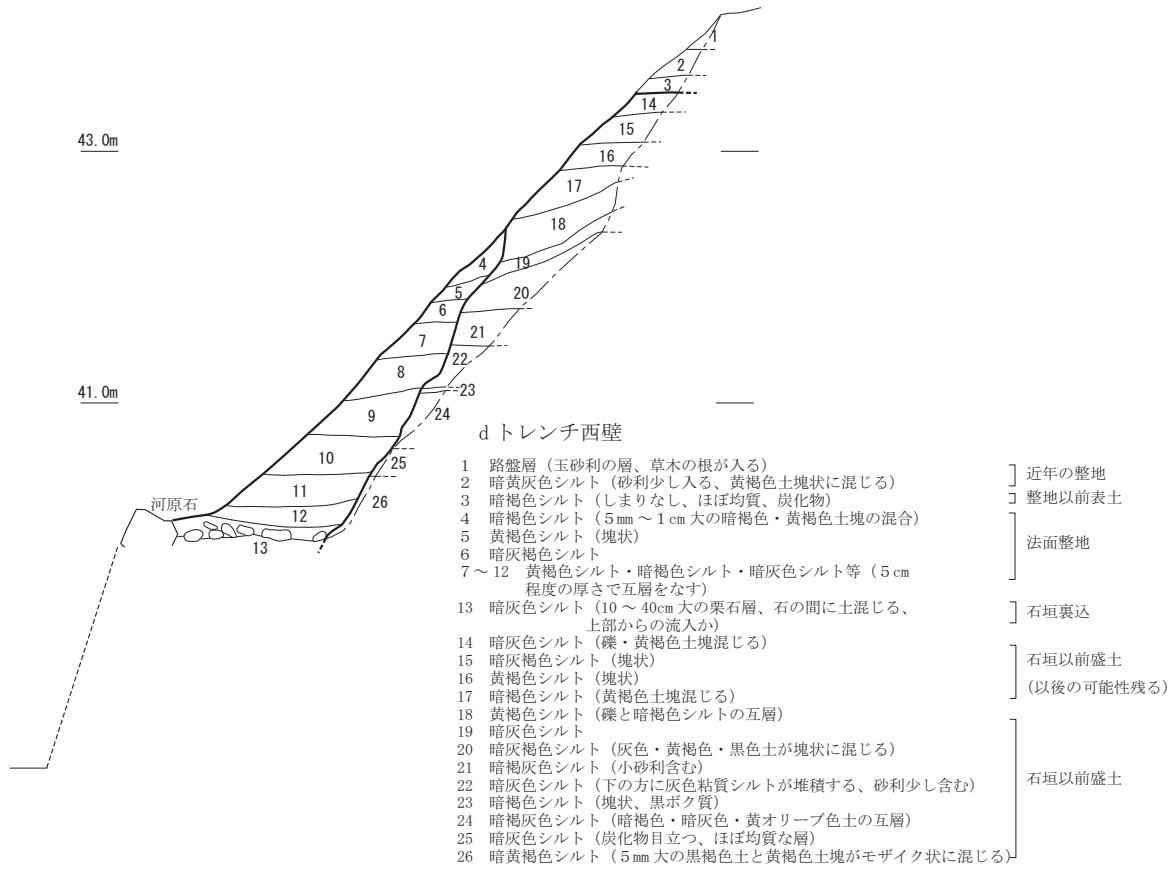
第59図 内堀中央部～東部屈曲部遺構図 (S=1/60、1/100)



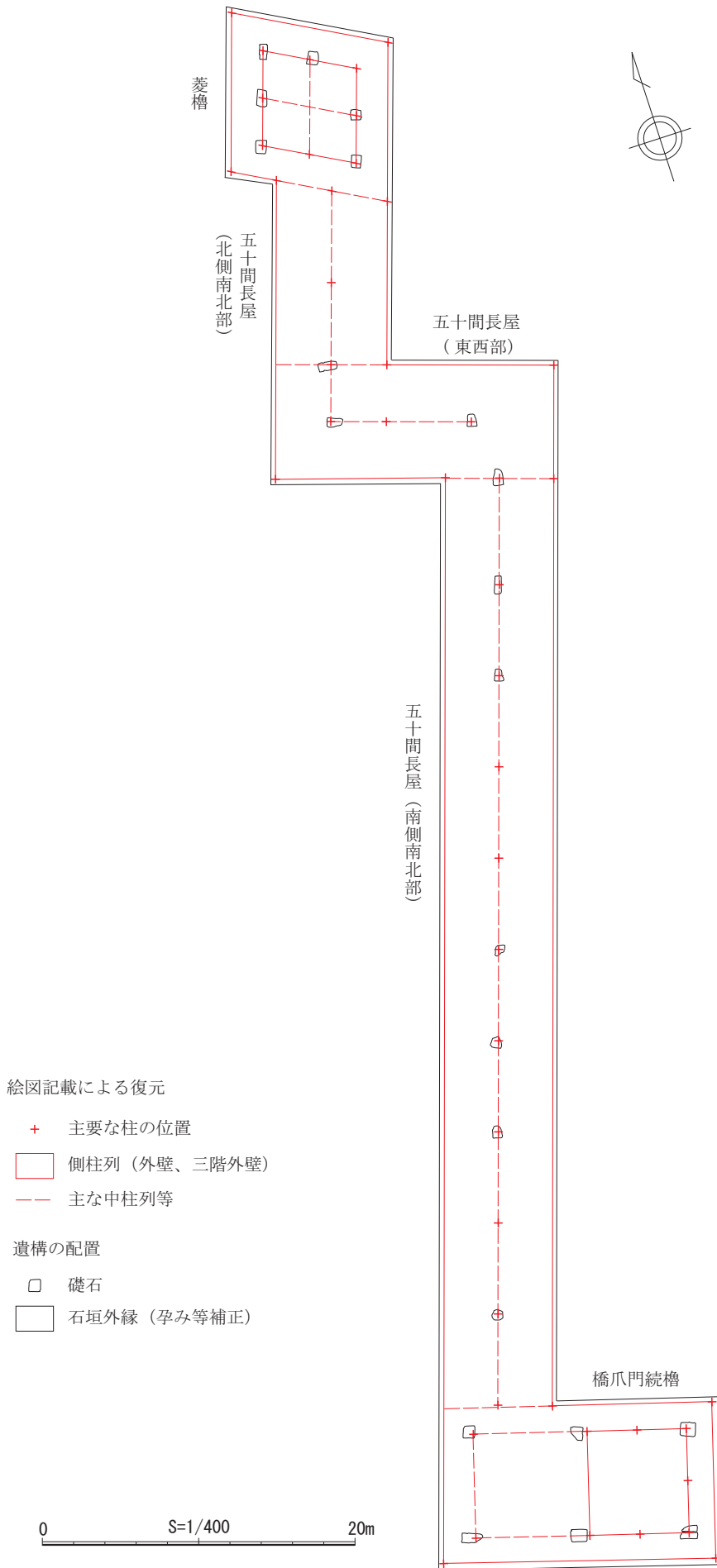
トレンチ配置略図 (1/1,500)



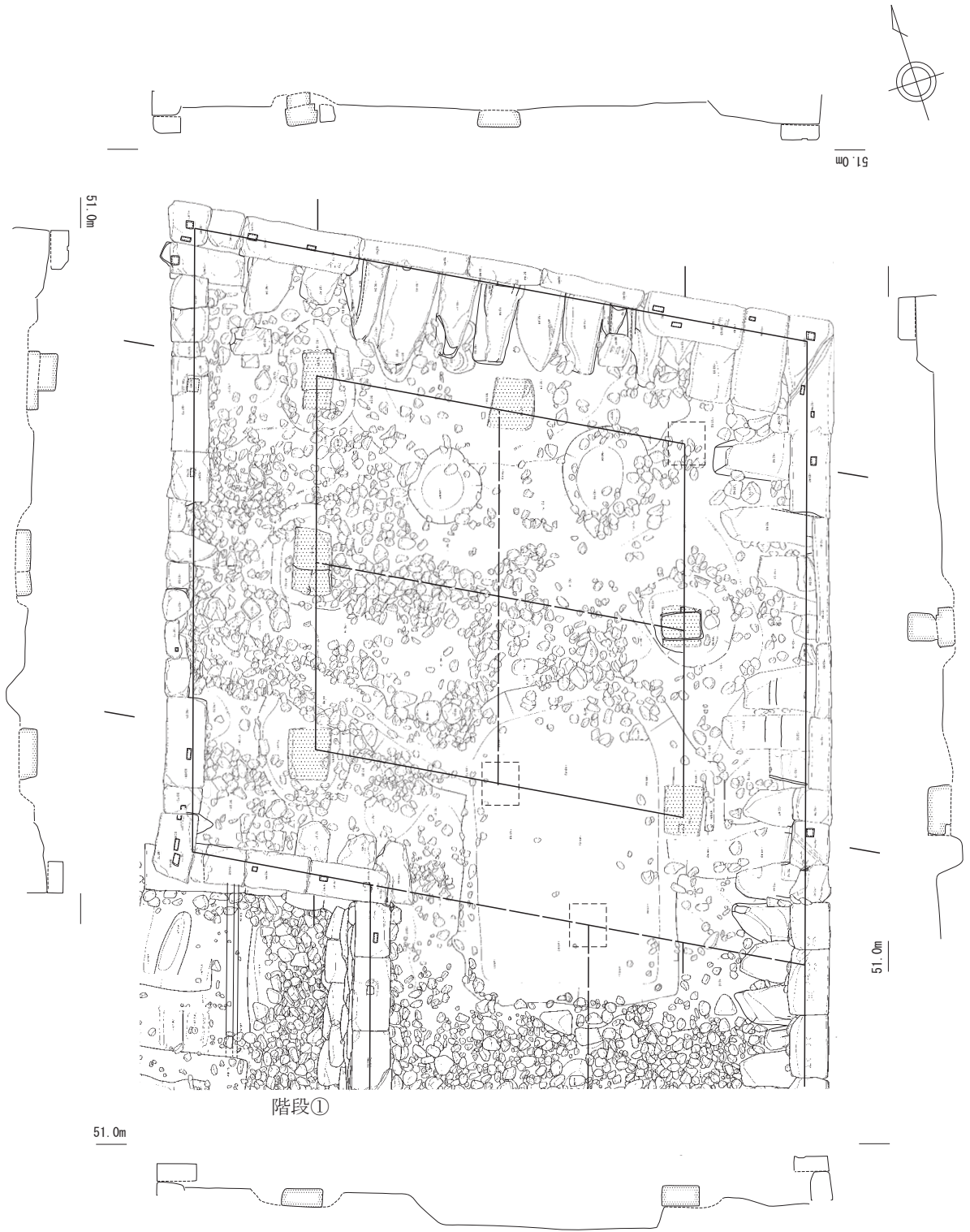
第60図 内堀北岸トレンチ土層断面図1 (S=1/60)



第 61 図 内堀北岸トレンチ土層断面図 2 (S=1/60)

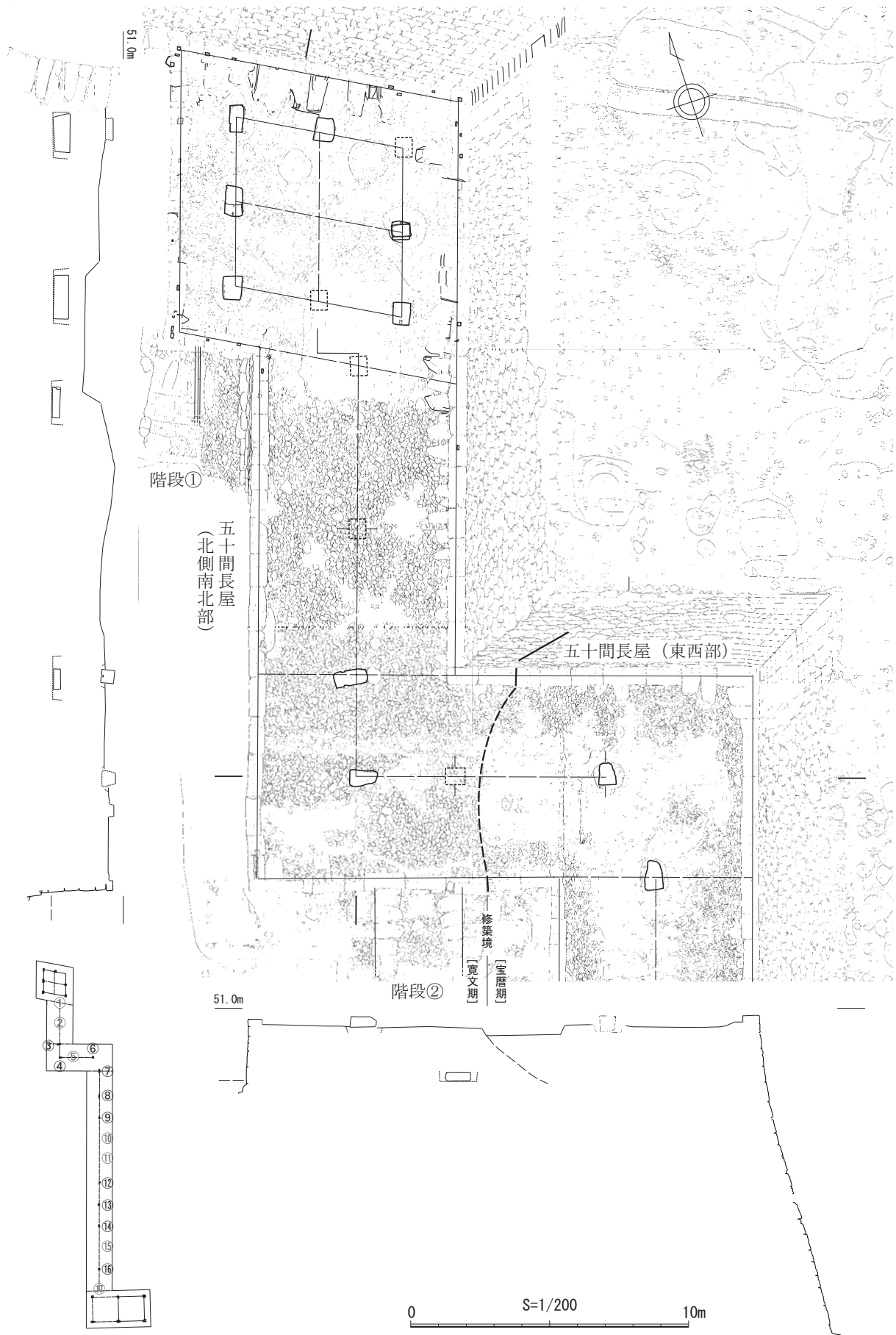


第 62 図 櫓（長屋）台遺構・絵図記載照合図（S=1/400）

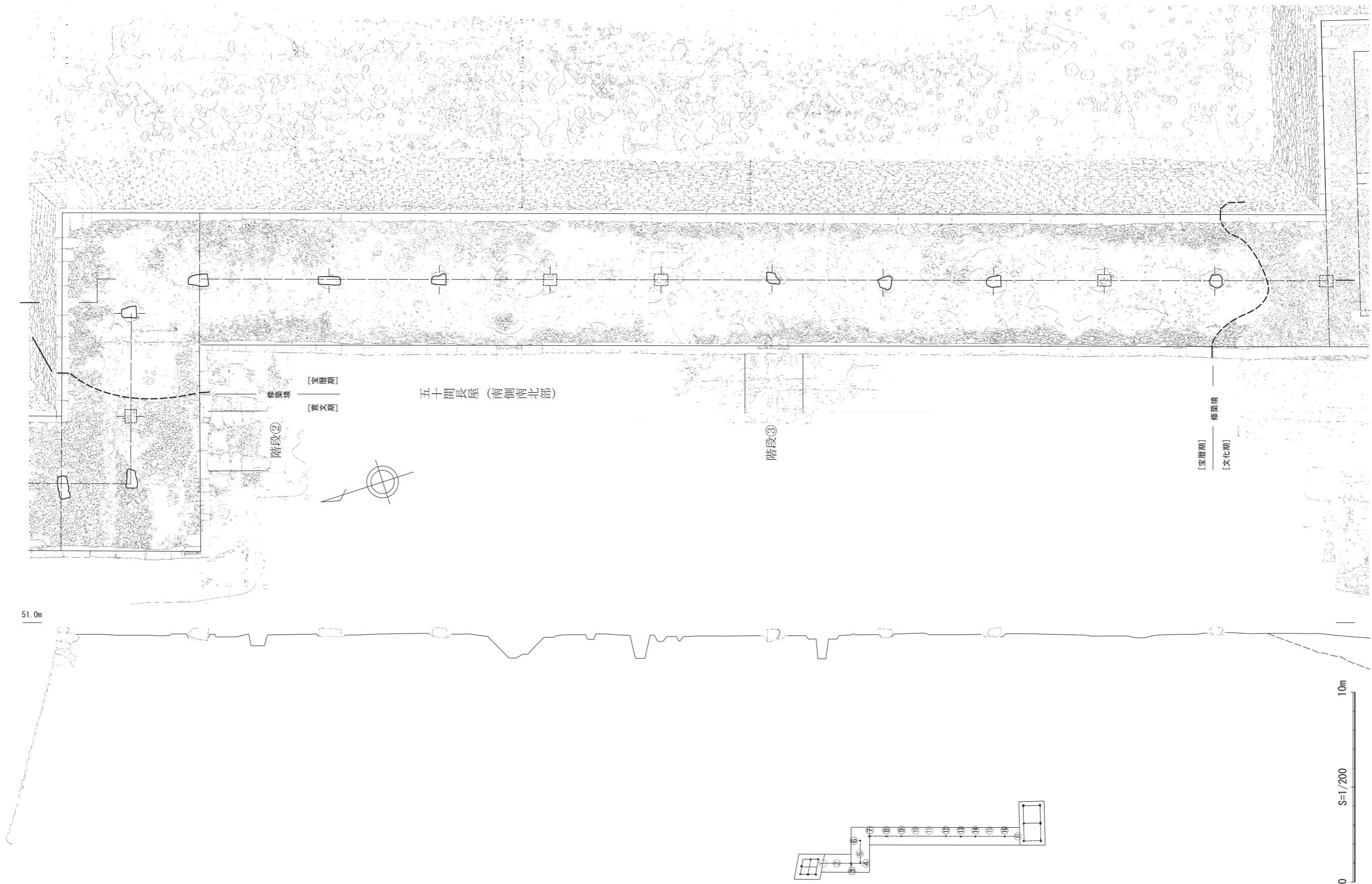


階段①

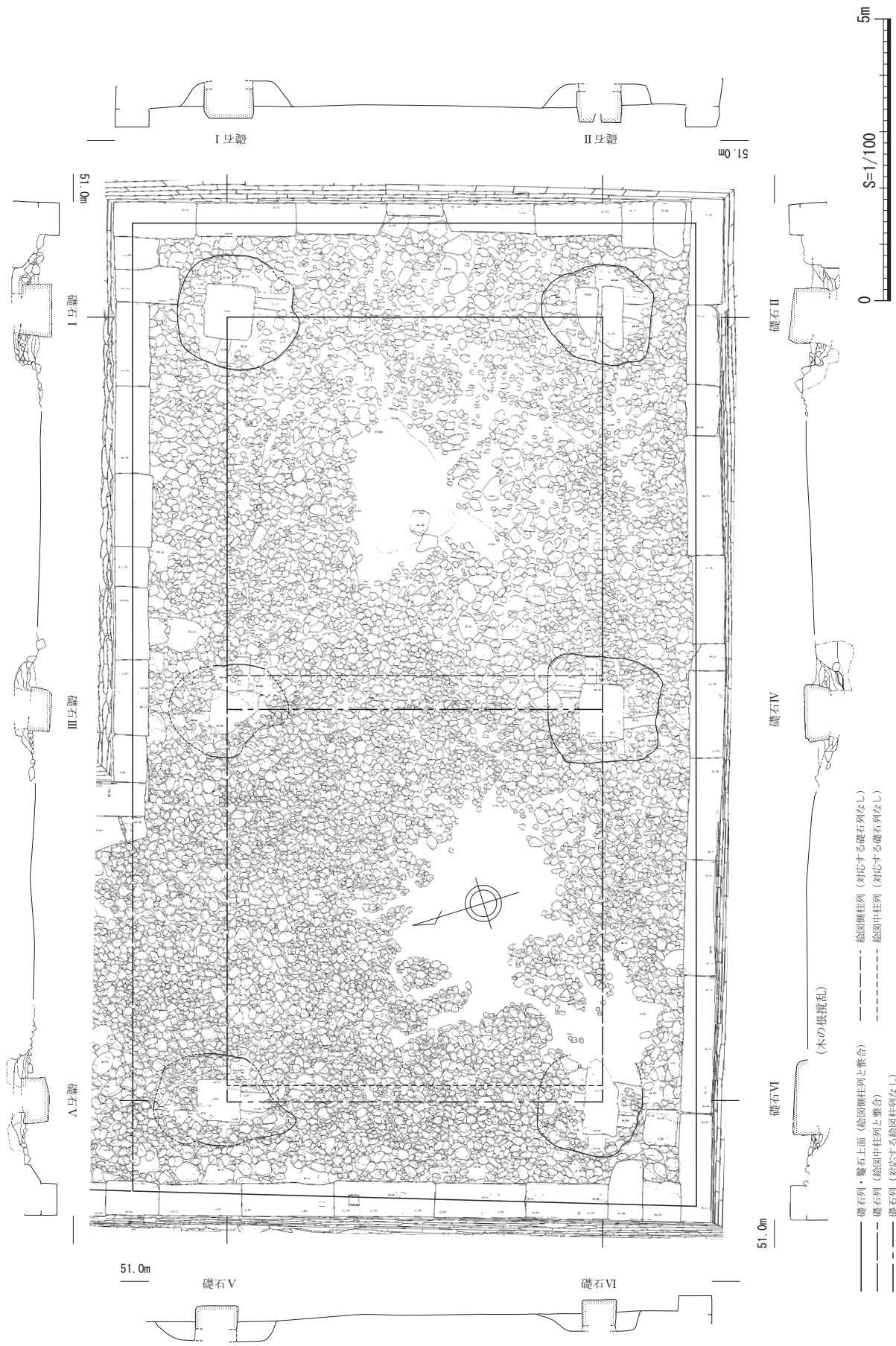
第 63 図 菱櫓遺構図 (S=1/100)



第 64 図 五十間長屋 (北半) 遺構図 (S=1/200)

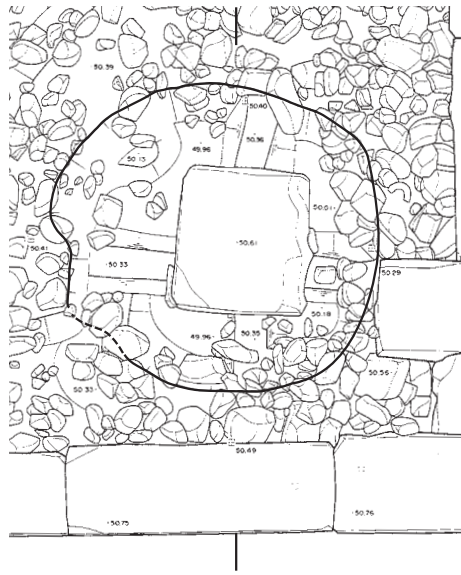


第 65 図 五十間長屋 (南半) 遺構図 (S=1/200)

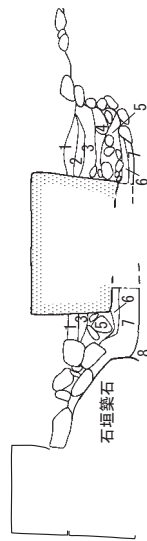


第66図 橋爪門続檣遺構図 (S=1/100)

礎石 I

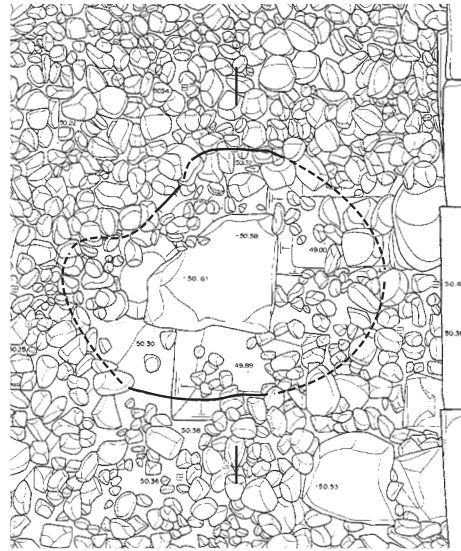


51.0m

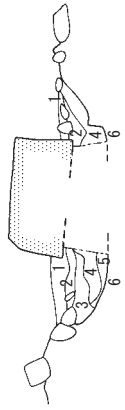


- 1 におい、黄褐色土 (砂質土、全体的に細かい礫混じる、固い面を持つ)
 - 2 暗褐色土 (砂質土、細かい径 1 cm位の礫混じる)
 - 3 暗褐色土 (砂質土、全体的に細かい礫混じり、所々に径 5 cm位の礫がある)
 - 4 暗褐色土 (細かい礫少し混じり、所々に径 3 cm位の礫がある)
 - 5 暗褐色土 (砂質土、径 5 ~ 10 cm位の礫が組み込まれている)
 - 6 明黄~明黄褐色土 (砂)
 - 7 暗褐色土 (粘質土、細かい礫混じる、明黄褐色の粘質土少量混じる)
 - 8 栗石 (礫+土 (黒褐色を呈し、脆い)+空溜)
- *1 ~ 7 掘方埋土

礎石 III

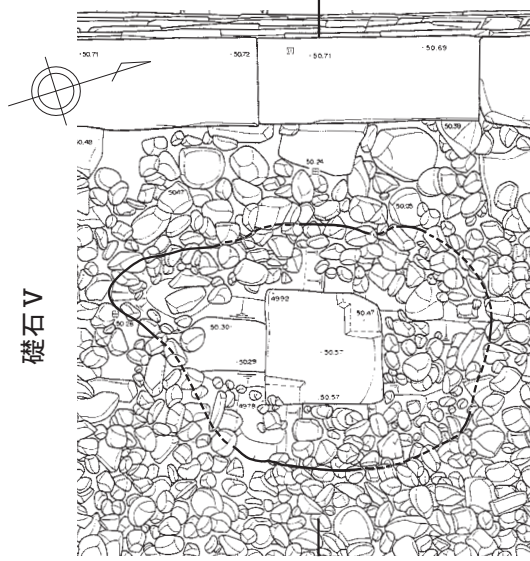


51.0m

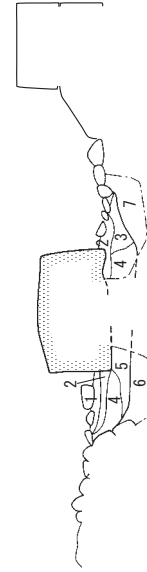


- 1 暗褐色土 (砂質土、細かい礫混じる、上面として固められている)
 - 2 明黄褐色土 (砂)
 - 3 褐色土 (粘質土、細かい礫混じる)
 - 4 暗褐色土 (約径 7 ~ 10 cm位の礫混じる)
 - 5 暗褐色土 (砂質土、細かい礫混じる、黄褐色の土所々混じる)
 - 6 黒褐色土 (粘質土、橋台築造時の作業面か)
- *1 ~ 5 掘方埋土

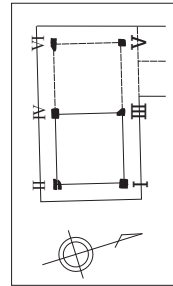
礎石 V



51.0m

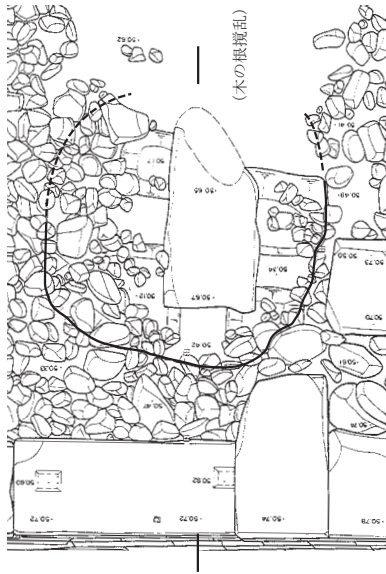


- 1 黒褐色土 (粘質土、全体的に細かい礫、径 2 cm位の礫少し混じる)
 - 2 明黄褐色土 (砂)
 - 3 暗褐色土 (粘質土、脆い)
 - 4 暗褐色土 (粘質土、径 5 ~ 7 cm位の礫混じる、礎石を置くために整えた層か)
 - 5 暗褐色土 (粘質土、径 5 ~ 10 cm位の礫全体的に混じる (礎石の根固め))
 - 6 暗褐色土 (粘質土、橋台築造時の作業面か)
 - 7 栗石 (礫+土 (黒褐色を呈し、脆い)+空溜)
- *1 ~ 5 掘方埋土

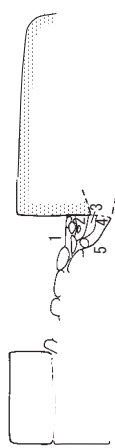


第 67 図 橋爪門続槽遺構図 (礎石北列) (S=1/50)

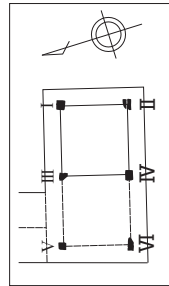
礎石Ⅵ



51.0m



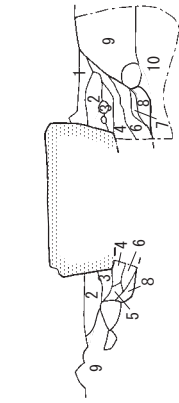
- 1 明黄褐色土 (砂質土 掘方上面を形成する固められた土)
 - 2 明黄褐色土 (砂)
 - 3 灰褐色土 (細かい礫全体的に混じる、礎石を直接受ける面)
 - 4 褐色土 (径2cm位の礫混じる)
 - 5 栗石 (礎石の直下は径10cm位の大きな礫が入り、土も固められる、礎石の東は礫+土 (脆い黒褐色土)+空洞)
- *1~4 掘方埋土



礎石Ⅳ

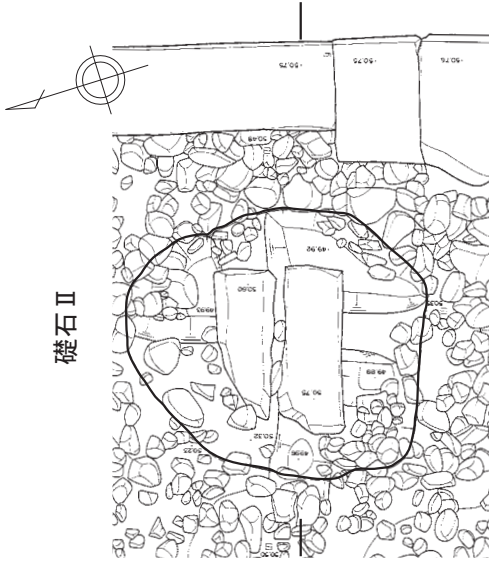


51.0m

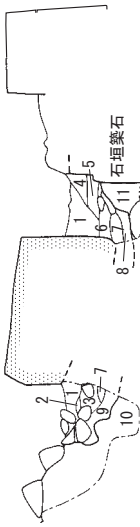


- 1 黄褐色土 (掘方上面を形成する固められた土 径1cm位の礫混じる)
 - 2 暗褐色土 (硬い土 径1cm以内の礫混じる)
 - 3 明黄褐色土 (砂)
 - 4 暗褐色土 (砂質土 径7~8cmの礫少し混じる)
 - 5 黄褐色土 (粘質土 所々に暗褐色の土混じる 全体的に細かい径5mm以内の礫混じる)
 - 6 暗褐色土 (砂質土)
 - 7 暗褐色土 (硬い土 径1cm以内の細かい礫混じる)
 - 8 褐色土 (粘質土 礫混じる)
 - 9 栗石 (礫+脆い灰褐色土)
 - 10 黒褐色土 (粘質土 径5cm以内の礫混じる、細かい礫全体的に混じる、続槽台築造時の作業面か)
- *1~8 掘方埋土

礎石Ⅱ



51.0m



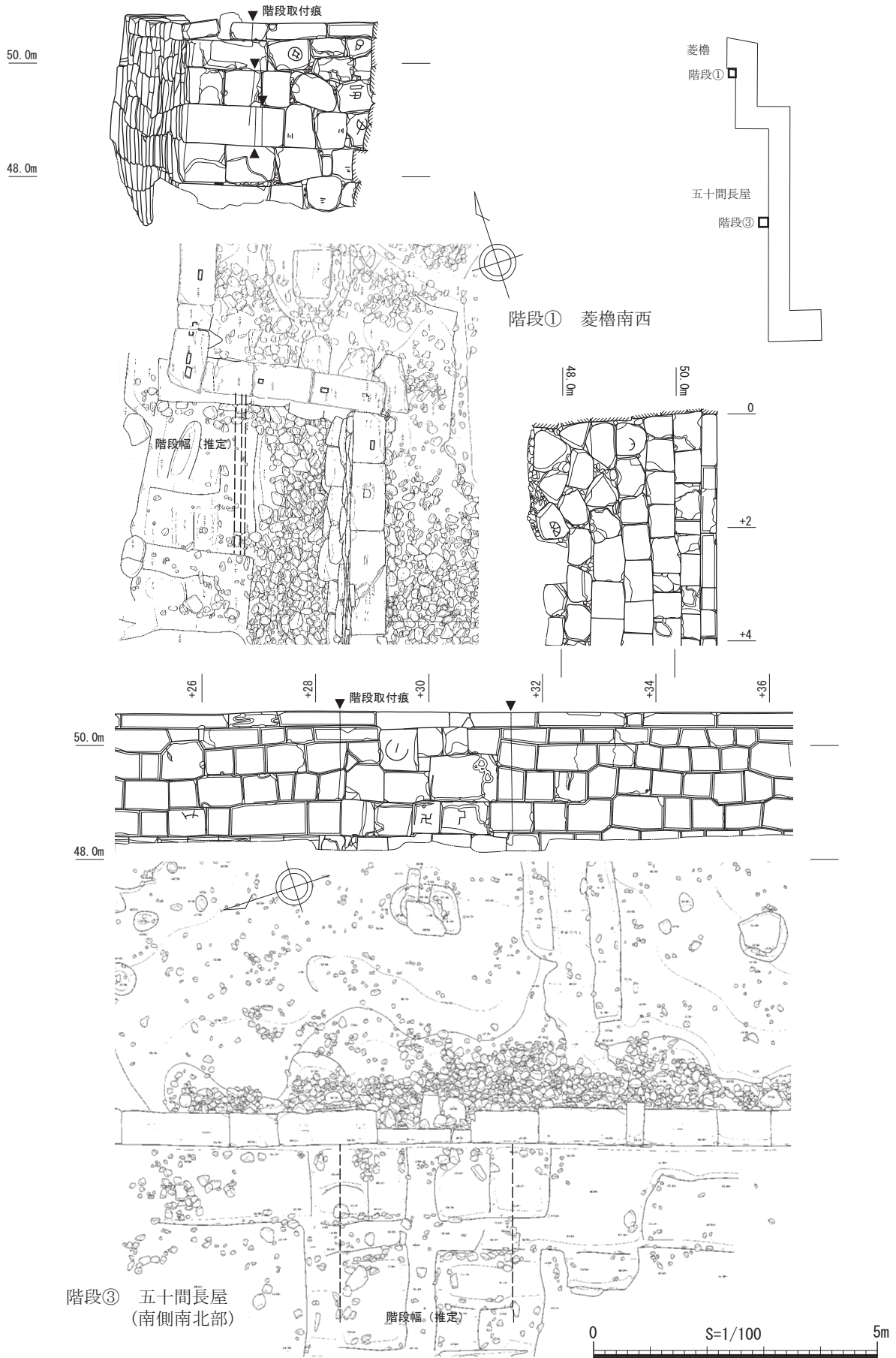
- 1 褐色土 (径1cm位の礫と径7~8cm位の礫混じる)
 - 2 明黄褐色土 (砂)
 - 3 褐色土 (砂質土 脆い、径7~8cm位の礫混じる)
 - 4 暗褐色土 (全体的に細かい礫が混じり、脆い)
 - 5 暗赤褐色土 (粘質土)
 - 6 暗褐色土 (全体的に細かい礫混じる)
 - 7 明黄褐色土 (砂)
 - 8 暗褐色土 (径5~8cm位の礫混じる、礎石を置くための根固め、整地層か)
 - 9 暗褐色土 (硬い土 直径1cm位の礫が全体的に混じる)
 - 10 栗石 (土 (黒褐色、脆い)+礫+空洞)
 - 11 栗石 (礫のみ 空洞)
- *1~9 掘方埋土



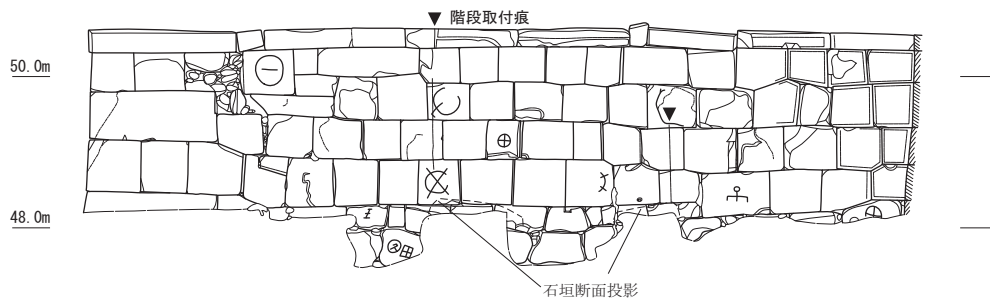
第 68 図 橋爪門続槽遺構図 (礎石南列) (S=1/50)



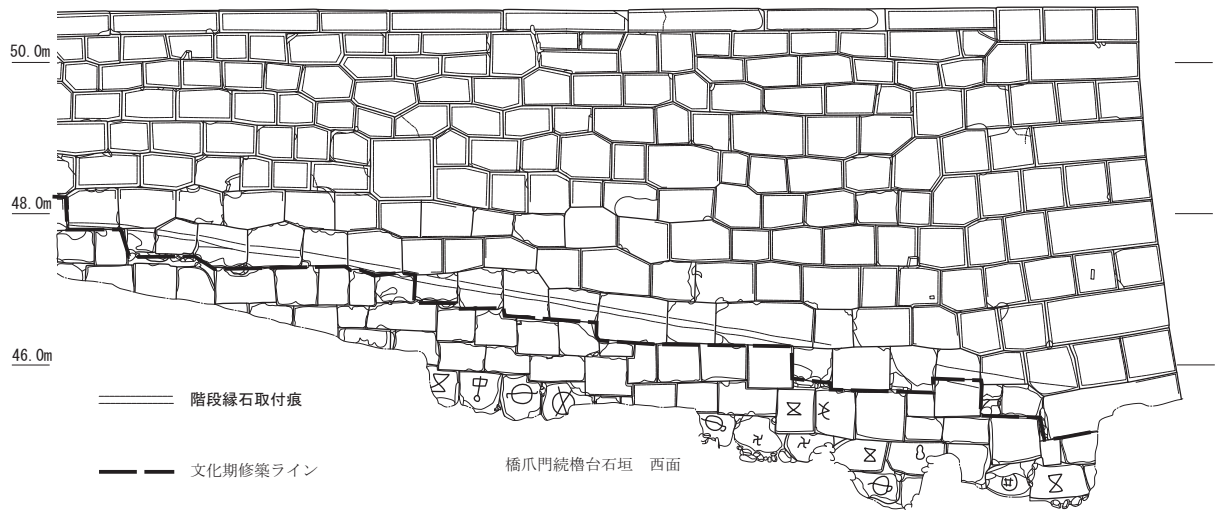
第 69 図 菱櫓～五十間長屋（北半）古段階（礎盤（根石））遺構図（S=1/200）



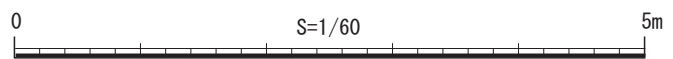
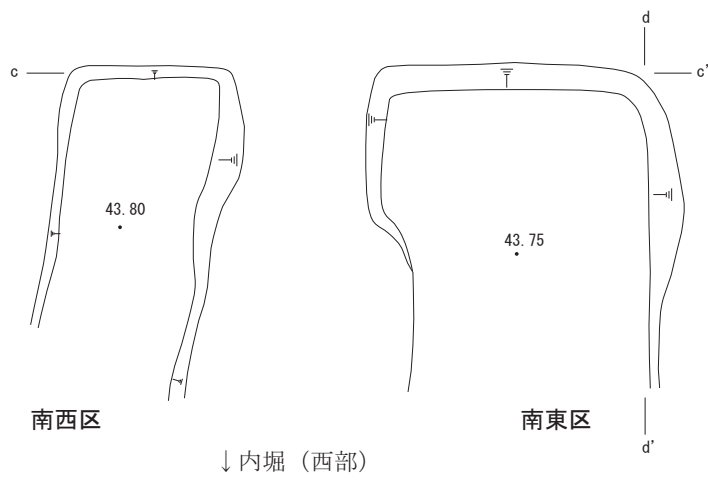
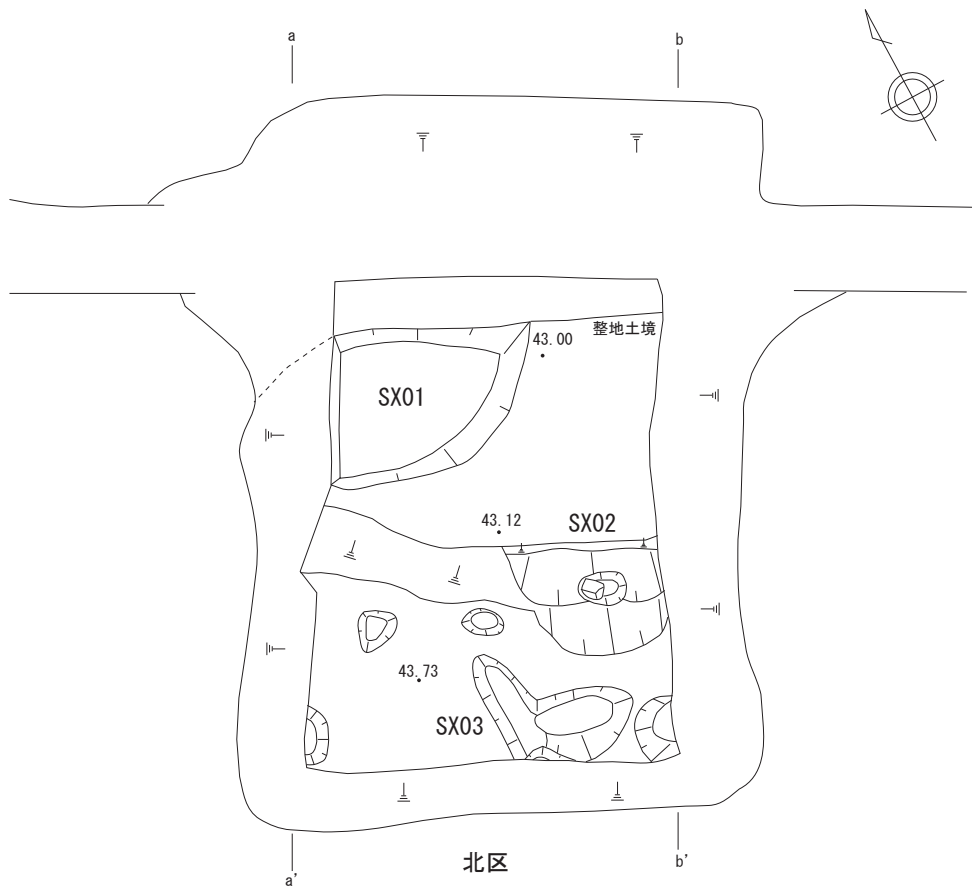
第70図 櫓(長屋)台取付階段遺構図1 (S=1/100)



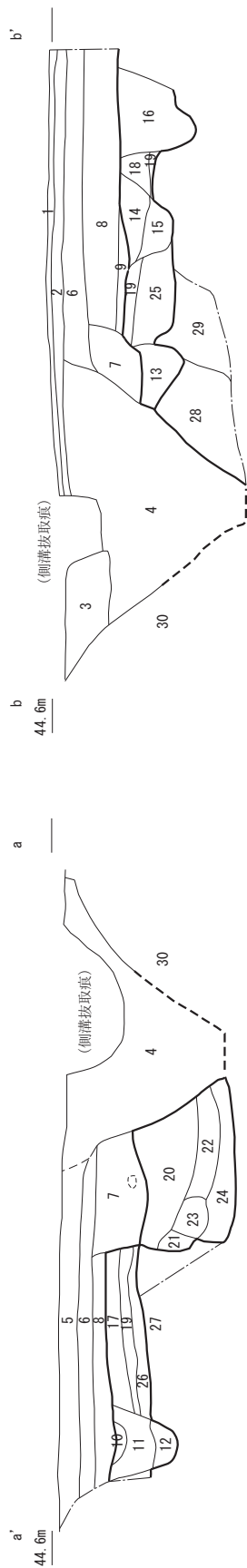
第 71 図 櫓（長屋）台取付階段遺構図 2 (S=1/100)



第72図 二ノ丸階段遺構図 (S=1/100)



第73図 三ノ丸第3次調査区平面図 (S=1/60)



北区 西壁

北区 東壁

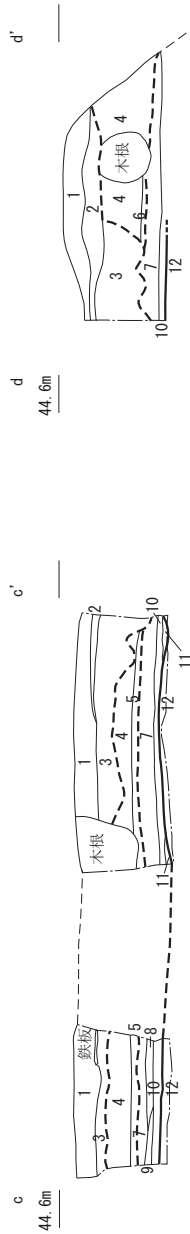
- 1 アスファルト
- 2 黄色シルト+碎石
- 3 黄色シルト(盛土)
- 4 黄褐～青灰粘質土(淡褐色砂、ピニール等含む)
- 5 黄色砂+茶褐色砂
- 6 暗灰色土
- 7 暗褐色砂質土(鉄管埋設)
- 8 褐灰色砂質土
- 9 褐色土(礫多く含む)
- 10 黒褐色土
- 11 暗灰褐色砂質土
- 12 暗灰色砂
- 13 灰褐色砂質土
- 14 灰褐色土(SX02)
- 15 褐色土(SX02)
- 16 暗灰褐色砂質土(礫多く含む)

- 17 褐色土(小礫多く含む)
- 18 暗褐色土(砂多く含む)
- 19 暗紫褐色土
- 20 褐色土(礫多く含む)
- 21 淡灰色粘質シルト(白色粘質土含む(漆喰?))
- 22 淡黄灰シルト
- 23 淡灰色粘質シルト
- 24 暗灰褐色粘砂質土(炭化物多く含む)
- 25 淡褐灰色砂
- 26 暗褐色土(硬く縮まる)
- 27 黄青灰色砂質土(灰色礫混じり)
- 28 淡灰黄色砂質土(礫混じり)
- 29 淡黄褐色砂質土(礫混じり)
- 30 黄褐色シルト(新丸脚盛土、詳細不明)

- 中層 上部整地土
- 中層 上部～下部遺構埋土 SX01 18C 後半の陶磁器出土
- 中層 下部遺構ないし整地土
- 中層 下部整地土
- 下層 近世初期? 整地土

上層：近代以降?

中層：～近世末? 上部遺構埋土



南西区・南東区 北壁

南東区 東壁

- 1 黒褐色土(表土、腐植土)
- 2 明黄色砂
- 3 暗褐色土+黄色砂ブロック(表土)
- 4 褐色土(礫少し含む)
- 5 暗黄褐色砂
- 6 暗灰褐色土(細かい炭化物、黄土粒少し含む)

- 7 褐色土(礫少し含む)
- 8 暗褐色土
- 9 暗褐色土(炭化物・黄土ブロック含む)
- 10 褐色土(硬い、上面整地面)
- 11 褐色土(10よりやや砂質)
- 12 黄褐色土

上層

上層ないし中層

中層

上部整地土

中層 下部整地土

下層



第74図 三ノ丸第3次調査区土層断面図 (S=1/60)